
Real Game

猫桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Real Game

【Nコード】

N9007N

【作者名】

猫桜

【あらすじ】

なにげなく生きてきた現実…それがもし誰かに仕組まれたプログラムの中の世界だったら…知ることもできず理解することも不可能
（Real Game） 起動開始！

8月26日「序章」(前書き)

稚拙な文章ですが……

どうぞ最後までお楽しみくだされませ。

8月26日～序章～

RealGame～序章～

ログイン照合

125815000人

起動開始。

-
-
-
-
-
-
-

目覚まし時計がうるさい…

いつも通り7時に起きる。

寝ぼけ眼なままテレビをつける。…同時に起床。

そのまままっすぐ下着とタオルをもってバスルームへ向かう。

熱くもなく冷たくもない丁度いい温度のシャワーを頭から浴びる。

長い髪を後ろに流し、顔面にお湯を受ける。

時間もそんなにないのでとりあえずはこんなもん！と頭が働き、手早くバスルームから出る。

身体と髪を拭き、下着をつける。真っ黒で飾り気のないシンプルな下着だ。

「別に誰かに見せるわけじゃないしな…」

彼女はドライヤーで髪を乾かしながらぼーっとテレビを見ている。
「昨夜未明…新宿駅南口で若い男性がなにかに刺され重症に…」

朝から嫌なニュースだ…と普通はそう思うのだが…

「またかあ…」

彼女は下地を作りながらぼあくとしている。

ここ一週間、ほぼ毎日のように殺傷事件が起きているので、別に驚きはしなくなったのだ。

安物のファンデを適当に塗り、目元の作業にとりかかる。

チンッ！

…と先ほどセットしておいたトースターが鳴る。

彼女は冷蔵庫からマーガリンを取り出し、マグカップにインスタントコーヒーを煎れ朝食を食べる準備をする。

目は食べてからでいいや…とりあえずご飯。

焼けたばかりの食パンにマーガリンを惜しみなく塗る。そのうえにたっぷりとハチミツをかける。

「いただきます…」

幸せな顔をしながらゆっくりと甘すぎるパンを頬張る。

なんの変わりもないいつも通りの朝食風景だ。
ズズズ…

コーヒーをすすする音が聞こえる。彼女が食事を終えた音だ。

口元には既に煙草がくわえられている。銘柄はマルボロ^{ソフト}赤。

彼女曰く…

「アカマルは神！これよりうまい煙草なんてしらねえ！」
だそうだ…。

安物のオイルライターで火をつけ、深く煙を吸い込む。

「今日も暑そうだなあ……」

窓を見れば、すでに外は昼間並みに明るく、暑さも伝わってきている。

時計をちらっとみる。

驚愕！

「やばー！8時！」

強引に煙草を灰皿に押し付けて乱暴にアイライン、アイシャドウ、マスカラ…そして最後にうつすら頬に暖色のチークをいれた！

その間実に１０分！神業とも呼べるスピードで化粧は完了した。

間髪いれずにブラウス、パンスト、パンツスーツを着込み、色んなものが入ったバッグを持ち玄関へ走った！

８月２６日

カツカツカツカツ…

とパンプスの音を響かせながら彼女は最寄りの高田馬場駅へ走る！

前にはゆっくり通勤しているサラリーマン風の男性が歩いている。

ぶつかるかもしれない…

ドンッ！

思った通り軽く接触してしまう…

「すっすみません！急いでたもので…」

「構いませんよ…あ…早く行かないと電車が…」

「あ！親切にどうもです！」

同時に彼女は走り出す！

「いつも通り…ククク…」

不気味に笑う男になど気付くはずもなく、彼女はなんとか今発進しようとしている電車に乗り込んだ。

（朝からこんなバタバタとか…ついてないなあ…）

壁に寄りかかり呼吸を整える。彼女が降りるのは新宿駅…それまでは小休止と言ったところだろうか。

新宿駅に到着、彼女は人混みに紛れながら南口へ向かう。

時間を確認…

（やば！腕時計してくるの忘れた！）

仕方なくバッグから携帯を取り出し確認する。

「え？8時…？」

時計をみたらまだ8時…確実におかしい。家をでたのはまさに8時過ぎだった…

携帯壊れた？

さりげなく隣を歩いている人の腕時計を見る…

やはり8時を指している…

あれ？

どういうこと？

彼女はしばらく考えていたがやはりそれ以上深く考えても無駄だと悟った。

9時までには会社に着けばいいので、なんだか得したような気分だとすぐに前向きに考える事に至った。

（マックで暇つぶそ…）

彼女は駅から出た。

8月26日

——
渡辺^{わたなべ}
玲依^{れい}

性別：女

年齢：23

職業：OL

身長：157センチ

体重：48キロ！（本人曰く）

力：C 頭脳：C

魅力：A 潜在能力：測定不能

ランキング：125815000中>365位

彼女（――渡辺 玲依 以後、玲依）はマックでアイスコーヒ―をオーダーし、二階の喫煙席に座り窓から外を見ている。

灰皿には吸いかけの煙草からゆっくり煙が立ち上っている。

テーブルの上には携帯を開いたまま置き、もう時間を間違えないと主張しているようだ。

現在… 8時15分…

まだまだ暇…

会社はすでにこの場所からも見えている。タイムカードは5分前で
良い…

（少し化粧治すかな？）

バッグから手鏡を取りだそうとして…

ふと…

バッグの中に見慣れないものが入っているのに気付いた。

「…名刺？真つ黒だ…」
名刺のような紙…

ちょっと良い紙を使っているらしく質感は素晴らしい…

裏を見ると

R e a l g a m e

…とだけ書いてある。

（なんだっけこれ…？どっかの会員証だったかな…）

玲依には思い当たる節がなく、若干の違和感を覚えつつも、とりあえず財布にしまっておいた。

「お！渡辺さん！」

後ろから元気の良い男性の声がある。

玲依はその声の方へ振り向いた。

—— 佐藤 隆文
さとう たかふみ

性別：男

年齢：21

職業：営業マン

身長：175センチ

体重：86キロ

力：A 頭脳：C

魅力：B 潜在能力：B

ランキング：125815000中>29764553位

清潔感の溢れる黒髪の短髪、がっちりとした体育会系の身体を無理やりスーツに押し込んだような男。

太い眉毛はキリっと釣りあがり、ややパツチリな目とは不釣り合いなのが特徴だ。

だが決してイケメンと呼べるほどの男前ではない。強いて言えば普通である。

「あ！佐藤君じゃない？」

「朝早いつすねー！渡辺さんらしくないっすよ？」

「朝一で喧嘩売ってるの？」

「ちつちがいますよ！いついや…その…珍しいなあ」と思っ

「全く…隣座れば？」

「はいっ！失礼しますっ」

彼、佐藤 隆文は玲依の会社の後輩、高校時代の後輩…となにかと縁があるのだ。

彼が玲依の事を名前ではなく、渡辺さんと呼ぶのは、少なからず尊

敬しているから…と玲依は解釈している。

「煙草いいつか？」

「どうぞ」

隆文も玲依の影響を受けて煙草を吸っている。銘柄はマルボロのミディウム…アカマルは彼にとってはきつすぎるらしい。

釣られて玲依も新しい煙草に火をつけ、軽く吸ってからコーヒーをすすった。

時刻：8時30分…

まだ出勤までは時間がある。

玲依と隆文は世間話をしながら、時間つぶしをしている。

隆文がきてからは、玲依へのドリンクは彼が支払いしている…

長い付き合いの過程で自然に形成された主従関係だからこそである。

「ねえ、佐藤君？これなんの会員証か知ってる？」

玲依は先ほど見つけた名刺を隆文にみせた。

すると意外なことに、隆文はそれを見て驚いている。

「…なんで渡辺さんも持ってるんすか？」

隆文も自分の財布からその真つ黒な名刺…裏にはReal gameと書かれている同じものを見せた。

「なんだっけ？これ…あたし思い出せなくて…」

「ぼつ僕もちよつとわからないんすよ…朝偶然見つけて、思い出せなかったのとおりあえず持ってたんす」

改めて二人はその真つ黒な名刺を見ながら首を傾げていた。

「もうそろそろいこつかあ…」

「あゝもう丁度良いくらいですね！あ…渡辺さんのやつ、僕片しときますんで…」

「おゝ気が利くねゝありがとう」

玲依は先にマックから出て外で隆文を待つことにした。

「お待たせしたっす！いきましょつか！」

玲依は笑顔で頷き、会社へ歩き出す。まあ時間は余裕すぎるだろうと思っていたが、念のために携帯から時間を見た。

驚愕！

時刻：8時15分…

玲依はかなり動揺し、携帯を落としてしまった…

隆文は玲依の異変に気付き、すかさず携帯を拾ってあげた。

「落しましたよ？渡辺さん疲れてるんす？」

「……………」

「どうしたんすか？顔が真っ青っすよ？」

「……………時間……………」

「え？時間すか？今はもう45分……………ええええええ！！！！15分に戻ってるす！」

隆文も時間の異変に気付いた…玲依と同様に顔を真っ青にしてその場から一步も動けなくなっている…

「……………一体どうなってるの？」

「……………わかんないっす……………」

「佐藤君……………」

「はい？」

「ちょっと手繋いでもいいかな？あたしなんだか怖くなっちゃって…」

「いいですよ！渡辺さんなら大歓迎！じゃなくて光栄！じゃなくて…もちろんっす！」

玲依はさすがに二回もこの不思議な現象をみてしまったので、なにか得体の知れない恐怖を感じ、身体を震わせている。

冷や汗も掻いているのでブラウスから下着が少し透けている。

「…渡辺さん今日黒っすか？」

「おまえゝなにみとんねん！」

ゴスッ！

玲依の正拳突きが隆文のレバーに刺さった！

「時間戻ってるっすね…」

「そうだね…」

あちこちでもその異変に気が付き騒ぎが置き始めた。玲依の同僚たちも出勤してきていたらしく、時計を見て驚愕している。

マツクの店員も時計をみてびっくりしている。

一体なにが起きているのか…

（テレビをみたらなにかわかるかもしれない…）

玲依は携帯をひらきワンセグを起動させる。

どうやらこの局でも臨時ニュースが流れている。

「たった今入ったニュースです。全国にある時計という時計が壊れました…」

（なんというニュースだ…）

「時報も妨害電波が飛び、まったく応答しません。現在の時刻は不明。これは悪質なテロと断定して警視庁は操作を…」

「困ったっすね。これじゃあ出勤どころじゃないっすよ。」

「ほんとだよ…ってか全国的にこうなってるみたいだね…どんなテロだよ！」

二人はとりあえず先ほどのマックに移動し、落ち着くためにまたドリンクをオーダーし、2階の窓際の席へ座った。

—
神藤 治臣
しんどう はるおみ

性別：男

年齢：27

職業：副社長

身長：177センチ

体重：68キロ

力：B
頭脳：S

魅力：A
潜在能力：C

ランキング：125815000中>298位

カタカタカタカタ…

ひたすらキーボードを叩く音が響く。ディスプレイには見たこともない数字の羅列、表、グラフ…様々な数学的要素ななにかが映っている。

右手でキーボードを打ちまくり、左手では電卓を弾く。なにかを計算しているような光景だ。

彼（神藤 治臣、以後、治臣）は玲依や隆文が勤めている会社の副社長だ。場所は副社長室。

テーブルの上には高そうなドリップコーヒーの出がらしの山、見たこともない水の瓶、そしてなぜこの場においてあると突っ込みを入れたくなるマヨネーズのチューブの空が散乱している。

時刻は7時15分。

玲依がシャワーを浴びている頃だ。

治臣はどうやら徹夜でなにかの計算をしていたらしい。目の下には大きなクマを作り、眠たそうで気だるそうな目でずくっとなにかを打ち込んでいる。

見た目は若い。茶髪のやや長めな髪形。一見すると歌舞伎町にいなうなホ。トにも見える。顔はやや細めの眉毛に丁度よく合う猫目。

身体は運動不足のような細さ。まるでもやしのように白い肌が特徴だ。

どちらかといえば普通にイケメンの部類に入るだろう。かなり高そうなシルクのスーツ以上の存在感を彷彿させる雰囲気である。

ぶつぶつ…

と独り言を言いながら何度も何度も計算？のようなものを繰り返している。

そのことから完璧主義者な性格は伝わってくる。

慶応大学を卒業後すぐにこの会社【株式会社ツバサ商事】に就職。

営業課の平社員であったが、彼の営業成績がかなり優秀で入社してわずか一年で営業部長に就任。

それから3年間営業部長として勤務。…だがその人望や、営業成績（彼の功績により会社は中野の2等地から新宿南口の1等地へ移転、事業を拡大し株価も上昇）により、一気に副社長へ昇進した。

生まれ着いての力リスマ性や、完璧主義、そして計算尽くされたプレゼン。まさに神童と名乗るに相応しい男なのだ。

隆文とは営業部長時代、上司としてしごいたこともあり、一般の営業マンよりも絡みが多いのだ。

玲依とは特に絡みがなく、おそらく話すらしたこともないほど縁がない人物だ。

治臣はチラッと時間をみる。腕につけられている金無垢のロレッ。スだ。

「もう8時になるか…急がないと…」

更にスピードがあがる手の動き。そして更に数を増やしていくマヨネーズのチューブの空…

現在8時15分…

そして…最後に

エンターを押す音が激しく響いた…

8月26日、その2

「とりあえず出勤だけしとかない？」

「そっすね。マックいてもなににもならないし…いつも通り仕事はしないとすよね」

玲依と隆文はあえて平常を装い普段どおり出勤することにした。

マックを後にし、二人は会社へ歩き出した。そこら中から落胆や歓喜の声。なにかを叫ぶ声…様々な人々が携帯を見ながらその場で止まっている。

「たぶん…いつも通り会社に着いたら誰かしらいるよ…」

「そっそっすよね！ただ時間がわからないだけです！いつも通り仕事は変わらないですよ！」

二人は株式会社ツバサ商事の正面玄関へ到着した。

会社の自動ドアが開く。

「おはようございますー！」

…と、いつも通り挨拶をしてくる受付嬢たちはいない…

ガランと閑散とした一階のロビー…

いつもはこれくらいの時間なら誰かしら居て、賑やかなフロアなのだが、今日は玲依と隆文以外誰もいない…

これだけでもかなり奇妙な光景なのだが、足音だけが響く広いフロアは妙に不気味な雰囲気醸し出している。
エレベーターの前に並ぶ二人…

玲依は5階の秘書課。隆文は3階の営業課のボタンを押した。

「あははは…誰もいないねえ！」

「そっすねえ…今日は会社休みなんですかねえ？」

「いやいや！上司から連絡もきてないし！」

「ですよ〜！すみません…」

チンッ！

8階の副社長室で止まっていたエレベーターが1階へ着き、扉が開

いた。

「誰かいますように…」

「全くつす…」

二人は躊躇なくエレベーターに乗り込んだ。

いつもならエレベーターの中でも社内放送（。。。課の。。。さうん、至急会議室までお越しください）的な？）が聞こえるのだが…

やはり今日は終始無音。静寂とも呼べる無音の静けさ…ただエレベーターが上昇する音だけが虚しく響いている。

「なんか静か過ぎて…変だよね…」

「ですねえ…」

チンっ！

まずは3階の営業課へ着き、エレベーターの扉が開く。

「じゃ！僕はここで～！またです～」

「はい」

ここで玲依と隆文は別れた。

玲依は閉まるのボタンを押した。

先ほどまで話をしていた隆文がいなくなって、エレベーターの中で一人で立っている玲依。

（なんかいきなり不安感じてきたぞぉ！）

いつもは誰かしら乗っていて、やばい時はギュウギュウ詰めのエレベーターだが、玲依一人でいるとこんな狭い空間でもまるで、広大な草原を思わせるほど不気味に広く感じる。

あと2階くらいものの数秒で着くのだが。こんな緊迫しているような状況では1秒が数分にも思えるくらいに時間が長く感じる。

「なんか怖いなあ……」

…と、思わず口に出してしまうほどに玲依はなにか得体の知れない恐怖を感じていた。

チンっ！

5階の秘書課に到着し、エレベーターの扉が開いた。

コンコンっ！

いつもは秘書課の入り口の扉なんてノックせずに入るのだが…もしかしたら誰かいるかもしれない…

誰かが「はい」と返事をしてくれるかもしれないと、期待して今日はノックしてみた…

だが、やはり返事はない…

しぶしぶ玲依は秘書課の入り口の扉を開いた。

ガチャッ！

「…おはよう……ございませ……」

いつもは元気いっぱいな声を出してあいさつをして入るのだが、やはり今日の玲依は声が小さく震えている。

玲依の目の前には…

秘書課のデスクが綺麗に並んでいる。部屋の中央あたりには玲依の上司（通称：姑）のデスクがある。この会社の秘書は総勢で20名かなりの数なのだが、副社長の仕事をサポートするのが大半。

それくらいの人数がいないと治臣を完璧にサポートしきれないほどの仕事量だからだ。

玲依のデスクは窓際…

おそらく見た目と秘書検定1級だけで採用されたようなもんなので、彼女へ仕事の期待はなくおそらく永久的に出世はない！…という配慮であろう。

部屋を見渡す玲依。

予想通り…

誰もいない…

「ですよ〜…」

玲依は泣きそうな顔をしながらとりあえずタイムカードを押してみる。

ここ数週間、出勤5分前の記録がずらりと並ぶタイムカード。

しかし今日は…

数字なのかなんなのかわからないもの…

*****↑こんな感じの記号が押された。

「嘘…」

やはり時計が壊れているため、タイムカードを押す機械も壊れているようだ…

「はあ…なんかモチベ下がった…」

玲依の最近の自慢。タイムカードに8:55の連続記録。実はなにげに当然のことなのだが、学生時代彼女は遅刻常習犯（通称：パン食いながら走ってくるツンデレ娘）だったので、彼女にしては快拳とも呼べる記録なのであった。

ションボリと力無く、玲依は自分のデスクへ向かい椅子へ腰掛ける。

「ええい！こうなったら意地でもいつも通り仕事してやる！！！」

玲依はいつも通りパソコンを起動させた。

営業課の入り口の扉の前に立つ隆文。

「ふう…」

一呼吸置いて隆文はなにか覚悟を決めた！

ガチャッ
…

静寂な空間に扉が開かれる音が響く
…

カタッ…カタカタ…カタッ…

スムーズじゃないキーボードを打つ音が秘書課に響いている。

玲依はキーボード操作が苦手で、未だにブラインドタッチはおろか、たまにAキーが迷子になるほど不器用なのだ。

だが、そこは運？と呼べる彼女の人並み外れた勘の良さですぐに場所を当てるのでなんとかフォローできているのだ。

仕事としてどうなのそれ？という突っ込みも多々あるが、意外に与えられた仕事は期間内にこなすため、同僚たちは彼女の頑張りには評価していた。

いつもの癖で、ある程度書類の元になるワードを一区切りして時計をみた。

あれ？

時刻は10時半を指している。

外の具合もなんとなくそんな感じで、お腹の具合も言われてみればそんな時間だと錯覚する。

おそらくこの時間は正確ではない…時計が壊れる事件が起きたんだから当然だ。

やっぱりずっと仕事してても誰もくる気配がない…

（まあ…誰もいないし…一服しよつと…）

彼女なりに場を和ませるために試行錯誤した結果…

秘書課の喫煙ルームへ足を伸ばすことに決定した。

一人ぼっちの一服タイム…

いつもは仲が良い同僚とガールズトークをしながら一服するのだが、この会社に入社した当時の時のような孤独感を味わう玲依。

（懐かしいなあ…）

しみじみと入社当時の事を思い出す。

（確か最初は雑用…お茶運び人形とかつて呼ばれてたなあ…）

だが、今では長く働いているベテランの秘書とも肩を並べる（…と自分で思っている。）ほどの仕事っぷりを発揮している現役秘書！（あくまで玲依曰く。）

（成長したなあゝあたし…）

灰皿に煙草を押し付けて、アイスコーヒーをすする。

「そうだ。ニュースでなにか新しい情報あるかも！」

玲依は携帯を開き、ワンセグを起動させた。

「今朝、お伝えした事件の続報です！！！」

丁度よく、ニュースが始まろうとしていた。

「総理官邸、警視庁、国会議事堂、各県庁および道庁、都庁、府庁

へ謎の文が送られました。警視庁ではおそらく今回の事件の首謀者からのメッセージだとして捜査を進めています…」

（しかし…すごいこと仕出かすよなあ…）

ぽろりとアイスコーヒーをすすりながらニュースを見る。

「その謎の文には【Real game】とだけ書かれており、なにかの暗号である可能性が高いと専門家たちが解読を始めました。」

「え……………！？」

玲依はすぐにあるものを思い出した。

今朝方バッグの中から見つけた黒いあの名刺…

一体どうなってるの…

R e a l g a m e …

今、この日本で何かが起きている…そしてそれはとてつもなく強大な何か…

玲依の第六感は一瞬にしてただ事ではないと反応した。

「そつ速報です！現在全国各地で殺傷事件が起きているもようです！犯行手口は…ええええ！失礼しました…！犯行手口は最近連続して起きている…！東京都近郊で起きている連続殺傷事件の手口とまったく一緒であると、警視庁が発表しました。今記者会見の様子を中継で繋ぎます！現場の大泉さ〜ん？」

画面が切り替わり、中央に偉そうな人がマイクを大量に向けられ、カメラのフラッシュが嵐のようにパシャパシャしている様子が映し出される。

「はい！現場の大泉です！現在、警視庁内での記者会見の現場です！警視総監自ら会見に応じました！！」

「えゝ！全国民の皆様！ただいま警視庁では全国の警察署と連携して捜査を展開しております！犯人の手口は鋭利な刃物による滅多刺しであります…犯人はおそらく複数犯…組織的な犯行と目星がついております。えゝ…全国各地で犯行が繰り広げられていると想定されますので、外出は極力控えてください！戸締り、施錠をしっかりとして身の安全を確保してください！！！」

深々と頭を下げる偉そうな人が心から懇願しているように見える。

（なんかこれ…やばくね？）

玲依と隆文は現在、社内にいる…

「逃げなきゃ！！！！！！！！」

（どっへん？）

（しらん！海外じゃね？）

（ですよ〜！）

玲依は心の中で一人でノリ突っ込みし、バタバタと慌ててエレベーターへ走り出した！

「おっと！バッグは忘れちゃいかんぜよ！」

それほど大切なものは何一つ入ってないのだが…玲依は一瞬、冷静さを取り戻し一度秘書室へ、そしてバッグ乱暴に掴みパソコンを強制終了させてから…

改めてエレベーターへ走った！

玲依は意味もなくエレベーターのボタン（3階の営業課）を連打している！

（早く早く！！！！！！）

エレベーターは現在8階にある。降りてくるまでは数秒であるがその時間は更に長く感じる。

「早く早く！！！！！！」

その連打するスピードがキーボードの速さなら…玲依の職場での出世も不可能ではないと思わせるほど強くボタンを押している。

チンっ！

エレベーターが5階に止まり、扉が開いた。

ほぼ飛び込むようにエレベーターに乗り込み、玲依は閉まるのボタンをまた連打する！

（佐藤君は真面目だから絶対に仕事中に携帯は見ない…！！！！早くやばい事を伝えないと！）

しかし無情にもエレベーターはいつも通りのスピードでゆっくりと下降する。（今の玲依の心境では煙草一本吸うくらいにゆっくりと降りている感覚である。）

「まじやべえ！つてやべえつて！！！」

イライラと地団駄を踏みながら玲依はかなり動揺し、慌てふためいている。

チンっ！

やっとエレベーターは3階の営業課へ止まり、扉が開いた！

躊躇なく玲依は営業課の入り口の扉を勢いよく開けた！（どっちかという蹴り飛ばしたに近い。）

「いやあああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああ！！！！！！！！」

「

玲依の悲痛な叫び声が響く……

営業課の入り口の扉の先に広がっている光景…

もはや佐藤隆文という人物？むしろ人間とも言えないような肉の塊が散らばっている…が…

玲依は瞬時にこの肉の塊は隆文であると確信したのだ…

玲依は化粧が崩れるのも忘れて号泣し、その場に崩れ落ちるようにしゃがみ込んだ。

ブーーーーン…

遠くでエレベーターの扉が閉まり上昇する音が聞こえる…

コツコツコツコツ…

営業課と4階の人事課を繋ぐ階段から何者かが降りてくる足音が聞こえる…

動揺しまくりで泣き崩れている玲依の耳に叩き込まれるように響く2つの音…

明らかに誰がいる…

しかも一人じゃない…

2人もしくは…複数…

[illegible]

鳴咽を漏らしながら、玲依は自分にも危機が迫っていることに気付く。

(...うん-うん...)

コッ
コッ
コッ
コッ
コッ
...

階段からくるやつ？がかなり近づいてきていると音でわかる……

「うえ…うえ…うろたれ…」

(隠れなきや…)

玲依はたまたま目に着いたロッカールームへヨロヨロとしながらも
確実に歩みだした…

8月26日、その3

——
秋葉勝あきは まさる

性別：男

年齢：25

職業：無職

身長：169センチ

体重：98キロ

力：C 頭脳：B

魅力：F 潜在力：B

ランキング：125815000中>125814008位>変動

125815000中>102位

称号：勇気ある男

――

俺は知っている…

さっき偶然見たニュースの内容…

そして…

全国で起きている出来事…

俺は自分でいうのもなんだが…

オタクだ！

だが…そのなにか悪い！

趣味だ！趣味！

たまたま趣味が俗にいうオタクの部類に入ってしまうというだけだ…

俺は正常…

意外なことにもう一つ趣味がある。

それは小説を読むことだ…

だが、その中に一冊だけ取って置きの小説がある。

架空の世界と頭では感じていたが…

読めば読むほどにその世界はおそらく実際起きたこと…

そう思わざるを得ない内容の究極の小説だ。

そう…

今現在この日本で起きていること…

それはあの小説と一緒に…

人間たちが争い、そして生き残るという殺戮ゲーム…

馬鹿な一般人どもはこの事実気付いていないだろう…

だが！俺は気付いた！

俺は絶対に生き残る！

生きなきゃいけない理由もある！

そう…理由がある…それは…

来週のコミケで俺の嫁（アニメのキャラクターのコスプレをしたアイドル）が出る！

だから俺はそれを見届けなくてはならない！これは俺の使命！そう…

俺はまだ死ねない！

だから…

だから…

殺すしかない…

偶然俺はこのビルに辿り着いていた。

本当に偶然…

だが…

うふふふふ…

感じるよ？

感じられちゃうよ？

いるよね？ここwwww

明らかにいるよwwwwww

人が！w

俺のアンテナが反応しているよwwww

しかもこの感度は！

萌え！

そう…萌え！がいるw w w

俺が君を守ってやるよ！

3次元にも一人嫁が欲しいと思っていたんだよw w w w

ラッキーだよ君？w w

今いくよ？w

【株式会社ツバサ商事】…か…

俺はこの会社はしらん…

さあて！

萌えよ！俺の嫁候補よ！

イマタスケテアゲル…w

エレベーターは8階で止まっている…1階まで下ろすとなるとその間にこちらに隙が生まれてしまう…

階段で上がるのが妥当…まるでバベル！よし…

俺の装備はバタフライナイフ…のみ。

貧相な装備だが…主人公って最初はそんなもんだろっ？？

大抵は人を殺せばそいつが持っている武器をゲット、もしくは持っている「スキル」をゲット…

うふふふふふ…

俺しか理解できてないってのがワロスw

さあ…

何階にいるんだい？

まずは一階…

先ほど既に調べておいた…

ここは応接室？待合室？ロビー？

そんな感じのでかいフロアなのはわかるが…

明らかに人の気配はしないのがわかる。

となると上の階のどこかな…

まw

そんなもん考えなくてもわかるってw

まずは2階に到着。

え〜つと…会議室か…

机の下。棚の中。給湯室。ベランダ。

ふむ…ここは誰もいないようだ…

俺は耳と目に全神経を集中させながら移動している。俺の感覚はM
MOとFPSで完璧に鍛えられている。

凡人とは全然違うのさ。

次…

3階だな…

営業課…か…

むむ…

いる！

いるぞ！

人がいる！

この気配は一人だけであると感覚が言っている。しかも結構強い…

つまり、女ではない！男である可能性が高い。

敵がいるってことさ。

入り口のドアは一つだけでこの中は結構な広さであることはわかる。

地の利を生かすにはまずはこの中を把握しなければならぬ…しかし、それを知る術はどこにもない…

どうしたものか…

俺は気配を殺し（無呼吸）FPSでの状況を思い出す…
オンラインシューティングゲーム

こういつときは…

むむ！

ってかここは日本だしな…

重火器なんてあるわけがない。

なんだ…

考える必要ないじゃないかw

俺は主人公だからw

最初の敵に殺されるわけがない。そう…俺が勝つ。

なにか奇跡的なスキルをすでに俺はもっているはず。そして俺がピンチになったらそれが発動。そして…返り討ち。

もう…

俺ってばなんでこうも先読みできちゃうのw

やっぱこのゲームを理解するところになりますわw

では！

俺の初戦闘！

まさる！いきまゝっす！！！！

ガチャッ！！

勢い良く、営業課のドアが開かれる。

健気に書類をまとめていた隆文がびっくりして書類を落としてしまった。

てっきり玲依が来たのかと思って油断していたが…

ドアから入ってきたのは見たこともない男。

見た目は少し若いが、ボサボサの髪にふくよかな身体付き。そしてスーツではなくチェックのシャツに無理やり履いたスラックス。

この会社の人間ではない…

そして一般人？ということが一瞬でわかる。だが…

手には大きなナイフが握られていることから…

明らかに不審者であるのがわかる。

隆文は小学校のころから柔道をしていて、2段の腕前を持つ。

大抵の暴漢は投げ技で倒せる。

もし、こいつが襲ってきてもなんとか対処はできると自信があった。

「えっとキミはこの会社の関係者ではないよね？この会社さ？一般の方はちょっと…」

とりあえず平和的に会話を試みる隆文…

だが…

男の目は血走っており、口からは涎を垂らし、明らかに正常ではない…

ギリリ…

と男の目が隆文を捕らえる。

（襲ってくる気だ…）

隆文はすぐに頭を切り替え。受けの構えを取る。

（くる…！！！）

目の前の男は突然走りだし、めちゃくちゃにナイフを振り回しながら隆文へ向かって走ってくる……！！

ふくよかな身体付きのため、動きは思った通り鈍い。

隆文はすばやくナイフによる斬撃の軌道を見切り、避けた！

はずだった…

…が、わずかに目測を誤ってしまい左腕を深く斬られてしまった！

「痛っ…！！」

出血が思いのほか激しく、右手で傷口を押さえるがそれでも血は止

まらない！！

（動脈まで届いたらしい…）

痛みの感覚から熱いという感覚に変わっていく。

これは脳が危険というシグナルを止め、対処している…もしくは痛いという感覚の更にも上。その情報を神経に伝達すれば危険という合図であると隆文は理解した。

出血がひどい…

すぐに足に力が入らなくなっていくのがわかる…

体勢が大きく崩れるのを防ぐため、隆文は方膝をついた。

男は厭らしい笑みを浮かべている。

（これはちょっとやばい…）

隆文はこの場に追い込まれやっこの男は始めから自分を殺す気できたということに気付いた…

だが…

気付くのが本当に…

遅すぎてしまった…

男は高々とナイフを振り上げ…

勢い良く振り下ろした…

……レベルアップしたかな？

俺強くなったかな？

たぶん…

なつた！

今の俺は開始数分でもう1人殺したから…

そこらの一般人よりは強くなっているはずだ！

さて…

こいつの武器は？

勝はピクリとも動かなくなった隆文の衣服、身の回りなどを組まなく探した。

だが、武器というものはなにもなく、それどころか特に目ばしいものすらも見つからない…

「おかしい……絶対にこいつもなにか支給されたはずなんだ……」

「あつ！そうか…」

勝は心臓に突き刺さっているバターナイフを引き抜き……

既に息絶えている隆文に身体を切り刻み始めた……

激しく吹き出る血吹雪などには動揺を見せず、ただただ隆文の身体を解体していった……

「ない……どこにもない……」

そんなはずはないそんなはずはないそんなはずは
ないそんなはずはないそんなはずはないそんなは
ずはないそんなはずはないそんなはずはないそん
なはずはないそんなはずはないそんなはずはない
そんなはずはないそんなはずはないそんなはずは
ないそんなはずはないそんなはずはないそんなは

ずはない!!!!!!!!!!!!!!

狂ったように勝は更に隆文をバラバラ切り刻んでいく！途中からはナイフを置いて自らの手で肉を引き千切ったり、内臓の一部を食べてみたり…

とにかく鬼！という言葉以外にも思い浮かぶものがないほどに隆文をただの肉塊に変えていった…

「ああ…」

「こいつハズレだったんだあ？w」

「俺…どんまい…」

さすがゲームだ…

一発目の敵はただの経験値…あゝ…良く考えればそうだわ！まんまと引っ掛かってしまったwww

「おお！萌えの子！つまり俺の嫁ええええええ！が下にいる！！」

勝はヘラヘラと笑いながらゆっくりと階段を下っていく…

営業課のロッカールームに逃げ込んだ玲依は適当に一番奥のロッカーの中に入り込んだ。

無意識にここに逃げてきてしまったが…実は追い詰められたら逃げられないというリスクがある。

気が動転している玲依はそんなリスクも考えることが出来ずにまさに無我夢中で自らの首を絞めるような場所へ逃げてきてしまった…

声を押し殺すように口に両手を当てて息さえも外に漏れないように
じっと動かずに待機している。

目から涙、鼻からは鼻水が流れ落ちているが…そんなものはどうでも
いい…見つければ自分もバラバラにされて殺されると脳が警告し
ているからだ。

コツコツコツコツコツ…

どうやら上から降りてきた足音は3階に着いたらしい…

今同じフロア内に何者かがいる…

おそらくは隆文を殺した殺人鬼…

玲依は目を瞑り…ただじっと悪夢が去るのを待つように…

そして…

見つからないように息を潜めている。

足音は確実に近づいている…おまけに…

ビチャビチャビチャ…

…と、なにかが滴るような音も聞こえてくる…

確実に殺人鬼であると確信を持ってしまった玲依は身体が振るえ出した…

（コロサレル…）

目を瞑っているが…脳内では殺人鬼がどこを歩いているのかが音によってすぐにわかってしまう…

歯を食いしばり奥歯がガタガタなるのを必死に堪えるが…

その力よりも絶対的な恐怖のほうが勝り、奥歯が容赦なくカタカタ
…と音を出してしまう…

（やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやば
いやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやば
いやばいやばい）

玲依は確実にもうそこまで死が迫ってきていることに絶望を始める…

（生涯独身でした…とか…淋し過ぎるよお…）

まるで開き直るかのように軽率な考えもチラホラと思える…

少し慣れてきたのか…それとも怖すぎて狂ってきたのか…

それは…

玲依しか知らない…。

チンっ！

全く予想外の音が鳴った…

8階から降りてきたエレベーターが3階に到着した音だ…

先ほどまで歩き回っていた足音がエレベーターの音と共に止む。

（もしかするとこいつの仲間？複数であたしをグツチャグチャにして殺す気？）

更なる恐怖が玲依を支配していく…もう諦めにも近い感情も同時に沸いてくる…

（もうだめだ…あたし…死んだ…）

その思いとは裏腹に身体は死を受け入れる体勢を作らず、必死に息が漏れるのを堪えたり、奥歯がなるのを堪えたり、足がガクガクするのを抑制しようとしたり…

まるで助かりたい！！

と身体が主張しているかのよう
に玲依の思いを無視している。

「誰だ！キミは？我が社になにか用事でも？」

遠くでそんな感じの言葉が聞こえた……

（ん？この声はよく朝礼で聞くよ？確か副社長……だよな？）

「オマエモ敵だー!!!!!!!!!!!!!!」

まるで死神のような低い唸り声のような凶悪な言葉も聞こえた……

(これって…あたしの代わりに誰かがピンチになってるっぽくない？)

瞬時に冷静さを取り戻し、玲依は目を見開く！

（殺人鬼は1人、そして向こう側には副社長がいて…ここにはあたし…）

（いくら副社長でもあんなモヤシみたいな身体付きじゃ殺人鬼に殺されちゃう！あ…副社長…すみません…もうクビでもいいです…申し訳ない…）

玲依得意の一人ノリ突っ込みもやっと発動できるほどに冷静さを取り戻した。

「うふふふふふふはあああああああああ！……！！……！！……！！」

笑いを押し殺しながら気合を入れたような叫び声が響く！

おそらく殺人鬼が副社長に襲い掛かっているのが雰囲気わかる。

玲依は営業課の椅子を持ち上げてゆっくりと入り口のドアに向かっていく。

「なにをするキミ！危ないじゃないか！」

（きっと副社長は避けた！なかなかやるじゃない！今助けますから！）

玲依は足の速度を速める！ドアからすぐ左手のエレベーターへ向かう廊下には、奥に尻餅を着いている副社長が見える。

そして、尻餅を着いている副社長に今まさに大きいナイフを振り下ろそうとしている殺人鬼の後ろ姿が見えた！

「うりゃあああああああ！」

玲依は走りだし！持ち上げていた椅子を殺人鬼の頭を目掛けて…

投げた！

ボギキィィィィィィィ！

なんだかすごく鈍い音がして殺人鬼は倒れた。副社長はなにが起きたのか理解しようとしながら、ゆっくりと身体を持ち上げようとしている。

「副……社長！大丈夫……夫です……か？」

はあはあ……と息を切らしながら玲依はなんとか言葉を放つ。

「キミは……秘書課の……？」

「はい！秘書課1年目の渡辺玲依です！」

「渡辺君……か……。ありがとう！助かったよ。」

「いえいえ……あた……私も必死でしたので……」

「なにがあつたのだね？会社の雰囲気がちよっとおかしいが……？」

「はい……それは……ですね？」

玲依はつい先ほどのニュースで報道されていたことを玲依なりに丁寧な言葉を選びながら不器用に説明していった。

—— 渡辺^{わたなべ} 玲依^{れい}

性別：女

年齢：23

職業：OL

身長：157センチ

体重：48キロ！（本人曰く）

力：C 頭脳：C

魅力：A 潜在力：測定不能

ランキング：125815000中>365位>変動

125815000中>102位

称号：椅子投げ名人

—— 神藤 治臣
しんどう はるおみ

性別：男

年齢：27

職業：副社長

身長：177センチ

体重：68キロ

力：B 頭脳：S

魅力：A 潜在能力：C

ランキング：125815000中>298位>変動

125815000中>267位

称号：他力本願

8月26日～その4～

副社長は今日日本で起きている事件の事をすんなり把握し、異常事態であるとすぐに理解した。

とりあえず今日からはしばらく会社は休日にと設定し、今日のところはもう帰って良いと言ってくれた。

もし副社長が帰って良いと言わなくても玲依は退社すると申し出ていただろう…

副社長は会社の外も同様に危険であると判断し、玲依を自宅まで自ら送っていくと言ってくれた。

今現在、玲依は副社長が車で迎えにきてくれるのを会社の外の道路で待っている。

先ほどの殺人鬼はどうなったのだろうか…怒って自分を探し回っているのではないだろうか…

玲依は一刻も早く副社長が到着するのを待っている。後ろから殺人鬼の雄叫びが聞こえてこないように…

落ち着かない様子で震えながらひたすら待っている。

会社内に自分の携帯も、バッグも財布も全て置いてきてしまったのは心残りだったが…今はそんなことよりも自分の命のほうが一番大事だと思っているため、もはや荷物の事など眼中にない。

まだ外は明るい…。むしろ太陽はまだまだ高く。おそらく日中？13〜14時ごろだと思える暑さだ。

日本中から時刻を確認できるものが消え去った今…

時間がわからないという不便さを改めて痛感する玲依だった…。

会社の地下駐車場から見たこともない車が出てきた。おそらくは副社長の車であることだけはわかるが…

「れんぼれぎーね？」

玲依は英語もからつき苦手なため、その車の車種も読めないのだ（注意：玲依は秘書…）。

「すまん。待たせてしまったな？さ！乗ってくれ。」

副社長が運転席から降りて、助手席のドアを開けてくれた。

（おつとこりゃ…なんというジェントルマン？）

「ありがとうございます。失礼します。」

玲依は助手席に乗り込む。副社長は助手席のドアを優しく閉めて、運転席へ戻ってきた。

「しかし…大変だったな？あの不審な男から逃げてたんだろ？」

「は…はい！そんなところです…」

「1人でよく頑張ったな？怖かっただろうに…」

「はい…そんなことよりも私の友人というか後輩があ…殺人鬼に…」

迂闊だった…

玲依はすっかりその現場で起きたことは頭から除外しようとしていたのだが…うっかりと口に出してしまい…

間髪入れずに目からはまたポロポロと涙が流れ始めた。

「そうか…すまない…大変なことを聞いてしまったな…」

副社長は空いている右手で玲依の頭をポンポンと撫でてくれた。

その行為が更に玲依の心を圧迫し、火山が噴火するように玲依は声を大にして泣き始めてしまった…

「本当にすまん！部下を思いやる気持ちがりなかった俺が悪かった！お詫びに渡辺君が今まで食べた事ないような飯でも食わせてやる！」

「えぐっ…えぐっ…ほっ…ほんとですか？…えう…」

嗚咽を漏らしながら玲依は今の言葉に歓喜した。

（なんという…すっかりしているというか…チャッカリしていると

いうか…)

副社長は苦笑いをしながら…

「ああ！本当だとも！ただ、今の状況ではおそらく殆どの店はやっていないだろうから…」

「あつつ…えつつ…ふつ…副社長…いつ…今のはやっぱり…じょ…？」

泣きながら副社長なりに気を使ってくれたのだと解釈しようとした玲依だったが…

「いや？冗談ではないぞ？俺の家で食わせてやる！こう見えて俺はコツクの資格を持っているのだ。」

「あつ…そつそれってつまり副社長のご自宅へ招待してくれると？」

「ま…そういう事だな？」

「おおおおお！！！！ツバサ商事バンザイ！」

玲依は先ほどまで号泣していたのが嘘だったかのように飛びつきりの笑顔で嬉しさを表現している。

メイクが涙でボロボロになっていなければ…きっと美人と言われただろう…

「女性に対してはちょっと失礼だとは思うが…そのティッシュを使ってくれ…え…とその…鼻水が…」

「……………」

（ぎゃああああああああ）

玲依は鼻水が出ている事には気付いてなかったらしく……まるでタコのように顔を真っ赤にして柔らかそうなティッシュに顔を埋めた。

8月26日

同刻。

場所は大阪府某所。

——
阿久津 修一
あくつ しゅいついち

性別：男

年齢：24

職業：ホスト

身長：171センチ

体重：62キロ

力：B 頭脳：A

魅力：S 潜在能力：D

ランキング：125815000中>528位

路上で煙草を吹かし、太陽からの熱を直に浴びながらぼろっとしている男がいる。

全体的に完璧にコーディネートされた服装。

上はタンクトップなのだが、細すぎず、太すぎずな体系で一枚だけでもかなりオシャレな感じを彷彿させるのだが、その上にさりげなくシャツを羽織っている。

下はダメージジーンズ。だが、明らかに古着などでなくどこかで聞いたようなブランド名がデカデカとプリントされている。

顔は細く薄く、完璧なバランスで整えられてる眉毛。それに丁度良く合っているやや釣り目で大きくはないが、男らしい目という言葉

が自然に出るような目。

誰もが認めるイケメンといったところだろう。

髪の色は赤いに近い茶色（カッパー系）。

「時間わからんなあ… まあええけども… 連続殺傷事件とか物騒やなあ… 玲依無事やるかあ…」

彼（阿久津修一、以後、修一）は玲依の幼馴染で、中学までは同級生だった。と同時に小学校〜中学校で玲依が転校するまでは彼氏という肩書きであった。

不謹慎な玲依の転校であれからかなり年月が経っているのだが、未だに想いはそのまままで今日に至るのだ。

「東京とか物騒なところ… もっとやばいやろなあ…」

沈む気配がない太陽をサングラス越しに見上げる。

「今日も暑くてかなわんわあ…」

修一は玲依よりもかなりヘビースモーカーで、もはや一本づつ吸うのはめんどい… 同時に口の両端に2本くわえて一気に吸うという特

微的な吸い方をする。

「修しゆ」

遠くから女性の声が聞こえた。

——しんじょう 新庄 まこと 真琴

性別：女

年齢：21

職業：キャバ嬢

身長：160センチ

体重：49キロ！（本人曰く）

力：C＋ 頭脳：B＋

魅力：B 潜在能力：S

ランキング：125815000中>1029位

修一の姿を遠目で発見した彼女（新庄真琴、以後、真琴）はピンヒールを脱いで両手に持ち、怒涛の勢いで走り出した。

「修一」

真琴は現在進行形の修一の彼女である。同時にミナミで5本の指に入るやり手のキャバ嬢だ。

修一はミナミの多々あるホストクラブの中ではトップ10に毎月必ずランクインしているなかなかのやり手。

二人の出会いは、同僚たちを連れて修一がたまたま飲みに来たキャバクラ…つまり真琴が働いている店に客として来たことがきっかけ。お互いの営業スタイルの酷似や性格の一致などで意気投合。それ以

来男女の関係になり正式に本カレ、本カノになる。

「おゝマコかぁゝそんな急いで走ってどないし……………」

真琴の方を見た修一は直後に硬直する。

見れば真琴は誰かに追いかけている。

黒塗りのクラウンに乗ったオッサン…窓からチラッと顔が見えるが
確実にヤーサン…

「あほか！はよ！後ろ乗れえ！！！」

修一は隣に止めておいたバイクのエンジンをすぐにつけ、後部座席
をバシバシと叩いている。

黒いクラウンは真琴をじらすように煽りながら徐行で走行している。

「このクソアマ……とまれや！いてまうぞ……！」

はい……ヤーサン確定。

真琴はジャンプして修一のバイクの後部座席に着地する。

ブォ~~~~ン!!!

ごつつい重低音を響かせて修一は躊躇なくバイクを走らせる。

ミラーを見れば、後ろからやや本気で追いかけ始めたクラウンが見える。

「しっかり捕まってるやあ！落ちたら潰れたトマトになるで！」

「修！しっかり撒けやあ！」

「アホ！誰にいうとんねん！」

修一は車では通ることは不可能な路地裏などを蛇行しながら進入。

当然、クラウンは先回りし正面から飛び出そうとする。

だが、路地裏に入った修一は…

タコメーターの針を限界まで上げ、強引にシフトチェンジ！そして…前輪を持ち上げウィリーの体勢を作る！

後輪のみで走るバイク（ウィリーの状態、つまり前輪を持ち上げ浮かす）の正面に黒塗りのクラウンが現れる！

ぶつかる！

確実にやばい…

と思いきや！

修一はぶつかる瞬間に前輪を押すように真下へ降ろす…

器用にクラウンのボンネットに前輪が着地。そのままフロントガラスをバキバキに割り、ルーフを凹ませ何事もなかったかのようにクラウンの真後ろへ着地…そして次の瞬間には遥か後方へと走り去った。

バイクを冷やすために適当な広場に止め。修一は煙草を吹かす。

真琴は「修一まじイケてたわー！」と恋するような瞳で修一の腕を掴みながらはしゃいでいる。

「あほ！お前なにしとんねん！相手ヤーサンやないか！」

「ええやんかあゝなんかニユースで大変な事になつとるしさ？いい機会やと思つてさ？」

「結局なにをやらかしたんや？」

「ヤーサンの事務所の銭、根こそぎいてもうたゝ」

「あつゝあほ！どあほ！！そりやお前埋められるだけじゃすまんてゝ」

「せやからウチ、修に助けてもらお思つて探しとつたあゝ」

「あほ！！ワシはお前と心中する気はないで？」

「またまたゝ相変わらずの冷めつぷりやなあゝそついつツンツンしてるとこめっちゃ好きやけどゝ」

「はあゝゝゝ」

なんという女と付き合つてしまったのだらうゝ修一は少し後悔を始めたゝが、なんとかなるかあゝとあつけらかんと今後の行動を考え始めた。

「ワシこれから東京にいくと思うてる…」

「なんでそんなとこいくの？」

「ちよつとワシなりにケジメを付けたい事があつてな？」

「なん？女？」

「そや！お前にも前話した女のことや」

「ふん…」

修一は真琴には恋愛感情は全くないと付き合う時に伝えてある。今は東京に住んでる幼馴染の女の事が忘れられないと付け加えて…

それでも真琴は「かまへん！かまへん！」と快く快諾し強引に付き合う事になったのだ。

愛されるより愛する性格な真琴にとっては相手の気持ちは大して気にするほどの事ではないらしい。

「じゃあ～さ？」

「お？どないした？」

「ウチも連れてってや？修の惚れてる女の顔ウチも見たいやんか？」

「ええけど…嫌やないんか？」

「別に？それで修の好みとわかるやろ？ウチにとっては大収穫や

ん」

「マ」……」

「修……！そんな顔するなよ！ウチは別に気にしてへんよ？」

修一は改めて想う……玲依がいなければ……きっと自分は真琴を素直に好きになっていた。そしてその先の事も考えられた……

（なんか男として最悪だな……）

罪悪感を感じ始めた修一だったが……それでも玲依の無事を確認したい気持ちは抑える事が出来なかった……

「……ところで銭はどこに置いてきたん？」

「道頓堀にばら撒いたった」

「ドツドアホ……！！！！！！」

「なん？なんで怒るん？」

「いてもつたもんはしゃーないから……有効に使うんが礼儀やないかい！」

「ちゃうねん…ウチそついう理由でいてもつたんちゃうねん…」

「そかあ…ま、それは聞かんとくわ」

「おおきに…」

「じゃ！早速東京に向かって出発しよか？」

「着替えとかなんもあらへんよ？」

「いてもうたれや…な？」

「せやな？どうせ店やってないしな？」

ちよつと前向き過ぎる二人だが…とりあえず進路は東京、早速、高速道路に向かって走り始めた。

太陽はまだまだ高い。容赦なく照り続ける。いくらバイクを走らせて風を受けているとは言え、熱風に近い風はどちらかというとウザいに近い。

現在、修一と真琴は名神高速からひたすら東京へ向かって進んでいる。

青看板が見えた。

【→名古屋200km】

（なんやて…いくら100キロ近くで飛ばしてるほうやけど…名古屋こんな近いやろ！）

青看板が本当ならば、現在地は…大津あたり？

だが、早くても大阪から大津まで着くのに数時間かかる…

太陽の位置が明らかに大阪で見た位置から変わっていない…

休憩を兼ねて修一はサービスエリアへ向かい、一服することにする。

ちよつとガソリンもやばくなってきたので詰めようと思ったが…やはり人っ子ひとりおらず、ガソスタのバイトもしたことがない…

フルサービスのガソスタなので詰めることができない…

「マコ？怒らないで聞いてくれや？」

「修…どないしたん？」

「ガス欠や…」

「なんやてえ…！！！！！！」

「高速でいこもつたんがアホやった…人おらんことスツカリ忘れとった…」

「どないするの？」

「しゃーないからチャリンコでも見つけて…」

「ボケてる場合ちゃうよー！ウチ体力ないって！」

「こまつたなあ…」

現在地は滋賀、彦根…

しづしづと二人は歩いて高速をひたすら東京へ向かうことにした…

「ジャフはだめなんか？」

「あほ…！携帯は使い物にならん…」

「…」

「ゆっくりいこか…こうなったら気合やで！」

「…」

「マ」「…？」

「じゃあ…」

「ん？」

「おんぶしてよ！」

「は？」

「ウチ歩くの嫌や……」

「おま……」

「あ！のりおがある！」

「ほんまか！」

ドサッ！

修一が後ろを向いたと同時に真琴は修一の背中に張り付いた……

「スキを見せるからこうなるんや！」

「ほんまお前にはかなわんわ……」

修一は渋々真琴をおんぶしてひたすら歩くことを再開した。

8月26日、その2

「マコ…お前ちょっと太った？」

「アホか！」

「ははは…」

「重いん？」

「いや…」

「なん？」

「柔らかい…」

「ボケ！」

というような他愛のない会話をしながらひたすら修一は真琴を背負い歩く。

東京までまさかこんな調子で歩くことになるとは思わなかった…

目の前にはガソスタがある…しかもセルフ…アホだワシ…と切ない目でセルフのガソスタを横目にひたすら歩く。

太陽の熱と真琴の体温のダブルパンチで修一の体力は確実に奪われていくが…

それでも難波の意地？のような妙なプライドがある修一は一言も弱音を吐かずにひたすら前へ前へ歩みを進める。

ブォーン…

後方から重低音が聞こえる。助かった！と修一は思い、一度真琴を背中から降ろしてから後ろを振り向いた。

白のセダンが近づいてくる…ヤーサンの気配がない車であるのはわかる。

「ヒッチハイクや！あの車に助けてもらおや！」

「せやなあ！ウチも暑くて熱中症なるところやったし…」

「おおおお～～～い！！！！」

修一は大声で後方からくる車へ手を振りながら叫ぶ。天の助け…今の二人にとってはまさにそれであった。

だが…車は修一たちに気付きパッシング…しただけでスピードを緩めるどころか更に速度を上げる…

まっすぐ修一の方へ突っ込んでくる…

「あかん！逃げろ！」

修一は真琴の手を強引に引っ張り瞬時に路肩のほうへ避難する！

まさに危機一髪！

キキキイーーーー！！！！！！

耳を突き刺すようなブレーキ音が響き、二人の前方に車が停車した。

「なにかんがえとんねん！こいつ！ワシが文句いうたるわ！」

怒りを露にさせた修一はズカズカと車へ近づく。

運転席のドアを強引に開け

「お前！なに考えとんねん！轢き殺す気やったんか！？ああ！？」

凄まじい怒鳴り声が響く…そして…場に似合わない沈黙…

「どないしたん？」

真琴は修一の方へ近づく…

一方修一は…

驚いた顔をしながら固まっている。

「修…？」

真琴は運転席のドアの先を見て…

「きや ああああああああああああああああああああああ
ああああああああ！！！」

金切り声のような悲鳴を上げた！

赤黒いものが車内に飛び散っている……

明らかに肉であるのはわかるが… 血の量が凄まじい…

そしてハンドルには原型を留めた両手、そしてアクセルには足の先だけが残っている。

本来あるべき身体（頭や腕や胴体など）はどこにもない……

その代わりのように見えているのは血で染まっ
たいろんな肉の塊……

明らかにこの車の運転手のものであると強制的に想像させられる……

「おええ」

真琴はたまらずその死臭とバラバラになっている肉の塊を見て嘔吐してしまう。

修一も嘔吐しかけたが、真琴の背中を摩ってあげることなんか堪えることができた。

（一体どうなってんねん…死んどるのに走ってきた？）

「マコ…大丈夫か？」

「う…うん…」

真琴はやつと回復したらしく、なるべく肉の塊を見ないように…修一の背中に張り付いている。

「どう思っっ？」

「わからんよぉ…」

「これ…乗ってく？」

「あかんて！まじそれだけはあかんて！」

「じゃあ歩く？」

「嫌や…」

「乗る？」

「嫌や……」

「おんぶする？」

「嫌や……って！ちゃうちゃう！おんぶして！」

「しゃーないな……」

助け舟かと思つたが……さすがの修一もこの車には乗るのは抵抗があるので仕方なく先ほどのように真琴を背負いながら歩く事に決めた……

真琴を背負い、再び歩き出した修一……

ブオーン！

先ほどの白のセダンから重低音が響く……

「なんやて……」

「修……あかん！後ろや！」

「なっ！」

車のライトがまるで目のようにピカピカと点滅パッシングしている。そして修一の後を追うように最徐行しながらゆっくり進んでいる。

「どうなっとなねん……」

「修……ウチ怖いんやけど……」

「ワシかて怖いわ！」

「これ……幽霊ちゃうのん？」

「あほ！そんなもんいるわけが……」

「じゃあ……あの車なん？」

「……」

「なん？」

「オバケや！」

「せやろ？」

「幽霊やない！オバケや！物の怪や！」

「物の怪？」

「そつや…きつと妖怪車なんや…」

「どんなオバケなん？」

「マコの乳をDカップからAカップにしてしまう物の怪や…」

「アホ！」

「ははは…」

後方から修一の歩く速度に合わせて無人？の車が一緒についてきて
いる…

妙なお供が出来た修一たちであった…

8月26日、その3

「マコ？後ろの車が急発進してきたら…ワシから降りてお前だけでも逃げるんやで？」

「嫌や…」

「なんでや…？」

「修一が怪我する…」

「そんなん…どうでも…え」

「どうでもよくないわ！ウチにとって修はたこ焼きや！」

「なんやそれ！」

「それくらい大事なんや！」

「ようわからんわ！」

「わからんでええ…ウチが知ってればええんや…」

「そうなんか？」

「そうや！だって修はウチの事好きやないかもしれんけど…ウチは修が好きやから…」

修一の心に今の一言が深く突き刺さった…

（ほんま…マコにはかなわんわ…）

「マコ…すまん…」

「…」

背中が生暖かい水で濡れている。

「マコ？」

「…」

プップー…

次はクラクションの音が聞こえる…いよいよ最悪な気配を醸し出し

てきた後方の車…

「…修…」

「…わかつとるわ！」

「いうてみ？」

「走るしかないやろ？」

「ウチも走るん？」

「いや！マコはこのままでええよ！振り落とされないようにしっかり捕まっとき？」

「うん…」

「いくでえ！！！！！！！」

修一は真琴を背負っている事を感じさせないほどのスピードで走り出した！

それに気付いたらしい後方の車は狂ったようにクラクションを鳴らしながら、そのスピードに合わせるように追ってくる！

（あかんて…これあかんて！）

走りながら修一はこの危機をどう回避しようか考えているが…何一

つとして打開策が見つからない！

（もののけの癖にワシ等を弄んでるんやな…癪に障るやつちゃ…）

（せやな…マコだけは守らなあかん…）

修一はなにかを悟ったような顔をして力強く頷いた…

「マコ…黙ってききや？」

「…どないしたん？」

「いいから黙つとき！」

「…うん」

修一の怒鳴り声にびびった真琴は声を出さずに話を聴くことにした…

「ちょっと激しく揺れるさかい…せやから怪我しないように気をつけや…?」

ゆっくりと真琴が聞き取れるくらいに優しく語りかけた…

そして…

「マコ…すまん…」

背中のマコを左側の路肩へ…

投げた！

一瞬なにが起きたのかわからない真琴だったが自分が宙に浮いてる事を理解する。

そして、実際はすごいスピードで投げ飛ばされているのだが、まるでゆっくりと空を飛んでいるかのように…

ゆっくりと修一から遠ざかっているのを目視できている。

目の前の修一は真後ろを向いて両手を広げて仁王立ちしている…

「修うううう…!!!!!!!!!!」

ド
ン
ッ

聞きたくないような嫌な音が響いた…

血吹雪が舞い、灰色道路には真っ赤な水溜まりが出来ている…

修一はどこにもいない…

ただ車の下には真琴が見慣れた服の一部…大好きだった指一部…大好きだったちよつと細い目… 挙げればキリがないものが散乱している…

更に車は前輪や後輪を左右に動かし…

グチャグチャ…と音を立てている…

最後にパキッと軽い音がしたかと思えば…

車はそのまま猛スピードでバックし、真琴の視界からは完全に消え

「修！修！このボケ！カス！スケベ！あほんだらあ！！！！！！うわ
ああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああ」

真琴は真っ赤に染まった挽き肉を号泣しながらかき集めて…

優しく撫でている…

一向に沈む気配がない太陽…相変わらず高い位置に当然の様に居座
っている。

真上から容赦ない熱が真琴に降り注ぐ…

すでに泣くのを止めている真琴は…

口元を真っ赤にしながら…

道路に落ちている挽き肉を貪り食っている…

ブツブツ…

となにかをつぶやきながら…

必死に挽き肉を食べている…

「修はたこ焼きなんや…」

「修はウチが…」

「修…は…」

「ウチノモノヤ！」

「修はウチの身体の一部になるんや…」

「これからずっと一緒や…」

「死ぬまで一緒や…」

「もう…」

「修は誰にも渡さん！」

既に正気を無くした真琴は…

挽き肉を完食し、血の水溜まりをも飲み干し…

ゲラゲラと笑いながらゆっくりと…

一歩づつ確認するかのようにゆっくりと…

東京へ向かって歩き始めた…

——新庄 真琴
しんじょう まこと

性別：女

年齢：21

職業：キャバ嬢

身長：160センチ

体重：49キロ！（本人曰く）

力：C + 頭脳：B +

魅力：B 潜在能力：S

ランキング：1 2 5 8 1 5 0 0 0 中 > 1 0 2 9 位 > 変動

1 2 5 8 1 5 0 0 0 中 > 4 4 位

称号：死神に取り憑かれた者

8月26日

同刻

埼玉某所

越谷警察署

原田 政人
はらだ まさと

性別：男

年齢：30

職業：警部

身長：176センチ

体重：69キロ

力：A

頭脳：A

魅力：B

潜在能力：C

ランキング：125815000中>76542位

——
神藤 しんどう

晴香 はるか

性別：女

年齢：27

職業：警部補

身長：164センチ

体重：50キロ

力：C＋ 頭脳：B

魅力：S 潜在能力：S

ランキング：125815000中>301位

「おらぁ！早くしやがれ！こいつぶつ殺すぞ！？」

若い男が怒鳴りながら初老の男性（越谷警察署長）に包丁を突きつけている。

場所は越谷警察署内…

署長室…

副署長を含めた署内の幹部たち数名は既に署長室の隅に手錠を掛けられ拘束されている。

それを見張っているマスクを付けた男が二人。

そしてドア近辺には必死に説得を試みる警察官が一人。その後ろには完全武装した警官が二人。

最後に署長の椅子に偉そうに座っている若い男が一人。

現在、越谷警察署では署長たちを人質にしたハイジャック事件が起

きている…

要求は留置場の犯罪者全員の解放、それから署内の拳銃、弾薬を全て差し出すこと…

むちゃくちゃな要求だが…指揮をする幹部たちも人質になっているので、的確な判断が出来るものが少ない。

その為、状況は犯人たちの思うように進んでいる…

たった四人に警察署が敗北…？

その場にいる警官たちはもはやなす術がなくなっているので、もう犯人の要求どおりに動くしかないのだった…

しかし、この詰み将棋のような状況を打破すべく、裏で確実にその準備をしている警官が二人いた。

今日に限って非番が多い…

朝の事件がやはり影響しているらしく、警察官ですら無断欠勤している者が多いのだ…

現在、越谷警察署にいる警官はわずか11人…

そんな隙を突かれたようなハイジャック事件なのだ。

確実に説得にいくような目付きじゃない警官がいる…

見た目は20代くらいの童顔ではあるが、警官らしい険しい顔付き、肩の腕章は警部を主張している。

彼（原田政人、以後、政人）は現在起きているハイジャック事件を解決すべく極秘で作戦を開始していたのだ。

シンプルな強行突破だが…人質が取られている以上、まだ突入できるタイミングではないので待機しているのだ。

黒のやや長い髪、ミディアムウルフ眉間には深いしわが入っているが、それも愛嬌のような青年のような童顔。

クリクリとした目では睨み付けても特に威圧することができないだろうと思わせる顔。

政人は拳銃の安全装置を外し、そのまま右手に拳銃を構えて署長室のドアを廊下から凝視している。

そんな政人の廊下を挟んで反対側に、同じような体制で待機している婦警がいる。

肩の腕章は警部補。おそらく制服を着ていなければ警察だとは思えない美貌。モデル顔負けな完璧なバランスの顔。

釣り上がった眉毛に猫目。美白とも色白とも取れる透き通った肌。警察には珍しい茶髪のロング。

彼女（神藤晴香、以後、晴香）は政人の部下であり相棒。こういった凶悪事件を担当する場合はいつも二人三脚で活動するのだ。

余談だが晴香は『株式会社ツバサ商事』の副社長。神藤治臣の双子の妹である。

まだ作戦開始の合図が政人からこないなので、晴香はイライラし始めている。

（こんな事件、さつさと突入して犯人を拘束してしまえばいい…何を迷う必要があるんだ？）

かなり冷徹で平気でさらつと毒でも吐きそうな性格…

許可なく発砲する、犯人に重症を負わせる、風紀の欠片も見られない髪型…

そう…

晴香は越谷警察署の問題児なのだ。

だが、冷徹な性格だからこそ凶悪事件では安心して前線を任せられる。

署内では軽蔑派と尊敬派の対立が起きるほどに注目されているのだ。

一方政人は、キャリア組であり現場経験はそれほどなくトントン拍

子に昇進していくエリートである。

だがそのまま昇進していく政人を良しとせずに、少なからず現場を任せられるほどに成長させるために、署長は晴香の指導係に政人を抜擢したのだ。

二人のコンビ（通称：女王と青年）もまた署内では有名である。今のところ二人に任せられた事件は9割の確率で解決する…と信頼されているのだ。

もう我慢できない！と主張するように晴香は拳銃の銃口を政人に向ける。

（突入するか…私に殺されるか…すぐに決める）

人を殺せるような舌打ちと、金縛りにさせるような眼光で政人を睨み付けてる。

それに気付いた政人は苦笑いをしながらとりあえず両手をあげ、も

政人は武装した警官に無線で合図する。

「こちら原田…準備が完了した」

「了……解……」

目だけで晴香に突入の合図を送る。

待ってましたと言わんばかりに晴香は煙草を床に投げつけ強引に踏み潰し鎮火させる。

そのまま間髪いれずに署長室のドアへ走る！

政人は晴香の後を追うような形で続いて走り出す！

二人はやや笑みを浮かべながら走る。

こんな緊迫したような状況を楽しむように…

晴香が署長室のドアを蹴破る！

ガウンガウンガウン！！！！

すぐに拳銃の銃声が3発聞こえた！

晴香が発砲したのだ！

「うあああああああ！」

「いてええ！！！！！」

「足があ！足があ！！！！！！！」

署長にナイフを突きつけている男の膝に一発。

幹部たちを拘束している男二人にそれぞれ左肩、左腕に一発ずつ命中させた！

外からは犯人たちの場所などわかるわけもないのだが…

晴香はドアを開けた瞬間、瞬時に犯人の場所を把握。でたらめに見える照準は的確に犯人の身体の一部に合っていたのだ。

その瞬間に一気に武装した警官が走る！

すぐに3人とも拘束される。

「おっと…形勢逆転か…」

署長の椅子に座っている犯人のリーダーのような男がため息に似ている言葉を放つ。

「大人しく投降しろっ！」

政人はまっすぐにその男に銃口を向けている。

8月26日、その2

——
元木 もとぎ
純 じゅん

性別：男

年齢：20

職業：ヤクザ準構成員

身長：178センチ

体重：69キロ

力：A
頭脳：S+

魅力：B+
潜在能力：SS

ランキング：125815000中>76位

地元、越谷で悪さをしているグループがいる。男4人でいつも万引きや恐喝、暴走行為や麻薬取引といった犯罪にあたるものは全てしている。

某広域暴力団の準構成員という肩書きがある。

彼（元木純、以後、純）は中学を卒業後、家庭の事情で高校には入学せずにそのまま就職。トビ職についたのだがわずが3年で退社。

そのままズルズルと溺れるようにギャンブルに嵌り多額の借金を抱える。

そんなときに出会ったのが某広域暴力団の越谷在住の舎弟頭であった。

若さゆえに暴力団の甘い言葉にすぐに乗ってしまい、地元で仲がいい（使い走りや悪友）友達3人と一緒に準構成員になることを決意したのだった。

今日8月26日、朝からとんでもない事件がおきる。純たちもそのニュースには驚愕し、すぐに逃げようと行動を開始したのだったが…

日も高くなつた頃に自宅に1人の男が現れる。

「こんにちわ！元木純様ですよね？」

「そうだけど…あんたは？」

「申し送れました…私こういうものです…」

男は真つ黒な名刺を純に手渡す。

名刺には『Real game』とだけかかれてある。

教養がない純は、「外人か？」と思いながら名刺を受け取る。

「本日は朗報を持って元木純様の下へ参上致しました。」

なんだか難しい言葉を使うこの男…

まあ丁寧な敬語だということはわかるので大して警戒する必要はないと判断した。

「拳銃に興味はございませんか？」

「なに！？」

「はい。拳銃でございます。どういふものかはご存知かと思ひますが？」

「お前がくれるっていうのか？」

「いえ…私は貴方様が拳銃を欲しているという情報を得ましたので、簡単に手に入れられる方法を伝授するために参上致しました。」

「ま…あがれよ…」

「ありがとうございます…失礼します。」

純はこの男の言う事は信じられなかったが…なんとなく興味本位で話しだけでも聞いてやると思えたのだった。

実際のところ拳銃は欲しい。

あれさえあればできる仕事（犯罪）の幅も増え、一気に構成員クラスの治療を受けられると思ったからだ。

「茶…いれるぞ…」

「あ…お構いなく…」

乱暴にガラスのグラスに麦茶を流し込む。

それが二つ。

ドンッ！

と机の上に置かれる。

「んで？どんな方法なんだ？」

「今朝方の事件は見ましたか？」

「ああ…時計が壊れたってやつだろ？」

「左様でございます。その事件の影響で現在交通機関はおろか、通信機関、店舗などの機関はストップしています。」

「それはもちろん警察もでございます。」

「ああ！？」

「警視庁は各都道府県の警察署と連携して捜査と発表しましたが…実際稼動している警察署は皆無でございます。」

「もうちょっとわかりやすく話してくれ…」

「つまり…警察署を襲うなら今がチャンスだと言つことでございます。」

「バカかお前！警察署を襲うとかまじで無理だろう。」

「不可能ではございません。私が確認したところによれば、現在、越谷警察署にいる警官はわずか１１名ほどでございます。」

「１１人か…」

「この話…乗りますか？」

「仲間と相談してみる…」

「幸いなことに貴方様はランキング１００位以内の強者でございますので…やれば造作もないかと…」

「もしも…」

「おい！携帯繋がらないぞ！」

「左様でございます。通信機器もストップしていますので…」

純は困っていた…なぜかこの男の話は信じられる…そんな確信にも

似た感情を抱いている。

だが、実際警察署を襲うなんて鬼畜？自殺行為？そんなバカな事やクザだって、ヤク中だってしねえ！

だが…話しが本当ならば願ってもないチャンスなのは当然なのだ…

「どうすればいい？」

「この話…乗りますか？」

「ああ…賭けてみたいと思う」

「了解しました。イベント参加ありがとうございます…」

「ああ！？」

「すみません…独り言でゴザイマス。ではこの品を贈呈致します…」

男は鞆の中からなにかを取り出した。

映画かアニメかドキュメンタリー番組で見たことがあるもの…

通称：戦場のパイナップル…

その鉄の塊のようなものは明らかに『手榴弾』と呼ばれている代物だ…

「これの使い方はご存知でしょうか？」

「えーっと…そのピンを抜いてから投げるんだったか？」

「その通りでございます。着地した衝撃により爆発いたします。範囲はおよそ半径3～5メートルほどでございます。」

「狭い室内でつかつたら、自爆しちゃうな？」

「さすが！理解が早いでございます。ですので使用する際は必ず距離を置くことを推奨いたします。」

「なんか…やれそうな気がしてきたぜ！！」

「ホホホホ…では、作戦は御自分で考えになってくださいませ…私がお手伝いできるのはここまででございます。」

「おう！なんだかかわからんが…ありがとなおっさん！」

「では、生きていればまたお会いしましょう…失礼します…」

怪しい男はまるで霧のようにサッと背景に同化するように消えていく…

「まじかよ…」

一流のマジシャンがまるで赤子に見えるこの芸当…生まれて初めて種がわからないマジックを見た子供のように純は驚愕している。

なんだか居ても立ってもいられなくなった純はさっそくその手榴弾をバッグに詰め込み、仲間と合流するために行動を開始した。

あの怪しい男…

ところであいつは一体…

セールスマンとか言うやつなんだろうか…？

もしくは同業？右翼？

ま…そんな事はどうでもいい…

俺の野望のために、拳銃を手に入れる…

「やっちまうぞコラア！！！！」

純は自宅に止めてある車（黒のオーディィ＝盗難車）に乗り込みセルを回した。

—— 謎の男

性別：男

年齢：？？

職業：ゲームマスター

身長：169センチ

体重：60キロ

力：??

頭脳：??

魅力：??

潜在能力：??

ランキング：ランク外

称号：チャンスを与える者

8月26日～その3～

時間はわからないが…おそらく純の元へ謎の男が現れて手榴弾をも
らってから大体1時間後…

純の目の前には3人の若者が集まっていた。

正面、金髪（署長にナイフを突きつけた男）の男、名前は進。

左、茶髪（幹部を縛りつけ、拘束…それから監視していた男）の男、
名前は秀平。

右、坊主頭（幹部を一箇所に集めるように支持、それから拘束、監
視していた男）の男、名前は隆。

そしてそれに対面するように純が座っている。

場所は越谷のとあるコンビニの中。

当然従業員はいないので中の品物は彼らのやりたい放題に食われ、
飲まれ、散らかされている

8月26日～その3～

「まじかよ…純本気かよ！」

…と進。

「おいおい…無茶いうなって…」

…と秀平。

「まじっすか！なんかめっちゃ熱いつすよ！」

…と隆。

「まあ俺に任しておけよ？下手すりゃ俺ら全員、拳銃が持てるんだぜ？そうなたらもう俺らの時代になる！」

純は目を輝かせ、これからの作戦を3人に聞かせている。進と秀平は「おいおい！」「いやゝまじキチィゝ！」と愚痴を漏らしながら聞いている。隆は「熱いつす！純さんまじばねえっす！！」とノリノリで聞いている。

純は手元に置いてある缶ビール（エ。ス）をぐいっと飲み。煙草に火をつけてから一息つく。

「景気付けた！お前らも飲んどけ！こんな酒はいらねえと無理だからな？」

「しよーがねえなあ！やってみつか…！」

…と進。進も缶チューハイ（カシオレ）をぐいっと飲む。

「純！俺らに向かって手榴弾投げるなよ？」

…と秀平。秀平も純米大吟醸（日本酒）を水のように喉に流し込む。

「熱いつす！まじでやべえっす！俺先輩方に着いてきてまじで感激したっす！」

…と隆。隆は木工用ボンドをたらし…それに火をつけて匂い？を嗅いでいる…（良い子はマネしちゃだめです><）

「気合を入れるだけだからな？ベロンベロンになるんじゃないぞ！」

「ばか！わかってるよ！」

「ははは…心配症だな〜純は！」

「ういつす！まじで熱いつす！」

作戦の確認をしながら4人はコンビニの中でやりたい放題の悪行を繰り返していた…

8月26日、その4

作戦…開始！

まずは正面玄関に純が車で突っ込む。

隆と秀平は裏口から忍び込んで偉そうなやつを脅す。

その隙に純と進は署長室を一気に目指し、署長を脅して拘束。そして指示に従うように署長に命令する。

浅はかな強行突破作戦だが…純にはなぜかこの作戦は成功すると確信があった。

自信とも言えるこの至極の作戦。

失敗という二文字は全員の頭から除外されているのだ。

「歯！食いしばれえ進！！」

「おう！！純やっちまえ！！！！」

純はアクセルをベタ踏みし、正面玄関へ急発進させた！！！！

正面玄関に車で突っ込んでから、恐ろしいほどとん拍子に作戦が進む。

「おらあ！！！！早くしねえとこいつぶつ殺すぞ！！！！」

進が気合の入れた声を叫ぶ。

（おうおうおう…こいつらびびってるぜ！）

（進さんまじばねえっす）

各々、進に対して賞賛している。

だが、署長の椅子に座っている純は少し違和感を感じている。

影で動いている何者かの気配に敏感になっているのだ…

（つえゝやつがくる…）

純は手榴弾を左手に持ち、不穏な気配を辿っている。

「！！！！！！」

今空気が変わった…

（なにかがくる！）

勢いよくドアが開かれる！

奥から素早いなにかが走ってくる！

ガウンガウンガウン！！！！

3発の銃声。

進、秀平、隆から悲鳴があがる…そして次々に拘束されていく…

「無駄な抵抗はやめて投降しろ！」

1人の警官が銃口を純に向けている…

「形勢逆転だな…」

純はニヤリと笑みを浮かべた。

（このときを待っていた！）

相手が勝利を確信した瞬間に隙が生まれる…これは喧嘩の基本だぜ？

「勘弁してくださいえ〜！」

人をバカにしたような声を出す純…

左手から鉄の塊…

つまり手榴弾が警官たちのど真ん中に放たれた！！！！

ドッゴーーーーン！！！！！！

すさまじい爆風…

署長室は瞬時に灰と化した…

「あれは手榴弾！」

すぐに投げられたものに気付いた政人…

すぐ近くにいる晴香の腕を引っ張りドアの外へ飛ぶ！

純はすぐに署長の椅子から更に奥へ走り身を屈める…

友達3人はその状況に呆然としている…

強烈な衝撃音…爆風…

その場に生存しているものは

純と政人と晴香だけになった…

頭が吹き飛ばされた者…

臓物をばら撒きながら息絶えているもの…

もはや人間かどうかわからない肉の塊になっているものが大半…

純はその状況を確認した後に、すぐに武器庫を向かって走り出した！

「あの野郎！やってくれるじゃないか！！！！！」

晴香は怒りを露にさせて純を追う！

「まで！！深追いするなあ！！！」

政人もその後続く！

一直線に武器庫に向かっている純…

（大丈夫…鍵は署長が持っているはずだから…え！？署長！？さつき拘束されて…）

「まさか！すでに鍵も確保済みなのかつ！！！」

政人が晴香を追い抜き純へ近づく！

だが、純は追ってくる二人になどまるで興味がないうちに更に速度を上げる…

中学時代…

純は陸上部に所属しており、当時は県内1位の短距離選手だった…
資質だけの足の速さなのだが…なにしろ若いこともありかなりのスピードで走る！走る！走る！

政人や晴香といった現役の警官でさえ追いつけない…むしろどんどん引き離されているのだった…

武器庫にいち早くたどり着いた純はドアを強引に開け、中から鍵をかける。

「ハアハア…」

呼吸を整えながら拳銃を物色していく…

「弾薬はこれか…」

たどたどしい手つきで確実に銃に弾を装鎮していく…

（問題はここからだよね…）

さっき走って追ってきたのは男と女の警官。

（俺がここに着いて少し時間が経った…やつらはもうすぐ近くまできているだろうな…）

ドンドンドンドンドン…！

荒々しいノックの音が聞こえる！

「そこをあけなさい！」

「もう逃げ場はないんだぞ！大人しく投降しなさい！」

思ったとおり先ほどの二人の声がする。

「死にたくなかったらドアから離れるんだな！」

ガウンガウンガウンガウンガウン……！！！！！！！！！！

とりあえず全弾をドアに向かって発砲！

牽制のつもりで打ってみたが…予想以上に銃の反動が強く思わず尻餅をついてしまう純…

（こりゃ…なめてたわ…）

銃声とともにドアの向こうが静かになる。

距離を取ったのか？

新たにまた装鎮しなおし…即座にまた発砲！！

全弾をドアに向かって打ち切る！！！！

もはや蜂の巣のようになっているドア…

（これだけ脅せば…やつらもそう簡単には動かないだろうな…）

すでに装鎮した銃を机に置き…

とりあえずここは火薬があるので少し離れた場所で一服する純。

（ちて…ぶつぶする…）

ドアの外には警官が二人…

おそらく相手も銃はもっているだろう…下手に突っ込めば確実に返り撃ち…そして御用…

確か女のほうは3発撃った。男のほうはまだ撃ってない。

だとすれば合計で9発…

武器庫の中を見ればわかるが装填できるのはここだけなはず、女のほうが発薬を補給できるはずはない…

(少し…乱暴な手を使うか…)

純は両手に銃を持ち、ズボンのポケットやバッグにありったけの弾薬を詰め込んだ。

「勝負してやるぜコラァ！…！」

叫びながら武器庫のドアを蹴破った！

おそらく相手は挟み撃ちのようにドアを挟んで両側に構えているだろう…

純が警官だった場合の状況もよく考え…すぐに敵の作戦を読む。

出口は向かって左、右は曲がり角があって潜むにはもってこい…

となると、残弾が多いほうが右側、少ない方が左側に居る可能性が高い。

（こっちは最大で12発…腕や足の一本やられてもたぶんこちらが有利）

純は完全にドアからでないで左側に向かって手だけ出して一発放つ！

（照準なんてあわせてねえから…この目的は俺が出るって合図さ！さっさと着やがれ！）

すぐに純は弾薬を補充し、迎え撃つ準備を完了する。

ガウンっ！！！！

一発だけの銃声が響く。

その音に晴香と政人は気づいた。

いよいよ銃撃戦の開始か…

各々が気を引き締め、先ほどの手榴弾もまだ持っていると想定し、出口側に晴香、曲がり角付近に政人が待機していた。

「ザザザー…神藤警部補！ガガッ…犯人はそっち側に…行…ジー…」

政人は予め武器庫の近く、だが完全にドアから出ないと見れない位置に無線機を置いていた。

それに向かってあえて犯人に聞こえるようなわざとらしい連絡を送る。

その意図に晴香はとくに気付いているが、先ほど政人に引つ張られた腕の激痛が予想以上にきついらしく、反対の手で了解の合図を送る。

犯人はまっすぐ出口側に向かうはず、そうなたら政人が後ろから足を打ち抜く…この作戦はほぼ完璧だった。

相手が純でなければ…

（バレバレだぜ…お二人さん…）

純はしっかりと無線の声を聞いて確信する。

敵がわざわざ無線機を使って純に聞こえるように連絡した意図…それは明らかに自分たちの位置を教えるため。

純の推測どおりの配置。右側に6発の男。左手に3発の女。ならば左側に出れば逃げ切れる可能性が高い…

（思ったとおりだ…だがな？こういう場合は…）

純は煙草を壁に押し付けぐちゃぐちゃにする。

純は椅子を手に持ち、左側に投げていく。1台や2台という数ではなく武器庫においてある椅子という椅子を全て左側に投げる！

ドガッ！ガシャードカドカ…

椅子が投げつけられ落ちた音が連続して響く。

当然晴香は左側にいるため椅子が飛んできのを見ている。予想以上の力で投げられているので晴香の場所まで飛んできく。

意識しなくてもそんな攻撃は避けれる晴香なので軽々と避ける。

そして最後に両手で武器庫に置いてある机を左側に向かって投げる！

ズシンっ！！！！

見た目よりも重いと感じさせられる机が落下する音が響いた。

（準備完了！っと！さて！警察さん？勝負開始だぜ？）

純は迷わずドアから向かって『右側』へ走り出した！

ドタバタ…ドタバタ…

と純の足音が聞こえる。

まっすぐ政人のほうへ向かっていく純を目視して晴香はあわてて銃の引き金を引く。

ガウンガウンっ！

2発の銃声が響く！

まっすぐ純の背中を狙ったのだが、信じられない動きで横に飛ぶ！

まるで背中にも目が付いてるかの如く簡単に避けられてしまっ！

（クソガキ！生意気な動きするんじゃない！）

晴香は今の純の回避行動にぶち切れ、すぐに後を追おうと行動を開始す…

「……………これは…」

一見無造作に投げつけられたように思えた椅子や机が見事な壁を形成している。

跨ぐと思つことできたと確認できる緻密な壁。晴香の目線には映らないように、なおかつ気付かれないように作られた『壁』

「チッ」

思わぬ障害物に晴香はもたつき、なかなか前へ進むことができない…

その間に純はまた先ほどの追いかけっこのスピードで走っていく！

政人もすぐに足音に気付く！

（いよいよ敵が動いたか…）

しかし、よく聞くと足音は政人の方へ向かってきているように近づいてくる！

ガウンガウンっ！

2発の銃声が響く。

（これは神藤さんの打ち方だ！）

だが足音は止まらない！

どうやら敵は回避したらしい…

（まっまずい！！完全に裏をかかれた！）

「気付くの遅いぜ？おっさん」

ガウンっ！

銃を持っている右腕を打ち抜かれた！

政人は「うっ」っとうめき声を上げ、咄嗟に銃を離してしまう。

「さあ？両手をあげな？死にたくなかったらな？」

冷血な純の声が聞こえる。政人は仕方なく両手をあげ、降参の姿勢をとる。

ガサゴソガサゴソ…

遠くでは晴香がまだバリケートにもたついている音が聞こえる。

「いい判断だな？でも惜しいな？おっさん…やっぱ、素人だわ！」

ガウンっ！

政人の額に直径2センチほどの穴が開く…

刹那！

夥しいほどの出血…まるで噴水のように額に開いた穴から血が吹き出す！

同時に政人はその場に倒れた…

「俺…どうも警察のおっさんって好かないのよ？悪いね！」

（さて…）

政人は懷から常備しているサバイバルナイフを取り出し、倒れている政人へゆっくりと近づいていった…

やっとバリケードを突破した晴香は脱兎の如く、政人のいる位置へ走りだす！

ガウンっ！

向こう側で2発目の銃声！

同時にドサッ！と人が倒れた音がした！

（どっちかがやられた！）

きっと犯人を仕留めたんだろう…晴香は政人を少しは信頼しているため若干の気持ちの余裕がある。

ザクッザクッ…

ボギイ！！！！！！！！

ザクッザクッ…

なにかを切るような音が響いてきた。

（なんの音だ？）

晴香は少し警戒をしながら政人がいると思われる位置へ走った！

晴香に向かって何かが投げつけられる！

（まずい！手榴弾かもしれない！）

晴香はすぐに真後ろに飛ぶ！

…がそれは手榴弾ではない。ボーリングの玉？ほどの大きさのなにか。

（なんだこれは…？）

晴香はそれを確認する。

「いやああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

晴香らしくない、まるでそこらにいるギャルのように高い悲鳴が晴香の口から放たれる。

カツカツカツ…

政人が待機している位置から晴香に向かって近づいてくる足音が……

晴香には聞こえたような気がした…

「へえ〜？アంతもそんな可愛い声出すんだな？」

晴香はその声に気づき、少し上を向く。

そこには…

先ほどの犯人がヘラヘラ笑いながら立っているのが見える。

それは当然だ…

目の前にあるボーリングの玉ほどの大きさのものは…

政人の生首だ…

「悪いな？ちよつとその角でこのおっさんと揉めてさ？このおっさんが襲ってきたから…正当防衛ってやつ？ははは…」

政人は余裕ぶって煙草を吹かしている。

現場ではいつも冷静で冷血で無鉄砲な晴香は一言もしゃべれず、虚ろな目で政人の生首を眺めることしかできない。

殉死した同僚も何度か見てきているが…実際にこうして遺体を間近で見るのは初めてなのだ…

「……………許さない……………」

ボソッと殺意が込められた言葉を晴香がつぶやく…

純はやつとこの婦警さんが気持ちを切り替えたと察し、煙草を投げ捨て左手に持っているサバイバルナイフを晴香の首元に突きつける。

「おっと動くなよ？アンタまじこえゝって！もう怖すぎて小便ちびった！」

晴香の首元に冷たい…いや！政人のぬるぬるした血がまだ滴っているため生暖かい刃が当たっている。

「ってことでこれは没収な？」

純は晴香が握っている拳銃を強引に掴み取り、晴香の後方へ投げた。

「んじゃ俺…ちょっと用事あるんで…？帰っていいですか？」

人をバカにしたような軽口を叩く純…

晴香は今自分が置かれている現状を把握すると今はまだ戦うべきではないと判断する。

「いいわ…私らの負けね…」

降参するように手をひらひらとさせ、晴香は純から目を反らす。

「え…？ノリ悪いな…？婦警さんも一緒にこいよ！見送りくらいしてくれって！」

純はすでに政人から奪っていた手錠を…

晴香の両手首にしっかりとめ、その真ん中の鎖のような部分を片手で持ち、強引に晴香を同行させた。

引きずるように晴香を強引に歩かせながら純は正面玄関に到着する。

「あゝちなみにさ？」

晴香はブスッとふて腐れながらそっぱを向いている。

「ここで死ぬのと…後から死ぬの…どっちがいいっすか？」

（なにを言ってるんだこのクソガキ…）

「愚問ね…アンタに殺されるくらいなら、自分で舌嚙み切るわ！」

「おゝ！ かけえゝ！！ さすがっす姉さん！ いいねいいねゝ まじ気に入ったわ！」

「よく見ればアンタ美人だしな？…へえゝ晴香っていうんだ？かわ

「いい名前だなあ？」

じろじろと晴香を舐めるように見る純。

（だからガキだってんだよ！）

その一瞬の隙を見逃さなかつた晴香は、素早い身のこなしで純の腹のあたりに蹴りをいれる！

「ぐはっ！！！！いってえ！！！！な！！くそがああああ！！」

だが、喧嘩慣れしている純にとってはそれほどのダメージにはならなかったらしく、一瞬にしてまた張り詰めた空気に戻る！

「覺悟しろ！！くそ女！！！」

「あんまりなめてるんじゃないわよ！クソガキ！」

晴香は舌を出し、すぐにでも噛み切れると主張するように純を挑発する。

それを見た純は更にブチキれるが…今晴香に手を出せば確実に自分

で手では殺せない…そう思うことで自分を抑止している。

「あゝもう！だめだな…アンタは俺の手で殺すことに決めたわ！」

「クソガキ如きに殺されてやるほど私はお人好しじゃないわ！」

「あゝ！まじでムカつく！もういい…こい！この野郎！」

強引に晴香を引っ張りながらパトカーに晴香を押し込む。

最後に純は突っ込んだ車のガソリントankのあたりに発砲している。

しばらくそれ続けていると

ドッゴン…！…！…！…！…！…！

と凄まじい音を立てて車が爆発。ガソリンに引火したらしい。

警察署はすぐに火の海に包まれ、瞬く間に黒煙を噴出し始めた。

それを確認した純は晴香を詰め込んでパトカーに乗り、セルを回す。

一旦自宅に帰るらしく家路へと走らせた。

——
元木 もとぎ 純 じゅん

性別：男

年齢：20

職業：ヤクザ準構成員

身長：178センチ

体重：69キロ

力：A

頭脳：S+

魅力：B+

潜在能力：SS

ランキング：125815000中>76位>変動

125815000中>3位

称号：武器獲得イベントクリア者

Real Game初日～予選～（前書き）

結果報告

Real Game初日ゝ予選ゝ

参加者>125815000人

生存者>125814023人

死亡者>707人

失格者>270人

ハンター>470人>変動なし

総合ランキングトップ10

第1位
New→

プレイヤー
村尾武蔵 総合:SS

称号:武器獲得イベントクリア者

第2位
New→

近距離攻撃タイプ型No08（ハンター）

総合：S+

称号：ソードマスター

第3位

New→

プレーヤ
元木純総合：S

称号：武器獲得イベントクリア者

第4位

New→

プレーヤ
黒沢瑞貴総合：A+

称号：次回イベント参加資格者

第5位

New→

遠距離狙撃型No01（ハンター）

総合：A

称号：ライフルマスター

第6位 N e w →

近距離攻撃タイプ型N o o 2（ハンター）

総合：B +

称号：切り裂き魔

第7位 N e w →

遠距離狙撃タイプ型N o o 0（ハンター）

総合：B

称号：一匹狼の乱射魔

第8位 N e w →

相沢龍太郎総合：C +
プレイヤー

称号：逃げ切った者

第9位 N e w →

近距離攻撃タイプ型N o o 6（ハンター）

総合：C

称号：二刀流の申し子

第10位

New
→

ゲームマスター
赤い男総合：D+

称号：悪戯好きなGM

バグによる死亡者の復活処理。

阿久津 修一

大津 聡

木村 瑠菜

近藤 正隆

三浦 勝也

以下、
五名。

復活ポイントにて再生。

運営者から一言：

現在システムエラーが勃発中でございます。原因はウイルスによるバグです。次回のメンテナンスで対処致しますのでそれまではご了承ください。

それでは引き続き、Real gameをお楽しみ下さいませ。

PS：『赤い男』には充分気をつけてください。

それでは皆様、御機嫌よう。

8月27日

副社長の手料理はそこらにある高級レストランに負けずとも劣らずな出来だった。

玲依はすぐに帰宅するところだったのだが、副社長の厚意で今日は自宅に止めてくれると言ってくれた。

時間はわからないが外は暗い。満天の星空が夜と伝えてくる。

夕食もそのまま副社長宅でご馳走になり、今は二人で晩酌をしている。

「そーいえば副社長のお名前って聞いたことないんですけろぉ！」

酒が弱い玲依はだんだんと呂律が回らなくなってきた。だが、治臣は日中起きた事も考慮してくれ礼儀などは不問としてくれた。

「ああ…神藤治臣だ」

「じゃゝはるちゃんでもいいかぁ！」

「ああ…かまわんよ…」

高級そうなワインを片手に治臣は満更でもない顔をしている。

玲依は今まで飲んだことのない高級なワインをグビグビと缶ビールを飲むように喉に流し込んでいる。

「そーいえばあたし着替えとかもってきてないんだよねあゝ」

「ああ…妹の服があるから今日はこれで我慢してくれ」

「へえゝ！はるちゃん妹さんいるのらあ？」

「ああ…たまに妹が泊まりにくるから服が置いてあるんだ」

「そつかあゝ妹かあゝはるちゃんに似てたらきつと美人だろうなあ？」

「それはわからないがな」

既に玲依は飲める許容量を超えた酒を飲んでしまい、ベロンベロンになり始めた。治臣はそれでも無理に抑制しようとせずに、一日の疲れをとってもらいたいと思っているのだ、寛容な態度なのだ。

（普段なら締め出すがな…）

治臣は冷蔵庫からマヨネーズのチューブを取り出し、キャップをあけて一気に喉を鳴らす。

「はっはるちゃんそれ！マヨネーズらよお！！！」

「え？これ飲み物だぞ？」

「え？」

「え？」

なんとも言えない空気が二人を包んだ。

「飲むか？」

「え？」

「いや…ええ??」

「え？」

時間にして約30分ほどそんな会話をしている。治臣にとってマヨネーズとは飲み物であるらしい。

だが、ベロンベロンの状態の玲依でもそれには「え？」と混乱できってしまうほどに強烈な光景なのだ。

すっかり酔いが醒めたらしい玲依はシャワーを借りるとだけ断りを入れて、シャワールームへフラフラしながら歩いていった。

（いやいや…飲み物だよな？）

治臣は確認するように自問自答している。たぶん変わっているのは玲依のほうだと強引に納得し、グラスに入ったワインを喉に流し込んだ。

真上から丁度いい温度のお湯を浴びながら玲依は治臣が満足そうな顔をしながら飲んでいるものをもう一度思い出す。

「マヨラーってよく聞くけど…あれって…その上だよな…」

初めてみたキングオブマヨラー…治臣の意外な一面を見た玲依は人知れず「クッククク…」と笑いを堪えるのに必死だった。

（イケメンが考える事ってようわからんな…修一もそうだったし…）

修一…

（なんで今頃、昔の彼氏の名前が出たんだろう…）

玲依は哀愁を漂わせたような顔でぼろろとなにか考え事をするようだ。

（修一…か…）

胸の丁度真上にある傷跡を摩りながら、玲依は大きくため息を吐い

た。

（まさか渡辺くんは…ケチャップ派！？）

治臣はまだ先ほどの事を考えている…

（なるほど…そうだったのか…マヨラーとケチャラーは昔から因縁があるからな…うむ！先ほどの態度も頷ける！ここはケチャラーに取っては敵陣のど真ん中となるわけだ）

なんだかよくわからない治臣の脳内世界だが…なんとなく治臣なりに玲依はマヨネーズ『は』飲まないと解釈できた。

（状況が状況だからな…）

治臣は冷蔵庫の野菜室の中にトマトが入っていることを思い出す。

（普段はこんなことしないんだがな…）

治臣はケチャップを作り始めた…

玲依はシャワーから出ると周囲に立ち込めるトマトのような匂いに首を傾げた。

だが、治臣がまたなにか作っているのだろうと悟るとワタワタと着替えを始める。

（そういえば着替えがないんだよね……）

脱いだばかりの服を着てもいいのだが…それは玲依のプライドが許さないらしく、服を着るか、タオル一枚で行くべきかという悩みまですでに発展した。

「いや…無理っしょ？」

玲依はタオル1枚だけ巻いて治臣がいる部屋へ歩き始めた。

「なに作ってるんですか？」

キッチンで格闘中の治臣に後ろから声をかけてみた。

「飲み物だよ？」

玲依の頭の中ではクエスチョンが重なる。

明らかに匂ってくるものは飲み物というよりもなにかの料理に近いものであるからだ。

「ちよつと着替えがないので…」

「よく聞こえないな。なんだって?？」

治臣は無意識に玲依の声が聞こえたあたりを振り返った。

「ちょ…！渡辺君！私はそんなつもりは…！」

「ん？どうしたんですか？」

「いや！私は決してそういうつもりで呼んだのではない！断じてない！」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「いや…あの…着替えが…」

「あ！そうか！そつだよな！」

「暑いのでこのままでも私は涼しいのでいいんですけどね」

「いやいやいや！ちゃんと服は着ろ…」

「代えの服なにも持ってきてないの…」

「じゃ！おっ俺のやつ着ればいいだろう…ちょっとそこで待っててくれ！」

「私もいきますよ」

「そこから一步も動くなあ！！！」

「はい…」

…というやり取りから小1時間後ほど経った。

玲依は治臣のＴシャツを貸してもらい着ている。下は同じく治臣の寝巻きのような半ズボンだ。

タオル1枚でいるよりは遥かにマシなのだが、ラフすぎる格好に治臣はたまに声がひっくり返るほど動揺も見せている。

時間がわからなくなった現在は何時なのかもわからないが…もうすぐ朝が近いと目視できるため、おそらく4～5時くらいであると思える。

会話も一通り終えてしまったので、ぎこちなく時間だけを過ごす二人。

玲依もその空気にちよつと参ってしまっていてるので戸惑ってい

た。

「テレビつけてみませんか？」

「そっそっだな！」

なにげない玲依の言葉でも治臣にとっては強力な武器のように胸に深く突き刺さってしまう。

玲依にいちいち過剰に反応してしまうようになった治臣をみながら、玲依はニヤニヤと悪魔のような笑みを見せ始めている。

ほとんどチャンネルは深夜放送すら流れておらず、相変わらずの砂嵐だ。

24H放送のあの局でさえカラーバーが出ているのでテレビから得られる情報はもはや皆無であることがわかる。

「やっぱりどこもやってないですね……」

「そっだな…困ったもんだ。」

最後にNHK（民放）をつけてみる。

「あ……」

「え……？なにこれ……」

テレビに映し出された映像に二人は息を呑んだ。

テレビの画面には見たこともないものが映し出されている。

参加者 > 1 2 5 8 1 5 0 0 0 人

生存者 > 1 2 5 8 1 4 0 2 3 人

死亡者 > 7 0 7 人

失格者 > 2 7 0 人

ハンター > 4 7 0 人 > 変動なし

一体なんのことなのか…そしてなにを表しているのか…

玲依にはもはや理解することすら不可能な画面だ。

だが、治臣は眉間にしわまで寄せて必死にその画面を凝視している。

「これはまさか…」

「なにか知っているのですか？」

「確証はないが…おそらくは…」

「一体なんですか？これは…」

「Real gameなのか…」

「え？」

治臣はそれ以上は口を開くことはなく、考え事をしながらブツブツと独り言を始めた。

玲依は一体なにが起きているのかも理解していないため、すぐにも治臣の口から説明の言葉が放たれるのに期待している。

「動揺しないで聞いてくれ…」

「はい…」

「これは…最悪なことだ…日本は…国民を見捨てた！」

「どういことですか？」

「破産だよ…日本が破産した。」

「え？」

「自己破産って言葉は聞いたことあるな？それを国がしたようなもんだ…」

「聞いたことありますが…一体…」

「完全に0になるまで精算しなきゃいけないんだよ…」

「つまり？」

「つまり！国の財源、資本…価値のあるものは全部処分するってことだ！」

「ええ！…！」

「日本は民主主義…ってことは？」

「わからないです…」

「国民も財産の一部ってことだよ…」

「え……0までってことは…」

「ああ…」

「ええ!?!」

「これが現実だ…」

「嘘でしょ…」

「これはあくまで俺の推測だけだな…」

「予想であってほしいですね…こんなのって…」

「そうだな…だが、2件ほど事例もある…」

「え!?!事例あるんですか!?!」

「ああ…かつて同じように破産した国が2つある。その国でも破産

の精算…つまり…」

「Real game…ですか？」

「ああ…それを実施したらしい…」

「その国はどうなったんですか？」

「消えたよ…」

「消えるって？」

「地図上から名前も消えて…色も真っ白…未開拓の地扱いになっている。」

「それみたことありますよ!!」

「ああ…そういうことだ。」

「画面みてみる…このハンターってあるだろ？」

「470名…変動無し？ってこれですか？」

「ああ…おそらくこいつらが…精算人だな。」

「なんですか？その人たちって…」

「1人残らず処理するやつらだよ……」

「処理って……」

「皆殺しってことだ…」

「ええ！！！」

「大人しく殺されるか…戦うかしかないだろうな…」

「私はそんなの…どっちも無理ですよ…」

「俺も勘弁だな…」

「そうですね…あはは…」

「ははは…」

会話を終えた二人はまたしばらくの沈黙。数字が並んでいる画面を見ながら落胆のような表情を見せている。

まるで冗談のような治臣の説明あったが…玲依は妙に納得してしまい、現在日本で起きている出来事が繋がってしまった。

「私まだ死にたくないですよ……」

「それは俺も同感だな……」

ガッシャー————ン!!!!

二人の空気をぶち壊すように窓ガラスが割れる音が響いた！

「え？え？」

「まずいぞ！見つかったらしい！」

「見つかったって？」

「おそらく銃撃だろ！これは！ハンターだ！」

「えええ！！！」

「逃げるぞ！！渡辺君！」

治臣は玲依の手を掴み、車が止めてある駐車場まで一直線に走った！

8月27日、その2

突然の銃撃に玲依は動揺しながら必死に治臣の後を追う。

幸い衣服は治臣の寝巻きなので走りやすく、足を引っ張るところか治臣を今にも追い越そうとしているほどのコンディションになっている。

階下へのエレベーターまではすぐに到着したのだが……

エレベーターは2階から徐々に上がってきている状態だ。

そこは不幸とも言えるだろう。治臣の部屋は最上階……15階であるため1分ほどの時間ロスがあるのだ。

「はあ……はあ……はるちゃん……最上階なのになんで……窓が割れるんですか？」

「おそらく……あれはライフルによる狙撃だ。」

「らっライフル……ですか…」

「ああ……向こうは完全に殺す気できているからな……」

「逃げるってどこへ逃げるんですか……？外でたら返って危ないと思いますけど……？」

「それは俺も同感だが……向こうが部屋へ入ってきたらそれでもうおしまいだろう…」

「あっ！ですよねえ」

チンっ！

エレベーターが最上階へ到着。

二人はすぐに乗り込み、治臣は駐車場へのボタン（B1）を押した。

ゆっくりと下降していくエレベーター内…

玲依はなんとも言えぬ緊張感に圧迫され、やや震え始めている。

治臣はすぐにその状況を察し、優しく肩を撫でてゆったりなんとか元氣付けようと必死になっている。

「とりあえず、駐車場に着くまでは安全だから…」

「はい………」

しかし…

エレベーターという強靱な箱。

狙撃には強いと思われるのだが…盲点があった…

バチンっ！

突如エレベーター内の電気が落ちた。

不意に訪れた暗黒に玲依は少し悲鳴をあげる。

「……しまった！！！」

どうやらエレベーター自体も降下するのをやめ、止まってしまっているように感じられる。

「え？え？え？止まっていますよねこれ……………」

「ああ……………完全にやられたなこりや……………」

8月27日、その3

「困ったな……このままここにいたら危ない……」

「動きようもないですよ……」

暗闇のエレベーターの中で二人は途方に暮れている。

「脱出しよう。やはりここにいるのは危ない」

「そうですね……どこかに脱出口でもあれば……って！なにをしているんですか！？」

治臣は無理やり前方の扉をこじ開けようとしている。

電気が通っていないエレベーターの扉はかなり重く、男1人の力でも容易には開こうとしない。

「無駄ですよ……こういうのって大抵真上になにか出口が……」

玲依は上を見上げながら目を凝らしている。

治臣も釣られて玲依の視線の先を追う。

「確かに……なにかあったと思うが……」

……だが、背伸びをしても届くはずがなく、ため息しかでない状況である。

「やつぱ……扉あけるのが一番いいかもですね……」

「……………」

玲依はとりあえず真っ暗な中手探りでドアを探し出し、思いっきりドアを開こうとし……

「……………ダメ…これ開けちゃダメだ…」

玲依は第6感が働き行動を制止した。

本来ならばすぐにでも扉をあけて逃げなければならぬのだが……

ドアの外のただならぬ気配にすぐに反応したのだ。

「……………いる……………」

もちろんドアの前に誰かがいるなど、実際に開けて見なければわからないのだが……

「……………ん？はるちゃん……………？」

先ほどからやけに静かだ。暗闇の中頼れるのは嗅覚と聴覚のみ。

明らかに先ほどまでは二人いる空間だったのだが……

明らかに今は玲依一人しかいないと断言できる静けさなのだ。

「……………え？はるちゃん……………？どこにいるの？？」

話しかけても治臣は返事をしない…それどころか気配すらもない。

密室なはずのエレベーターから治臣は忽然と姿を消したのだ。

「うそ……あたし1人!？」

玲依はエレベーターの中で力無く、ヘナヘナと座り込んでしまった…

おそらくエレベーターの外にはハンターが待ち構えている。

このまま待機していれば確実に殺される。

先日のロッカーに隠れた時の事がフラッシュバックし始める…

「やっぱりあたしは……死ぬ運命だったのかな……」

やはり追い込まれると落ちてしまう玲依の性格上、マイナスに考えが進んでしまう。

だが、今回は本当に諦めに近い状況であるため、自然と死を受け入れる体勢が整い始めている。

そのため、玲依はどこか落ち着きがあり、一見すると余裕そうに見えるのだ。

バンバンバンバンバン……………

ドアを激しく叩く音…

しかも外部から衝撃を与えられているのがわかる。

この叩き方は悪意や殺意が込められているものだと言わなければならない。

（そんなことしなくても……大人しく殺されてあげるよ……）

玲依はいよいよ襲ってきた敵に対して白旗を上げている。

もう怖い思いをしなくてもいいと考えれば……

ここで諦めて死ぬのが無難だと思っているからだ。

バンバンバンバンバン！！！！！！

一向に鳴り止まない外からの衝撃音。

「もういいよお！！殺すなら殺せばいいじゃないか！！」

ブチ切れた玲依はドアに向かって叫んだ！

「……………か……………誰か……………いるのか?？」

まったく予想外の返事が聞こえた。

8月27日

昨日は妙な一日だった…むしろ昨日というか今日というか…

外は暗いがおそらく27日になっていると思う。

そしておまけに俺の家…

さっき急に停電になりやがった…

チクショウ……

一体どうなってんだよ…

とりあえず家にいても仕方ないので外に出る。

世間では確か物騒な輩が多いと言ってた。

武器なんてものはないが…とりあえずプラスドライバーだけポケットにいれてみた。

「しかし…暗いな…」

このマンションに住み始めてもう2年ほど経つが…

停電になったのなんて始めてだ。

やっぱり世の中おかしくなり始めたのだろう…

チクシヨウ…

ツバを地面に吐き捨てて、とりあえずエレベーターへ向かってみる。

「あゝあ…やっぱり止まってやがるし…」

下へいけるのはエレベーターと階段があるが…

ここは9階…

階段で1階までおりるのはアホだ。

（どうしたものか…）

ガタガタガタツ…

エレベーターの扉が少し動いたような気がした。

（まさかな…？）

ガタガタッ……

明らかに扉が動いている。

……が、停電が治ったわけでもないし、電気がついてるわけでもない。
い。

つまりこの中に人がいると断定できる。

「チッ……めんどくせえな……」

バンバンバンバンバン……！！！！

ありったけの力を込めて扉を叩く。

「誰か！誰かいるのか！」

（そんなもん聞かなくてもわかってているが……）

「今開けるからな！」

別に人に好かれなくてもいい…別にそんなもん臨んでないし、俺は
そこまで考えてない。

俺はただ……真っ当に生きたいだけなんだ…

（確か…あのへんに……）

非常用のボールがあったことを思い出した。

「チッ……やっぱガラスで覆われてやがる……」

めんどくせえ……もはやこれ開けるのもめんどくせえ……

「……………なら……せば……………いいでしょ!-!-!」

扉の中から聞こえた声……

明らかに女だ。しかも若い。20代であることは間違いない。

だが……それだけだよな……一体どんなツラしてんのかもわからんし……

まあ……声だけは良い……か……

なんも期待なんてしてねえよ?

別に俺は下心なんてねえし。

チクシヨウ…

思いっきりガラスを蹴破り中のパールを取り出す。

躊躇無く、扉の境目にパールを挟みこみ！

俺の持てる力をありったけ込めてこじ開ける！！

ガッガッガッガッ！！！！！！

（チツ…なかなか頑丈だな…チクシヨウ…！）

いざって時にこうして助けられればいいって思ってた…

だがな…

こりゃしんどいぜ……

びくともしねえ…

チクシヨウ……

少しだけ扉が開いたような気がする…

でもこんな隙間じゃ微妙すぎる…

「今ここあけてやるからな！危ないからちょっと離れていろよ？」

とりあえず隙間から中にいるやつ？に声をかけてみる。

返事なんてあってもなくてもいいんだけどな。

「すみません…ありがとうございます。」

（やっぱり女だわ…）

チツ…めんどくせえな…

だから女ってやつは…

放っておけねんだよ!!!!!!

—— 浅倉 一 (あさくら はじめ)

性別：男

年齢：23

職業：建築業

身長：178センチ

体重：67キロ

力：B+ 頭脳：B

魅力：B 潜在能力：B

ランキング：125815000中>798位

彼：（浅倉一、以後、一）は玲依が閉じ込められているエレベーターの扉を開けるのに必死になっている。

一は建築業であり、なかなかの力があるはずなのだが、疲れることを極端に嫌っているために、なかなか本気を出すことをしないのだ。

汗がとにかく嫌いらしく、その点だけは神経質らしい。

外見的特長はほぼなく、髪は短めの茶髪、眉毛も中途半端に整えられた太さ。

二の腕と胸筋だけみれば立派なもののだが、全体的に華奢と思えるような細身の服を着ている。着やせするタイプであるのは言わずともわかる。

顔全体もやはり特徴がなく、うすい目は常に眠そうで気だるそうな雰囲気を出している。

東京の若い男。おそらくその一言で片付きそうな外見だ。

今、目の前の扉を開けるのに必死になっているがこれは稀で、基本的に一はめんどくさがりな性分なのだ。

一の気まぐれで助けられている玲依は本当に幸運だったと言えよう。

額にはすでに汗を掻き始めているが、一らしくなくそんなことはお構いなしに作業を続けている。

やっと腕一本は抜けれるくらいの隙間まで開いたが…

まだまだ先は長そうなのは言わずとも知れている。

8月27日、その2

ガッガッガッガッガッ！！！！

先ほどよりも隙間が広くなってきている。

一は全力で扉をあけている。

その事で必死になっているため、周りの音などには耳を傾ける暇などないようだ…

カッカッカッカッ…

階段を登ってくる音が聞こえ始めるが、一はそんなことには気付きもしない。

隙間から玲依が見えそうで見えないのだが…

どうやらなにか座り込んで怯えている様子だ。

（暗い中1人でいたんだ…無理もないだろうな…）

一の感想はそれ。

しかし、玲依は全く別なものに怯え初めていたのだ。

確実に近づいてきていると玲依の第6感が反応している。

開けるなら早く開けて欲しい…

助けられているのはわかっているのだが、先ほど死を覚悟したばかりの玲依はなんだかやるせない様な気分なのだ。

カツカツカツカツ……

足音の大きさから大体相手の居場所がわかってしまう。

おそらくもうすぐ近くまできている。

このままでは本当に死ぬ。

しかも見知らぬこの男性も巻き添えにしてしまう。

玲依は居ても立ってもいられず思わず口に出してしまった。

「あのお……あたしもなにか手伝ったほうがいいですかね……？」

「心配するな！もうすぐ開くから。大人しくしててくれ！」

負けず嫌いなのだろうか…一は玲依の発言を切り捨て再び作業を開始する。

やっと頭が入るくらいまで扉が開いた。

ここまで開けばあとはどっちかの扉を横に押せば自然にもう片方も開く。

運がよく、段差もそれほど極端ではないところで止まっていたので、もう少し開けば簡単に脱出できるほどの広さまで開いた。

「ちょっと出てみますね！それくらいならいけるかもです！」

「そうか……？」

玲依はヨイシヨヨイシヨ…と声を出しながらよじ登って隙間から頭を出した。

意外と見た目よりも隙間が狭かったらしく肩まで出たところでつかえてしまった。

「ちょっと……胸がひっかかって……」

「……………」

あまり女性に免疫がない一は今の言葉にどう反応しているのかわからず、一応玲依の肩を引っ張る手伝いをしている。

しかし、身軽な玲依はそこからすぐに体勢を整えてやっとエレベーターから脱出できた。

間髪いれずに一にお礼をしてすぐに逃げるように諭す。

「はなにが起きてるのかわからないが、とりあえずは玲依の言うとおりには逃げる方向で行動を開始した。」

「あたしは渡辺玲依っています。あなたは？」

「俺は浅倉」。 よっよろしく。」

走りながら二人は簡単に自己紹介をする。

二人の向かっている先は非常階段だが、階下から何者かが上がってくる音がしている。

「一の耳にもその足音が聞こえているが…相手は明らかに1人だとわかる足音なので一応こちらは二人。もしも不審者だとしてもこちら側が有利なのは間違いないと思っている。」

もしものときのために一は一応先ほど使用していたボールを片手に持っているため、それだけで一応強気になっているのだ。

玲依はそれでも走りながらなにか危ないような……それでいて二人だけじゃ敵わないのではないのだろうか……と、嫌な感覚に襲われている。

非常階段まで目前といったところで二人の足が止まった。

前方になにかがいる…

雰囲気や気配。それから相手から伝わってくる殺意のようなものが感じられる。

明らかにこのマンションの住人などではなく、外部の人なのはわかる。

（やばい……）

一は本能的になにかを感じ始めた。

ガチャッ！

前方からなにか機械的な音が聞こえた。

8月27日、その3

暗くてよく確認ができないが、明らかに人間ではないような雰囲気だ。

前方のものが動くたびにガチャガチャと機械的な音が鳴る。

目に当たる部分からは赤い点が2つ点灯している。

サイボーグ…

まるで映画かなにかの世界に登場しそうな機械人形…

玲依と一は一言も言葉を発しようとはしない。むしろ声を出せば殺される…と本能的に恐怖を感じてるのだ。

ガチャガチャ…ウーン…

「……ターゲット確認。処理開始」

前方の物体が機械的な言葉を発する。

その言葉は明らかに二人にとっては最悪な展開が始まるうとしている合図だと理解できる。

逃げようにも一歩も動かないくらい体が硬直している。

声も出せないほどの恐怖。一度、似たような恐怖を体験している玲

依でさえ、頭の中は真っ白になりなにも考えることができないでいる。

一も今まで味わったことのない戦慄とも呼べる恐怖にただただ足を震わせることしかできない。

まだ対峙して数秒しか経っていないのだが…もう数時間経っていると思わせるほどの緊迫した雰囲気である。

ドスッ…！

柔らかいものになにか硬いものが刺さる音がした。

「いつ痛い…！！！」

玲依の太もものあたりにナイフのような鋭利な刃物が深々と刺さっている。そして、間髪いれず夥しい量の出血！

「……………なっ！！玲依さん！大丈夫かよ！」

一はすぐに玲依の太ももに刺さっている刃物を引き抜き止血を始めようとしているが…

ドスッ
ドスッ…

一の両腕にまた同じような鋭利な刃物が刺さる。

「いってえ…こりゃ…くそだろ…」

慌てて腕に刺さっている刃物を引き抜き、玲依に刺さっている刃物を引き抜いた！

ドスッ
ドスッ………！！！！

引き抜かれたことでかなりの量の血が傷口から吹き出す。元々低血圧な玲依は大量の失血でほとんど意識を失いかけている。今にも倒れそうなほどにフラフラになっていることから確実に死が近いことを予感させている。

（おいおいおい…一体どうなってんだよ…チクショウ！）

「おい！しっかりしろ！！おい！！寝るなって！！おい！！！！！！」

一はとりあえず玲依の意識を取り戻させるために頬を強く叩き、起きるように呼びかける。

しかし、声すら出せないほどに衰弱を始めた玲依は身振りで拒絶のような反応をしている。

（いいから…一さんだけでも逃げなよ！）

玲依は黙って真後ろの部屋、902号室を指さしている。

「あ…あそこから逃げれるから…早く逃げて…」

「902号室か…あそこ俺ん家だよ…なんでわかった…？」

玲依が指さした部屋は一の住まいであり、玲依と合流してから部屋の
ことなど一言も言っていないはずなのだが、一番安全なルートを迷
うことなく玲依は言い当てたのだ。

なぜわかったのか…そういう疑問もそこそこに一は玲依を抱き上げ
ゆっくりと部屋向かおうとしている。

「重い…から…降ろしてよ…」

「うるせえ！黙ってる…！」

ドストスっ！

逃げようとする二人の空気をぶち壊すように…

次は一のふくらはぎに刃物が刺さった…

それでも一は倒れず、ゆっくりと自分の家に向かって玲依を担いで歩き始めた。

戦闘とも呼べない…

機械人形の殺戮行動が開始したのだった…

8月27日、その4

ピピピピ...

データ照合完了。

渡辺 玲依
傾向あり

総合評価：D

戦闘値：2

スキル：開花

浅倉 一

総合評価：F

戦闘値：5

スキル：なし

ピピピピ...

「ターゲット確認、処理開始。」

ターゲット破壊プログラム、パターンD。

作業開始。

— 近距離中距離併用型N099

性別：不明

年齢：不明

職業：ハンター

身長：170センチ

体重：100キロ

力：SS 頭脳：B

魅力：F 潜在能力：F

ランキング：125815000中>125815000位>変動

125815000中>11位

称号：サイレントキラー

戦闘値：2300

スキル：中距離範囲射撃（最大ターゲット数は25個）

――

渡辺玲依HP50、浅倉一HP70。

パターンD開始。

ショットナイフ発動。

ヒット！

渡辺玲依HP変動あり、50↓18

ダブルショットナイフ発動。

ヒット！

浅倉一HP変動あり、70↓55

ターゲット逃亡傾向あり。

パターン変更。D↓E

ダブルショットナイフ発動。

ヒット！

浅倉一HP変動あり、70↓55↓21

.....

GMよりデータ受信。

戦闘中断。

「GMコード：005 ターゲットN000000000365、
キャンセル」 排除

データ受信終了。

戦闘再起動。

ターゲット変更。

渡辺玲依↓除外

浅倉一↓継続

ビビビビビ...

赤外線モニターより確認。

ターゲット時速2キロで階下へ逃亡中。

現在地よりターゲットの距離、100・23m

状況確認完了。

パターン変更E↓A

武器変更。 ナイフ↓遠距離狙撃型ライフル Ver006

「ターゲット確認。 処理作業継続、作戦開始。」

8月27日～その5～

現在、一は玲依を背負い、塗装業者のために作られた外壁の足場からひたすら階下へ降りている。

現在地は2階、もうすぐマンションからは脱出できるのだが、先ほど襲撃されたときの刃物での出血で足が思うように動かなくなってきている。

玲依は一応息だけは背中を通して伝わってきてはいるものの、かなり危険な状態なのはわかる。

一も最後に受けたふくらはぎへの攻撃で走る事が不可能になってしまっている。

敵から距離をおけたのは幸運であったが、次また同じように襲撃にあえばおそらく命はないだろうと確信できる状況であるのは間違いないのだ。

「しっかりしろ！！もうすぐだ！」

気休めにもならないような励ましの言葉だが、今の一にはそれくらいしか言葉をかけてやれず、痛みと戦いながたひたすら足を動かすので精一杯なのだ。

玲依は目をつぶり、呼吸をするのも精一杯のような状態で、やはり先ほどから太もからの出血がとまらず、血と一緒に生きる力も抜けていつているような感じである。

逃げると行ってもどこに逃げればいいのか、安全なところはどこなのか…

それすらも考え付かないような緊張した空気。

一は無我夢中で足を動かす。

（誰でもいい…誰か…誰か…俺たちを助けてくれえ！！）

神にも祈るような気持ちで一は足を動かす。

ドシユッ
…

背中からなにかの音が聞こえた。

一の背中には玲依がいる。

(ドシユッ…???)
(

恐る恐る一は背中 of 玲依を見る。

やはり苦しそうに息をしているように見える。

それだけだ。

（じゃあ今の音はなんだ？）

「いつてえ……！！！！！！！！」

突如現れた新たな激痛！

一の腹部から大量の出血が始まった。

その激痛で一瞬倒れそうになるが……

やはり一はまだ耐える！

これは鋭利な刃物なんかよりももっと凶悪な武器による攻撃……

おそらくは映画とかでしか見ることができないもの…

銃による射撃だ…

致命傷にならなかっただけマシ…だと思いたいのだが…やはり痛いものは痛い。

「チクシヨウ！！！」

ーはさらに加わった痛みにも耐えながらひたすら足を進める。

…………と、視界の先に明かりが見える。

（人か？ たっ助かった…）

「おーい！おーい！ちょっと……！」

なるべく声を抑えながら前方に見える明かりに向かって合図する。

あれはどつやら車のライトのようで、まっすぐゆっくりとーの方へ向かってきている。

（助かった……！！！！）

ガチャッ……

運転席から若い男が降りてくる！

「大丈夫か？後ろの子！とりあえず助手席に……」

「はい！すみません助かります…俺はともかくこの子がもうやばくて…」

「わかった…ここまでよく頑張ったな！もう大丈夫だ…」

運転席から降りてきた男は玲依を担ぎ、優しく助手席に座らせる。

そして…

そのまま運転席へ乗り込み…

躊躇なくアクセルを踏み込む。

ギュウウン!!!

……と急進した車は…

ドンッ！……！！！！！！

一を弾き飛ばし、そのまま後方へと姿を消した。

なにが起きたのか理解できてない一は…

無情にも地面に叩きつけられた。

ピピピピ...

「ターゲット瀕死確認……処理開始。」

至近距離から放たれたライフルの銃弾は…

一の頭部を粉々に吹き飛ばした…

R e a l G a m e ～ 予 選 週 計 ～ (前 書 き)

途中経過

Real Game 予選週計

8月27日～8月31日

参加者 > 125815000人

生存者 > 125806108人

死亡者 > 6908人

失格者 > 1007人

ハンター > 740人 > 1747人 > 1722人

総合ランキングトップ10

第1位

村尾武蔵

総合：SS+

称号：孤高の武士

戦闘値：2300

スキル：刀の極意

第2位

New→

中距離遠距離併用攻撃タイプ型N099（ハンター）

総合：SS

称号：残虐の傭兵

戦闘値：2300

スキル：中距離範囲射撃

第3位

New→

黒沢瑞貴

総合：S+

称号：ハンターを翻弄する者

戦闘値：1850

スキル：開花傾向あり

第4位

New→

新庄真琴

総合：S

称号：死神の威光を得た者

戦闘値：127

スキル：吸収

第5位

New←

元木純

総合：A+

称号：ハンターを倒した者

戦闘値：118

スキル：絶対回避

第6位
New→

須東恵一

総合：A

称号：明日を伝える者

戦闘値：????

スキル：発信
??
??

第7位
New→

赤い男

総合：B+

称号：悪戯好きなGM

戦闘値：????

スキル：??
??
??
??
??

第8位

New→

阿久津修一

総合：B

称号：地獄を見た男

戦闘値：76

スキル：開花傾向あり

第9位

近距離攻撃タイプ型No.06（ハンター）

総合：C+

称号：二刀流の匠

戦闘値：380

スキル：近距離武装特化

第10位

New→

野村太志

総合：C

称号：ハンターを倒した者

戦闘値：49

スキル：能力変化 パワーブレイク

バグによる死亡者の復活処理。

井上 章正

浦山 島三郎

岡山 桃次郎

佐渡 金乃介

武田 信

花輪 裕美

円 昭義

渡辺 玲依

以下、8名。

復活ポイントにて再生。

運営者から一言：

メンテナンス終了に伴い大幅アップデートを行う予定でございます。
今後素敵なイベントやクエストを実装致しますので楽しみに。

それでは引き続き、ハンターとのバトルをお楽しみ下さいませ。

P S：スキルの多用には充分ご注意ください。

それでは皆様、御機嫌よう。

9月1日

復活処理正常に完了。

渡辺玲依。再スタート。

ロゲイン。

あたしの頭の中で機械的な声が響いた。

なんだか頭が重い……フラフラする。

まだ目は開けてないけど、なんだか開けるのが怖い。

明らかにあたしはベッドの上？で寝ているのがわかる。

ちょっと固めのマットレス、上にはやっぱりちよっとお粗末な掛け布団。枕なんてこれ……座布団を折りたたんだやつなんじゃないかな……。

どうでもいいけど。とりあえずあたしは無事らしい。

あの状況…。

一さんと一緒に逃げてた様な気がする。

でもあの追っ手。怪我してない状態でも逃げ切るなんて絶対無理。

あんな映画でしか見たことがないような機械人間……

どうやって助かったんだろう…

だめだ……

あたしはやっぱり太ももにナイフが刺さってからが記憶がない……

あ……

フラフラするのは血が足りないからかな……

低血圧……

しんどいなあ……

徐々に五感が復活していくのがわかる。

ざわざわと遠くのほうで人の話し声が聞こえる。口の中はカラッカラ…

匂い。

これはトマト!?

トマトをなにかしてる匂いだ…

あれ?これ……

どこかで嗅いだ事がある匂い…

確か…

治臣さんの自宅で……

「ケツ……ケチャップ!？」

9月1日〜仲間〜

「お？目が覚めたか？」

「ほお〜！なかなか美人だな？」

「おい！純！スケベ丸出しだぞ！」

玲依の目の前には3人の人間が顔を覗かせている。

1人は治臣、もう1人はヤンキーのような若い男、もう1人はモデル顔負けの美白美人。

「え〜っと……治臣さん？この方々は？」

「ああ……目が覚めたら説明しようと思っていたところだった……」

「俺は純だ。元木純！よろしくな？」

「私は神藤晴香だ。その治臣の妹だ…」

「あつ…。あたしは渡辺玲依と言います。よっ…よろしく」

「へえ！玲依ちゃんか！歳いくつなん？彼氏は？」

「おい！……純！」

へらへらと笑う純。それを見ながら怒っている晴香。

そんな2人を気まずそうに見ている治臣。

玲依の頭の中ではやはり、クエスチョンが飛んでいた。

「まずは大雑把に説明しよう。俺たち…いや！日本国民全員は今、戦争中なんだ…」

「え？戦争って…」

「ん？とな！ハンターってやつから俺らは狙われてるんだ。玲依ちゃんも一度会ったんだろ？サイボーグみたいなやつ」

「うん…確かに見た。あれは人間なんかじゃなかった…」

「奴らを1人残らず殺すのが、私たちの生きる手段だ…」

「え…殺すって…あんなの逆にごつちが殺されちゃいますよ……あれ？治臣さん！ーさんは！？」

「ああ……俺が着いたときにはもう…」

「そっそっですか……」

「どうやら俺らは知らないうちにReal Gameって言つくだらんゲームに巻き込まれていたらしいんだ」

「Real Game……」

玲依は確かにその名前をどこかで聞いたことがあるとなにかを思い出していたが……

いくら考えてもどこでその名前を知ったのかは思い出せないでいた。

「どうやら俺たち……知らないうちに変な改造手術でもされたらしい。」

「……え？」

「アニメとかで見たことがあるだろう？……魔法のような事ができる様になっていた……」

「まっ魔法ですかっ？」

「見たほうが早いな…おい！晴香！」

「わかった……」

純は真後ろを向いた。それに合わせて晴香は拳銃を純の背中に向けている。

「ちよっ！ちよっとなにしてるんですか！！」

「いいから黙ってみてなって」

純の背中では確実に危険な銃口が今か今かと涎を垂らしているように、銃弾の発射を心待ちにしているようにスタンバイしている。

「……いくぞ」

「おう！」

その掛け声と同時に玲依の頭の中で、また先ほどの機械的な声が聞こえた。

プレイヤー：元木純

スキル発動

絶対回避

ガウン！

間髪いれずに晴香は引き金を引いた！

「キャッ…！」

玲依は思わず小さな悲鳴を上げて顔を覆ってしまう…

背中に発砲された。

しかも先ほどは朗らかに会話をしていた2人が目の前で…

信じられない光景だった…

しかし…

「あれ？純さん……？」

「おう！平気だよ」

「これがスキルってやつだ…」

玲依は純の背中を心配そうに見ながら

まださっきの発砲は幻覚だったのではないかと混乱し始めていた。

9月1日〜仲間〜その2〜

——わたなべ
渡辺 玲依

性別：女

年齢：23

職業：OL

身長：157センチ

体重：48キロ！（本人曰く）

力：C 頭脳：C

魅力：A 潜在能力：測定不能

ランキング：125815000中>365位>102位>85位

称号：真実を知らぬ者

戦闘値：3

スキル：開花傾向あり

———
神藤しんどう
治臣はるおみ

性別：男

年齢：27

職業：副社長

身長：177センチ

体重：68キロ

力：B
頭脳：S

魅力：A
潜在能力：C

ランキング：125815000中>298位>267位>103位

称号：2つの顔を持つ者

戦闘値：????

スキル：???
???
???
???
??

———
神藤しんどう
晴香はるか

性別：女

年齢：27

職業：警部補

身長：164センチ

体重：50キロ

力：C+ 頭脳：B

魅力：S 潜在能力：S

ランキング：1258150000中>301位>24位

称号：死を恐れぬ者

戦闘値：45

スキル：精密射撃

——
元木 もとぎ
純 じゅん

性別：男

年齢：20

職業：ヤクザ準構成員

身長：178センチ

体重：69キロ

力：A 頭脳：S＋

魅力：B＋ 潜在能力：SS

ランキング：125815000中>76位>3位>5位

称号：ハンターを倒した者

戦闘値：118

スキル：絶対回避

玲依はやっとスキルに関しては理解を始めた。まだファンタジーのような世界にきてしまった感覚に頭が追いついてないが、そこは無理やり納得しようと思いは始めている。

その後、次に晴香のスキルを見せてもらった。

晴香は銃口を乱暴に向け、外に乱雑に置いた缶のど真ん中を1発も狂うことなく、全弾同じ場所に打ち込んだ。

お見事！と思わず口にしてしまう玲依だったが、晴香は無愛想に「

……当然」と言い切り。それを純が「あ……ここちよつと場所ずれる……」と茶々を入れ、慌てた晴香はすぐに缶を確認した。

治臣はまだスキルを覚えていないようで羨ましそうに苦笑いしながらスキルを見ていた。

現在地は埼玉県。草加市。

場所は今は誰も使っていない空き家。

治臣が言うには、とりあえず玲依の応急処置だけをして埼玉に住んでいる妹……つまり晴香と合流するべく東京から出たらしい。

純はその時には既に晴香と一緒に行動していたらしく、1人のハンターを2人で倒したらしい。スキルはその時に気が付いたと言っていた。

純が言うには今後、いつハンターに襲われるかわからないため、しばらくは4人で一緒に行動するのがベスト。なおかつ、共に戦えるような強い人を探す事。それが当面の目標らしい。

玲依もハンターの強さ、外見的特徴は覚えているのでその案には激しく同意。

治臣も単独で行動するよりは安全だと解釈しているため、同じく同意。

こうして玲依、治臣、純、晴香の4人は即席の『仲間』になった…

パーティー結成。

リーダー：元木 純

メンバー：渡辺 玲依 神藤 治臣 神藤 晴香

パーティー評価：B

9月1日

玲依たちがパーティーを結成した同刻。

場所は愛知県、名古屋市。

現在、男が2名、女1名が1人のハンターと交戦している。

ハンターのタイプは近距離型。

先ほどから日本刀のような鋭利な刃物を振り回し、一見乱雑な太刀筋に見えるのだが、これが曲者。

計算づくされたような動きで、避ける男の位置を確認後、蹴りが飛んでくる。

明らかに戦闘においては完璧にプログラムされたような動きで、
3
人は悪戦苦闘している。

「マコ！ワシが正面に回るさかい！お前は後ろから援護や！」

「あいな！修！気を付けや〜」

「おっ俺はどうすれば？」

「太志は奴の後ろからさっきのスキルで切り込んでくれや！」

「よっしゃ！やったるで！」

「いくぞ！……！」

——
阿久津 修一
あくつ しゅうち

性別：男

年齢：24

職業：ホスト

身長：171センチ

体重：62キロ

力：B 頭脳：A

魅力：S 潜在能力：D

ランキング：125815000中>528位<8位

称号：地獄を見た男

戦闘値：76

スキル：開花傾向あり

———
新庄^{しんじょう} 真琴^{まこと}

性別：女

年齢：21

職業：キャバ嬢

身長：160センチ

体重：49キロ！（本人曰く）

力：C+

頭脳：B+

魅力：B

潜在能力：S

ランキング：125815000中>1029位>44位>4位

称号：死神の威光を得た者

戦闘値：127

スキル：吸収

野村 太志
のむら ふとし

性別：男

年齢：25

職業：システムエンジニア

身長：175センチ

体重：56キロ

力：C 頭脳：C

魅力：C 潜在能力：SS

ランキング：125815000中>403位>10位

称号：ハンターを倒した者

戦闘値：49

スキル：能力変化 パワーブレイク

ハンターからの日本刀による斬撃をかわすので精一杯の修一は、容赦ない蹴りでだいぶ痛手を負っている。真琴はそれに怒りを覚えながら一瞬の隙を突き、さきほど偶然発見した鉄パイプで横から殴る！

一方、太志はハンターの視界に入らないように細心の注意を払い後方に回っていた……

（一体どうなってるんや……こないな事になるなんて……）

太志はまだ、この状況を完全には受け入れておらず、スキル発動の準備をさせながら修一と真琴の様子を見守っていた……

9月1日～一択～

～野村太志～

8月26日。

太志はその日から大阪へ出張の予定でその日の前日から準備は完璧に済ませ、新たな仕事先への期待を膨らませていた。

しかし、そんな太志をあざ笑うかのように午前8時15分。全国各地の時計という時計が壊れる。

同時に全国各地で殺傷事件が相次ぎ、警視庁は国民への避難を促していた。

しかし、そんな混沌ともいえる状況でも太志は仕事に対する熱心さは失わず、予定通りに大阪へ向けて出発した。

すっかり日が高くなった頃、大阪まではまだまだの道のり、おそらくは滋賀県の入り口あたりで太志は前方からくる人影に気付いた。

慌てて車から降りた太志は改めて人影の姿を目視し、驚愕とも呼べる表情を作った。

全身血だらけ、おまけに口元からは血が滴り落ち、明らかに正常ではないと断言できる女性がゆっくりと太志の方へ近づいてきていた。

今にも襲い掛かってきそうな奇妙な笑みを浮かべた女性。

太志は真夏の暑さなど微塵も感じさせないほどに凍りつき、背筋か

らは冷や汗を流しながらその場で硬直していた。

おそらく太志の25年の中でも人生でもほんの数回しか味わった事のない恐怖に包まれているという事は、表情を見れば明らかにわかる。

「ちよっ…ちよっと待て！おっ俺は違う！違うからなっ！」

意味のわからない言い訳ののような言葉しか口から出てこない……

「おっ……落ち着け！落ち着け！！俺は君のみっ……味方やあ！！！」

手のひらを真上に上げて降参の姿勢を作る。

目の前から近づいてくる女性は、やはりへらへらと笑いながらゆつくりと……しかし、確実に太志に気付いたらしく躊躇なく足を運ん

でいる……

「ひい……もうだめや……逃げ！！！」

太志は、震える足を無理やり車へと運ばせ、なにも見なかったと自分
分に言い聞かせるように運転席のドアを開けた。

ピタっ……

太志の動きが静止する。

太志は肩に何かが触れている事に気付いた。

……手。

しかも血だらけの手。

明らかに出血しているわけではなく、手に血をぶっ掛けたような滴り方だ。

しかも、まだ新しい血である……

「おっ……終わった……」

太志はゆっくりと目を瞑り……

なにかを悟ったような顔で目元にはうつすらと涙を浮かべていた……

「……………東京へ……………行く二八この道でアッテマス……………力？」

（あん？）

太志は確かにその女性の声を聞いた。

.....

.....

.....

9月1日〜一択〜その2〜

予想外というべきか…理解に苦しむような質問をされ、太志はやつと我に帰った。

「確かにあつてゐるが…まさか徒歩でいこうとしてゐるのか？」

「はい……」

名神高速を徒歩で東京までいこうとしている女性……

太志はこのままいかせるのが無難だと思い始めるが、やはり女性の身なりの異常さ、そしてなによりも1人で歩いて向かっている理由がどうしても気になり始めていた。

「じゃア……私はコレで……」

女性はゆっくりと太志から離れ、東京に向かって歩き始める。

（このまま放っておくのがいい……危ない事に巻き込まれるのは御免だ）

太志もそのまま車に乗り込み大阪へ出発した。

ちよくちよくサービスエリアで休憩を挟みながら、ひたすらな大阪へ向かっている。

しかし、どういうわけかサービスエリアには人っ子一人おらず、なにか血生臭いような匂いが充満している。

目を凝らせば赤黒いような……なにかゼリー状に固まったなにかが落ちていているのがわかる。

先ほどの女性の身なりから……やはりこれは……

太志は夕日が沈みそうになっているのを見ながら、缶コーヒーをすすっていた。

「不思議な日だな…」

このまま誰もいないサービスエリアにいるのも気が引けるので、太志は再び大阪へ向けて出発する。

再び道路を走っていると前方にまた人影を発見する。

（おいおい……どうなっとるんや…）

次に発見できたのは若い男。しかも、必死の形相で走っているのがわかる。

やはり気になる太志は車を止めて男が近づいてくるのを待っている。

「おおおおーい！！その兄ちゃん！」

先ほどの女性とは違い、力強い言葉をぶつけてくる若い男。

（この人は大丈夫だ！）

太志はホッと一息付き、胸を撫で下ろす。

「はぁ…はぁ…ちっと、聞きたいことがあるんやけど…」

息を整えながら、若い男が話しかけてくる。

「……血だらけの女みんかったか？」

（なっ…なんだと……）

太志は先ほどの恐怖がフラッシュバックするが、なんでこんな若い男がその事を知っているのかが気になり始める。

「あゝその人ならさつき見たわゝ真っ直ぐ東京に向かって歩いて向かっていったようだけど」

「そつ……そうか…兄ちゃん！おおきにな！」

簡単なお礼を言った若い男はそのまま再び走り出した。

（若い男があの子を追ってる……）

太志はなんだかな〜と思いながら、また運転席へ乗り込み大阪へ……

1キロほど進んだ辺りで車を急停止する。

「っておい！！放っておくつてのかよ！」

太志はやはりあの2人が気になり始めた。

男はともかく女は尋常じゃない気配だった。自分にできることはな

にもないが…

知りたい気持ちが先走り、
どういわけか名古屋へと引き返し始め
た。

9月1日〜一択〜その3〜

「んで…修一は、その真琴って女の人を探してたわけやな…」

「ああ…信じられんと思うけども、ワシは嘘をいうてない」

「まっ…今日はちつとおかしい日やからな？それもありやと俺は思う」

「まじで助かる」

「気にするなや〜気楽にいこや」

太志が運転するアコー。ワゴン、色は黒。さきほどの女性を発見したあたりまでかなりの速さで進んできた。

助手席には阿久津修一と名乗る男性が乗っている。

昼間に起きた事件？事故？の説明を簡単に聞いた太志は「まさか…」
と思いながらも、強制的に納得させられるような不思議な感覚に包まれている。

外はすっかりヘッドライトを点けなければ危険という暗さまで日が落ちている。

（おかしい…徒歩ならまだこのあたりやろっが……）

太志は焦りにも似た感情を覚え始めている。納得しかけていた頭が混乱し始める。

すでに滋賀を抜け、もうすぐ名古屋へ着こうとしている。

走っても100キロという道のりは走ってもそう簡単に着く距離ではないはず……

「おかしいな……まだ見えんわ……」

「なあ！太志、ちょっと前にサービスエリアなかったか？」

「あゝあつたわ」

「そこや！……！！……！！」

2人同時に声を出し、慌てて引き返す。

街頭の辺りだけがチラホラと着き始めた。

目を凝らさなければ、サービスエリアの建物は確認できないほど日が落ちてきた。

サービスエリアのパーキングに車を止め、太志と修一は車からおりる。

「おおおおおいいいい！マコ……！！いるなら返事せえ！」

修一は叫びながらあたりを探し始める。

思ったとおり、建物の中からフラフラとした足取りで一つの人影が見えた。

（正直あんな怖い女。もう見たくないんやけどなあ……）

太志はいつでも逃げれるように車へと引き返し始めるが…

「……修？」

真琴と思われる女性はゆっくりと修一の方へ向かい始める。

（食われるんじゃないのか……おい！修一、逃げる準備をしとけ！）

太志は奥歯がガタガタとなり始めた。

「……マコ！無事やったか！」

「なんで………なんで生きてるの？」

（そっか…修一確か一度死んだいうてたしなあ………）

太志はぼろっとながら2人のやり取りを見ている。

「マコ！しつかりせえよ！そんなドロドロなってるお前なんてワシはみたくない！」

「修………ごめん………」

「どっちが助けられたのかよわからんやんか」

「せつ…せやな………修…私ちつとぶっ飛んでたわ」

「あほ！そんなんいわんでもわかるわ」

「うん………ごめん………」

「ワシ、謝られるの好かんなあ」

「うん………アホ！ドアホ！すけべ！」

真琴は涙を流しながら修一に抱きついている。

修一も拒否しているようには見え、力強く抱き締め返していた。

（あちゃあ…こんな…みてられんわ…）

太志は完璧に場違いと思い始め、若干ニヤニヤしながら車を取りにパーキングへと向かう。

ぞわっ…ぞわっ…

突如、恐怖に包まれていくような感覚が襲ってくる。

修一と真琴も同じような感覚を憶えたのか、会話が止まっている。

2人から少し離れている太志の前方から…

コッコッコッ……

と靴が鳴る音が聞こえ始めた…

9月1日〜一択〜その4〜

「阿久津修一様、新庄真琴様、野村太志様…ですね？」

突如現れたスーツ姿の男。

「なっ！なんで名前しつとるんや！」

「誰？」

「え？」

3人は想定外の訪問者の前に動揺を隠し切れない。

「申し送れました…私、こういう者です…」

3人の手元に一枚づつ名刺のようなカードが渡される。

その名刺は真つ黒で中央に赤い文字で『Real Game』と書かれてある。

「外人か？」

「オシヤレな名前やな！」

「おいおい…これは名刺なんかじゃないって…」

謎の男からは特に悪意や殺意のようなものが見られず、3人は少し安心したよな空気になっている。

「おめでとうございます！御三方は突発イベントの参加資格を得ました。」

「は？」

「んあ？」

「イベント…だと…！？」

「今からご説明致しますので……」

パッ！！

急にサービスエリア内の電気という電気が全て点いた。

パーキングのほうに3人の男性が縄に縛られ拘束されている。

「では……ご説明致します。まずはあちらにいる3人の男性をご覧下さい。」

3人はなすがままにそっちの方を振り向く。

太志は先ほどから第六感が働き凄まじく嫌な予感を感じている。

「まずはあの三名は、明日死刑になる予定の『失格者』でございますので、お気にせずにご覧下さいね？」

「ではまずは右手に2人おります。2人の距離は約5メートルでございます。」

「そして右側の男性の体内には時限爆弾が設置されております。」

「爆弾やて!？」

「うえ……」

「……」

「タイマーはあと10秒ほどです。どっぞご覧下さい。」

5

6

7

8

9

1
0

カウント開始

4

3
.....
2
.....
1
.....
0
.....
。

スキル発動。

時限式人体発破

ドッカーン!!!!!!!!!!

けたたましい爆音。

2人の男性が立っていたあたりは赤を含んだ煙が立ち込めている。

文字通り粉々…

肉片の代わりに飛び散っているのは灰と化した骨や、元肉体、臓器
……

「と……ご覧の通り、体内に仕掛けてある爆弾は周囲約5メートルを巻き込むほどの火力でございます。」

「……………」

「おえ……………」

「……………」

真琴は目の前の惨劇に耐えられず嘔吐する。それに慌てて修一が背中をさすり介抱する。

「次はもう1人の男性をご覧下さい。彼にも爆弾が仕掛けられています。」

「彼への爆弾は身体の一箇所だけを破壊する小さな爆弾でございます

す。」

「では……ご覧下さい。」

パンツ!!!!!!!!!!

軽い破裂音が響く。

男性の首から上が内側から破裂する。

目玉、血液、薄黄色の液体、脳、骨、歯……

頭から勢いよく外に飛び出した。

「ご覧のように、爆発の規模が小さいので身体は無事でございます。」

「では、爆弾の力はよく理解できたと思いますのでイベント内容の説明を致します……………」

9月1日〜一択〜その5〜

タイムリミット

残り12600秒

・

・

・

12550秒

12549秒

12548秒………

太志は車のアクセルベタ踏みし、ハンドルを強く握っている。時速は110キロ…

急いで名古屋へ向かって戻っている。

助手席には修一。後部座席には真琴が座っている。

3人の顔の表情を見れば、ただ事ではない事が起きていることはわかる。

特に太志の表情は強張り、若干怒りも混じっているような顔付きだ。

つい先ほど出くわした奇妙な男。

イベントという名目の強制参加……

イベント内容の説明を聞いた3人はすぐに行動を開始した。

時速110キロも出さなければならぬ理由はただ一つ。

爆弾が仕掛けられているのは太志の両親。

そして場所は『中村第一幼稚園』。

両親の周囲には同じように拘束された子供たちがいるらしい。

そしてそれを止める手段はただ一つ。

最後に謎の男から渡されたスイッチ。

赤いボタンにONと書いてあるシンプルなスイッチである。

これで両親の脳に設置されている爆弾を発動させなければ、時限爆弾が作動。

幼い命共々一瞬にして灰になるというイベント内容である。

当然、太志は両親を殺すなど…そんな荒んだ環境ではなく、どちらかと言えば今朝も母親に見送られ、颯爽と家を後にしたばかりなのだ。

スイッチは3人にそれぞれ渡され、3人が目標の10メートル以内に近づかなければならないという。

太志はまだそんな心の余裕はなく、とりあえず中村第一幼稚園へ車を飛ばしている。

中村第一幼稚園は名古屋市内。皮肉な事に太志の出身の幼稚園なのだ。

車内は緊張と焦り、そして不安と憎悪。

そんな感情が入り乱れ、殺伐とした雰囲気である。

「太志……気を落とすな！絶対殺さなくてもいい方法あるわ」

「そうだよ！太志くん！元気だしてこ！」

「2人ともほんまありがとう……」

修一と真琴は太志を励ますので精一杯だ。

太志の両親を殺すのは確定。しかもその役目を修一と真琴も負うハメになってしまったため、なんとも言えぬやるせない気持ちなのだ。

不思議なことに先ほどからすれ違う車もなし、前方にも後方にも車はない。

まっすぐ……ただまっすぐ一定の速度で目的地へ向かえる。

まるで仕組まれたような……そんな雰囲気を感じ出している。

残り8672秒……

スイッチには各々、カウントダウンの数字が表示されており、見れば焦りが生まれる仕様になっている。

「太志のご両親を無事助けることが出来たら……あのスーツの男ぶつ殺しにいきうや！」

「せやな！私も今それ言おうと思ってたところや！」

「ああ……あの野郎！最低な事しやがって……！」

3人の怒りの矛先はとりあえず謎の男に向けられている。

太志はやはり両親が助かる可能性はほぼ0に近いと先ほどの爆弾の力を見て確信してしまう。

（親父……母さん……）

太志の目からは涙が滲み始めている。

まるで走馬灯のように両親との思い出が脳内で再生されていく。

9月1日〜一択〜その6〜

タイムリミット

360秒……

359秒……

358秒……

……

……

……

299秒……

「太志！！早くそのボタンを押しなさい！」

「太志……母さんの言うとおりにしろ……」

現在、修一、真琴、太志とはある幼稚園にきている。

太志の目の前には、かなりきつく縛られている子供たちがざっと15人ほど、そして、その中央にはもはや解く事も不可能なほどに縛られている太志の両親がいる。

「太志……」

「太志くん……」

太志は修一と真琴に励まされながらも最後の決断をしようと心の中で葛藤している。

「太志！いい歳こいて泣き言いうな！」

「太志……母さんは父さんと一緒に死ねるなら本望よ……子供たちを巻き添えにはしたくないの……わかるわよね？」

両親の必死の説得に、太志は徐々に冷静さを取り戻し始める。

「修……真琴ちゃん……俺にスイッチを貸してくれ……」

どうせ殺さなくてはいけないのならば……せめて自分でスイッチを押したい。太志の考えはその場にいる全員に伝わっている。今の言葉ですぐに修一と真琴はそう理解した。

「それでいいんだ……太志」

「こんなに優しい子に育って……母さんはもう思い残す事はないわ」

太志は先ほどまでの落胆の表情から一変。決意を固めた表情を作り、両親に深々と頭を下げた。

「親父……母さん……ほんまに……すまん！」

他にも言いたい事は山ほどあるのだが…太志は今の言葉で精一杯だった。

スイッチに表示されているカウントは残り50秒を切っている。

太志はゆっくりと、力強く3個のスイッチを同時押した。

スキル発動

時限式人体発破

強烈な爆発音と共に……

太志の両親を中心とした爆発が……

事もあるうちに子供たちも巻き込み……

赤がまざった煙が周囲に立ち込めた。

血生臭い匂い、肉が焼ける匂い……

とても鼻を摘まなければ耐え切れないような悪臭がしている。

「おめでとつございます！」

その場に似合わぬような言葉。

一同はその言葉が聞こえたあたりを一齐に振り向いた。

「イベントクリア！おめでとつございます〜！いやはや…まさか1人で完了してしまうとは…さすがでございますなあ〜」

どうでもいいような感想を述べる先ほどの『謎の男』がいつのまにか立っていた。

「では…イベントの報酬でございますが…太志様だけが完了したという事で今回は特別賞の受賞の対象でございます〜」

「おい……」

「今回の特別賞は……おお！ラッキーでございますね！なんとスキルでございます〜！」

「おい……！」

「このスキルは派生がなんと4個！もしかはその以上伸びる可能性を秘めていますねえ！いやはや……ラッキーですね！おめでとございます〜！」

「おおおおおおおおおおいいいいいいいいいいいいいいいいい……！」

太志は怒りを露にさせて、謎の男へ殴りかかった！

「話がちげえくじゃねえかあ！！てめえ！！！！ぶっ殺してやるあ！！！！！！！！」

バキッ！！！！

太志の拳が謎の男に当たるか当たらないかという距離まで近づいた刹那。

謎の男は片手で太志を弾き飛ばした。

およそ10メートルほど吹っ飛ぶ太志。

「では……スキルはすでに受け渡し完了致しましたので私はこのへんで失礼します。次回も素敵なイベントを用意していますので……皆様！それまで死なないように頑張ってくださいませ」

余韻すら残さず、謎の男はその場から消えた。

「太志！平気か！」

「太志くん大丈夫！？」

慌てて修一と真琴が太志の方へ走る。

予想以上に強烈な衝撃だったらしく、太志は悶絶している。

「なんなんだよ……なんで……なんで……」

太志はまだうわ言のようにぶつぶつとなにかを呟いている。

「気持ちわかる！太志！あれは事故だったと思うしかねえだろ？」

修一は優しく太志を抱き上げて無理やり立たせる。

ガッシャーーン!!!!!!

また新たな音がその場に響き渡る……

「タッターミ。ーター!?!?」

素っ頓狂な声を出す真琴。

「なんやーいつ…」

「なんなんだよ……」

3人の目の前に現れたのは……

まるで映画かなにかに登場しそうな機械人形……

とても話し合いで納得してくれそうな相手ではなく、明らかに殺人を意識したような身なり。

両腕はかなり鋭そうな鋭利な刃物できており、切られれば腕や足、首などは簡単に切断されそうなほどの威圧感を醸し出している。

「ふざけやがって……!!!!!!!!!!」

太志は機械人形に向かって一直線に走り出した！

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

ターゲット確認。

A：阿久津修一
HP 58

B：新庄真琴
HP 47

C：野村太志
HP 55

攻撃パターンA
戦闘開始

ターゲットC
戦闘意志表示あり

ターゲットC
スキル発動

[illegible]

パターン変更A
↓
G

ターゲットC 第2スキル発動

スキル：パワーブレイク

パターン変更G
↓
・
・
・

[illegible]

バキッ！！！！！！！！！！

太志の拳がハンターの頭を貫いた。

9月2日～GM会議～

薄暗い部屋に15人の男女が各々の席についている。

テーブルの上にはやはり1人ずつパソコンが置かれ、話しをしたり無言で黙っていたりと様々な動きを見せている。

時計の針は22時15分をさしているが、時計がもはやなんの意味もないオブジェと化しているため、実際の時間は何時なのかはわからない。

かなり大きなモニターがあり、現在は電源は入っているものの何も映っていないため、なにを表しているのかが疑問に残る。

時計は壊れてはいるのだが、確実に秒針、分針は動いているため、その場では時間経過がわかるようになっていようだ。

ホワイトボードには9月2日。木曜定例会議と議題がかかれている。

15個の項があるため、15人それぞれの役割や活動内容などを発

表するのだろうと予想される。

時計は23時30分に変わる。

大きなモニターの画面から人影のようなものが映し出される。

「全員起立！」

15名の中の1人が力強い号令をかける。

「礼！着席。」

着席の声と共にモニターから音声が流れる。

「GM諸君。御機嫌よう。各々の活動により現在も素晴らしいRealGameが稼動している。まずはその事に感謝しよう……」

パチパチパチパチ……

まるで愛想のように鳴り響く拍手。

「では…さっそくだが、白から順番に活動報告を頼む。今日の書記は赤がしてくれ。」

「御意」

「御意」

「では報告致します。白の活動報告内容、現在スキル開花発生率は順調に展開しております。個々のスキルの差はおそらくは後1週間ほどで歴然になると予想されます。現在はイベント報酬によるスキルの個体の増加に力を入れております。以上…」

「続いて報告致します。黒の活動報告内容、現在出回っているアイテムは拳銃、ライフル、日本刀、バタフライナイフ、サブマシンガン、ショットガンの6種です。今後のスキル展開を予想するにこれからはスキルと併用して使用可能な特殊武器を実装していく予定です。以上……」

「報告致します。青の活動報告内容。順調に次回採用予定の戦闘は完成しつつあります。試験運転のためのプレイヤーの選出にも成功致しました。予選終了後、すぐに試運転できるように手筈を進めております。以上です。」

「報告致します。赤の活動報告内容。ハンターは順調に変動しております。最近是个々のスキルの向上により、数を減らしている傾向にあります。予選は早ければ来週中には完了できそうです。えー、プレイヤーベースのハンターの機能が、やはりまだ不安定な状態が続いております、そこは早急に対処して改善に努めたいと活動を継続しております。以上です。」

「報告致します。無色の活動報告内容。突発イベント、強制イベント、裏イベント、スタートイベント…以上4つはスムーズに稼動しております。前回の会議により採用したスキル報酬も受け渡しが確認できております。現在は予選後のクエストの再調整をしております。以上でございます。」

「続いて報告します。灰色の活動報告内容。現在、予選終了後、配布予定のアイテム『Analysis Persons』通称：APの機能を検討中でございます。現在までに確定されているのは、イベント及びクエストの通知、プレイヤーのデータ解析、GPS、電話、メール、バグにより破壊された時間からの誤差3分弱ほどの時計、遠隔操作型爆弾の7種です。まだまだ新機能を付加していく予定でございます。以上！」

「続いて……………」

「続いて……………」

.....

.....

.....

.....

15人の人物が各々の活動内容を報告した。

「素晴らしい！これからもより良いRealGameの構築をよろしく頼む。」

「御意！」

モニターからの声はそれぞれの報告に満足したらしい音声を出している。

「しかし……一つ忘れないで居て欲しい。君たちGMもプレイヤーの一部だという事だ……」

一瞬にして場は沈黙。

驚きを隠せない表情で15人は硬直している……

9月2日〱疑惑〱

俺に『Analysis Persons』の試作品が渡された。

一応俺もRealGame開発の関係者だからだ。

GMとは違い、俺はプレイヤーとしてゲームでのバグや新たな仕様変更の確認、たまにGMの補佐といった雑用のような存在。

俺の上司は当然GMで、通称『赤い男』と登録されている。

今回は、プレイヤーベースのハンターのスキル実験を実地するらしい。

それに俺も立ち会う事になった。

『Analysis Persons』の付け心地は、まるで携帯電話を腕にはめているような感覚。

無理やり外せば内臓されている爆弾が作動する仕様。

もしもつけるのを拒めばそれでも確実に殺されるという凶悪なアイテムなのだ。

郵送（郵送機関も混乱により活動停止しているため、RealGame独自の運送部門から）によりついさっき受け取ったばかりで簡単な説明を受け、今こうして着用している。

受け取って5分もしないうちに上司から連絡がきた。

- - - - -

メール内容

件名：お疲れ様

本文：ハンターのデータ収集の為、適当な素材を持参し、本社まで帰還せよ。

- - - - -

いつもと違うのは今回はわざわざ俺自身が『素材』を持参して動くことだ。

いつもならば上司は俺のいる場所へすぐにスキルを使ってくるはずなのだが、どうやら今回は別な事情があるらしい。

正直かなり面倒だ。

本社は東京。俺が活動している場所は東北、宮城県仙台市だ。

車を使っても早くて3時間。かなりの移動時間であることには間違いない。

それに素材持参ときたもんだ。

現地調査をすればすぐにバレてしまうので、やむを得ず仙台市内で素材を調達しようと行動を開始した。

須東 恵一すとう けいいち

男

年齢：33

職業：ゲームマスター補佐

身長：166

体重：55

力：C 頭脳：B

魅力：A 潜在能力：A

ランキング：125815000中>302786位>38位>6位

称号：明日を伝える者

戦闘値 : 301

スキル：発信
精神破壊
洗脳[illegible]

まるでそこらにいるようなサラリーマン風の外見。少し小柄でとも30代には見えないような若幼稚顔立ち。しかし、声は歳相応で一度でも話せば30代らしいと判断できてしまうだろう。

彼（須東 恵一、以後、恵一）は地元仙台で素材を探しながらブラブラと行動している。

恵一が言う素材とは単純に言えば人間そのもので、死んでいない人間の事である。

Real Gameの運営のために出てきたようなスキルが特徴である。

彼も元々はGM志願で入社したのだが、双子の弟が先に採用が決まり、総合評価で落選。GMの補佐として入社が決まったのだ。

恵一のスキル説明 - - - - -
- - - - -

スキル名：発信

不特定多数の相手に自分の意志を伝える事ができる。発信の発動条件は対象の魅力がS以下である事。

スキル名：精神破壊

文字通り、人の人格を破壊し、植物人間の状態にする。精神破壊の発動条件は対象の魅力がS未満である事、発信を一度でもした相手のみに適応される。ターゲットは1人のみ。持続時間は永久。須東恵一が死亡するまで継続する。

スキル名：洗脳

精神破壊により人格が破壊された者のみに適応。元から壊れているものは該当しない。ターゲットは精神破壊を受けたすべての者に適応。持続時間は永久。須東恵一が死亡するまで継続する。

補足：対象の魅力がSである場合、強制的に頭脳戦に突入する。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	52
--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

「面倒だが……仕事は仕事だしな……」

惠一はとりあえず仙台を離れ、気仙沼方面へ車を走らせた。

9月2日〱疑惑〱その2

APの情報通り、恵一は真つ直ぐに気仙沼へ到着した。

彼のAPでのデータ解析により、宮城県内で一番の強さを持つプレイヤーは気仙沼にいと解析できたからだ。

「黒沢……瑞貴……か……」

ふと、そのデータを元に出てきた名前はどこかで聞き覚えがあると恵一は悟る。

「確か……ランキングトップ5に入ってたような……」

瞬時に脳内で先週のデータの一覧を思い返す……

「3位じゃねえか！クソツ！相手が悪いかもしれないな……」

恵一はイライラとしながらも、どこか余裕を持って辺りを散策している。

恵一はどんな強い相手でも絶対とも呼べるほどに強力なスキルを持っているため、強い相手には恐怖を感じる事がないのだ。

これは職業病とも呼べるのだが、決して迂闊や油断などの低俗な考えではないと言い切れるのは、やはり彼のスキルは強力であるとGMからも高く評価を受けているからなのだ。

「少し……卑怯な手を使うか……」

恵一は自分のスキルの1つである『発信』の発動を試みる。

発信は相手がいる場所などわからなくとも、本人にしっかりと考えを伝える事ができる遠隔操作タイプのスキルだ。

恵一は発信を発動させた。

（黒沢さんですよ？私は先日同じようにこうして話かけた者です。同じ宮城県内にいるとお聞きしましたのでこうして会いにきました。場所は気仙沼市内のリアスシャークミュージアムです。よければ今からきてください。）

「さて…これで準備は完了だ…来い。」

恵一はリアスシャークミュージアムの駐車場で黒沢瑞貴がくるのひたすら待つことにした。

—— 黒沢 くろさわ 瑞貴 みずき

性別：女

年齢：18

職業：高校3年生

身長：152センチ

体重：45キロ

力：B 頭脳：D

魅力：A 潜在力：測定不能

ランキング：125815000中>3位

称号：ハンターを翻弄する者

戦闘値：1850

スキル：究極開花傾向あり

装備：黒刃

黒沢瑞貴オリジナル武器

（黒沢さんですよ？私は先日同じようにこうして話かけた者です。同じ宮城県内にいるとお聞きしましたのでこうして会いにきました。場所は気仙沼市内のリアスシャー 커뮤니티ジムです。よければ今からきてください。）

先日もズカズカと人の頭の中に話しかけてきた男が今日もアタシに話しかけてきた。

まじでうざい……

邪魔……

どうせアンタ…なんか悪巧みでも考えてるんだろ？

別に暇だしいいんだけど…

アタシあんまり人殺しって好きじゃないんだよね…

気に食わない事いわないでね……

リアスシャークミュージアムとかさ！デートじゃないんだからっ！

てかこんなときにデートもなにもないでしょ！

めんどくさいなあ……

外見はそのまま女子高生。髪の色は漆黒。目の色も漆黒。制服も黒をベースにしているセーラーでワイシャツだけが白だ。ごく一般の女子高生に見える外見だが、背中にはそれに似合わない漆黒の刀を背負っているのが特徴的だ。

顔はやはり１８歳らしく幼さが残っているがどこか大人らしく別に睨んでいるつもりはないのだが、常に目が釣りあがっていて怒っているような顔立ちだ。

しかし、どちらかといえば普通に高校ではモテているだろうと予想

されるスッキリとした目鼻立ちである。

性格だけが少し変わっている点を除けばやはり、女子高生の代表とも呼べそうな身なりである。

彼女（黒沢 瑞貴、以後、瑞貴）は8月26日からの異変にはすぐ気が付き、警視總監の中継のニュースも見ていたため当日は大人しく家で身の安全を維持していた。

しかし、27日に彼女宅へ謎の男が現れてからは彼女の人生にも関わるような生活へと一変したのだった。

イベントと銘打った謎の儀式。彼女は単なる健康診断かと思いきや、謎の男の言うままにとある施設へ赴き、なんだかよくわからないような検査を受けた。

その報酬としてこれまたよくわからない謎の黒い棒を受け取ったのであった。

『黒刃』^{ニハ}というらしい武器で、瑞貴も当初は使い方すら知らなかった武器なのだが、数体のハンターによる連日の襲撃でなんとなく使い方は把握できているらしい。

使い方は目標に向かつてただその場所で振るだけ。

すると、目標は近くで刃物で切られたかのように腕が落ちたり足が欠如したり、首から上が外れたり…と不思議な攻撃が可能。しかも、そのターゲットとなる相手は日に日に増えていき、今では視界に入った全てのハンターを含め、生き物や人間、果ては電柱や建物までも斬り付けられるようになった。

よくわからない事で大量殺人のレッテルを貼られたような罪悪感を覚えてしまった瑞貴はなるべく人がこない場所へと自然に足を運ぶようになってしまったのだった。

9月2日。日も高く今日も1人でフラフラと街を歩きながらほどよい孤独感に満足している瑞貴であったが、頭の中に28日にも同じように話しかけてきた声が響いたのだ。

興味本位で瑞貴はその声の言うがままにリアスシャークミュージアムへ到着した。

（着て頂けましたか……ありがとうございます。）

また！アタシの頭の中で声がする！

でも、そいつはどこにいるのかわからない。

（さっそくですが……すみません……さようなら）

スキル
発動

精神破壞

「さてと……次はツバサ商事本社か……移動だるいな……ま、いくつか？瑞貴さん？」

「……………ハ……………イ……………」

恵一は瑞貴を連れて東京へと向かい始めた。

9月2日　合流

「なあ？…純」

「ん？どした晴香？」

「お前は玲依みたいな女性が好みなのか？」

「んっ…玲依ちゃんもありっちゃありだな」

「そうか……」

玲依、晴香、純は東京へ単身で用事があると言って向かっていった。治臣と合流するべく草加から東京へ向かっていた。

車での移動の方が早いのだが、ハンターに襲われる可能性も考えると全方向を見渡せる徒歩で移動するのがベストだと純が提案したのだ。

玲依は前日に晴香から拳銃の扱い方を教えてもらい、なんとか標的に当てる事だけは可能になっている。

しかし、まだまだ射撃の腕は未熟すぎるため晴香と純の援護に回っている。

2日の朝方ごろから移動を開始していて、今は日が高くおそらくは12時過ぎだと思われる。

先頭には純、その次に晴香、後方に玲依の順番で縦に並んでひたすら前進していた。

今日はまだハンターの襲撃はないのだが、いつ襲われてもおかしくないのは言うまでもない。

前日は同時に2体のハンターに襲われ、悪戦苦闘したように思われるが、既に純と晴香はハンターの弱点を見出せているらしく、2、3発ほどの銃撃で完全に動きを止める事も可能になっている。

玲依はハンターの怖さは身を持って体験しているが、晴香と純がいれば安全だと思い始めているのだが、どうも先ほどから肝心な事を見落としているような……そんな些細な違和感を感じ始めていた。

「玲依ちゃんさっきから黙り込んでどうした？」

「疲れたのか？」

「あ……ううん……大丈夫だよ？」

2人に余計な心配をかけないように玲依は、とりあえず今はハンターからの襲撃に備える事に集中することにした。

「今のところ近くに敵はいないみたいだよ…」

「そうか…でも油断大敵ってな？そのままスキル維持よろしくな？玲依ちゃん」

「ほんと…玲依のスキルは便利だな」

前日にハンターから襲われたときに玲依のスキルは完全に開花し、今では30分ほど継続して発動を維持できるようになった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

渡辺玲依のスキル説明

スキル名：リーダー

自分中心の半球にいる全ての物体の位置を知ることができる。持続時間と範囲はスキル熟練度に依存する。（現在の玲依は半径20メートル、持続時間は30分ほど）

- - - - -
- - - - -
- - - - -

純と晴香も次のスキルの開花傾向にあり、徐々にその頭角を見せ始めている。

しかし、2人はまだそのことに気付いていないらしく、気のせい程度に解釈している。

合流予定の場所は東京、上野。まだまだ距離があり、休憩を挟みながら3人は行動している。

「そういえば……なんで純くと晴香さんはハンターとかスキルとか……そういうの知ってるのかな？」

「え……ってなんでだっけな……？」

「玲依が寝てる間だと思うが……私たちは妙な声を聞いた。」

「あ！それだそれ！……なんか変な男っぽい声が頭の中に響いてきた

んだ。それでこの日本で起きていることやハンターとかスキルとか、
そういう説明を聞いたんだ」

「それいつの事が覚えてる??」

「結構前だよな……」

「ああ…今は何月何日なのかもわからない…」

「そっか……TVって映るかな……」

「ワンセグでもなにもやってないよ」

「ああ……映るのは砂嵐だけだぞ」

「そっかぁ……」

（ん？）

玲依はふと…なにかを思い出した。確かに玲依はTVでなにかを見た。
見たこともない数字の変動や参加者やハンターといった言葉。

そして、日本で起きている事を一度説明されたような……

しかし、やはりその部分の記憶は欠如しておりどこで見たのか…そして誰から聞いたのかは覚えていない。

気のせいなのだろうか……しかし、若干脳内でその光景が映像化できると鮮明に映る。

外は暗く、マンションの一室だったのは覚えている。

（どこだったっかなあれは……）

玲依は眉間にしわを寄せながら必死に思い出そうとしているが……やはり、思い出せないでいた。

9月2日〱合流〱その2〱

「結構歩いたね」

「ああ…でも上野はまだまだ先だ」

「玲依ちゃん疲れたのかな？」

「疲れたというかちょっとシャワー浴びたいなあ」と…」

「私も汗を流したいと思っていたところだ」

「おうおう！じゃあ俺も一緒に入ろうかな？」

「おい！純！」

「はははは…じょつ冗談だぜ…拳銃の先こっち向けるなよ晴香」

他愛のない会話をしながら、一先ず休憩という事で温泉を探している3人。

変えの服や下着などはその都度、デパートやファッションセンターあたりで調達しているので不自由はしていないようだ。

同じく食料もコンビニなどからすぐに調達できるので不自由はない。

「その辺の民家でお風呂とか借りた方が早くない？」

「玲依ちゃん…」冗談きついなあ。26日からおそらく全国的に電気ガス水道は止まってるぞ？」

「え？そうなの？？」

「ああ…間違いない。26日の昼あたりから完全にライフラインはストップしている」

「それは…不便だね…」

（ん？26日？）

玲依はやはり先ほどからなにか違和感のようなものを感じ始めていた。

（26日…確か佐藤君と一緒に出勤して…）

(……ない！その先からなにも覚えてない！)

(会社でなにがあつたの？佐藤くんはどこいったの？)

(そうだよ……なんであたしは副社長と一緒に行動しているんだろ
う……)

「う……頭がいたい……」

玲依は突然頭を抱えて座り込んでしまった。

「おい！玲依ちゃんしっかりしろ！」

「大丈夫か？」

2人は心配そうに玲依を介抱しようと試みるが…

玲依の苦痛に満ちた表情から察するに尋常ではないほどの激痛と戦っている。と悟る。

「晴香！玲依ちゃんを頼む！俺は周囲の警戒をする」

「了解。純……油断はするなよ？」

「おう！」

瞬時に純と晴香は状況を把握し、お互いに行動に移す。

こんなときに狙撃型のハンターに狙われればおそらく玲依は助から

ない。

既に何体かのハンターと戦闘を経験している純と晴香だからこそ、この状況は非常に危険であると判断できるのだ。

全身の神経を集中させて純はあたりを警戒する。殺意を持った人間ならばその気配でいることはすぐに察することができるのだが…

まるで感情がないような機械仕掛けのハンターはそんな感情という気配がまったくないため、戦闘慣れした純であってもハンターの潜伏を見つけるのは困難である。

（くう）…玲依ちゃんのスキルの偉大さがよくわかるぜ…）

純は額から汗を流しながら警戒を続ける……

「玲依！しっかりしろ！」

晴香は玲依の背中を摩ったり励ましの声をかけながら、一応周囲の警戒をしている。

純までの距離は目測でおよそ50メートルほど。

若干距離があるため、射程が短い拳銃ではもしも純が襲われた場合、援護はできない。

晴香もやや緊張しながら、あたりを見渡している。

（玲依のスキルに頼りすぎたな…自業自得だ。）

玲依の心配をしながら迎撃に備える晴香。

一瞬！

晴香と純の視界の端になにかが動くのを捕らえた。

2人は同時になにかが動いた場所を見る！

「なっ！……」

「嘘だろ……」

絶望にも似た2人の声が同時に発せられる。

「晴香！！！！玲依を連れてできるだけ距離を置け！」

「了解！純なるべく陽動してくれ！無理はするな！！！」

一瞬にして場は緊迫した空気に包まれる。

2人が視界に捕らえたもの…

それはやはりハンターであった。

何度も戦闘をしてハンターの外見は見ればすぐにわかる2人。

しかし今回現れたこのハンターは…

明らかに中距離型の厄介なやつであるとわかる。

2人が対峙してきたハンターは外見は遠めで見れば人間とそう変わらない身なりなのだが、やはり目が赤く点灯している事、そして動くたびになる機械音。何らかの武器を持ち、容赦なく襲い掛かってくる…そんなものだが……

視界に捕らえたのはまずハンターの外見。

腕という概念がないのだろうか…

肩から伸びているのは腕などという生易しいものではなく明らかに銃口。

しかも形から察するに機関銃のようなイメージを彷彿させる。

ターゲットはおそらく無差別。

なんらかの範囲型スキルを使ってくる相手だと一瞬で純と晴香は判断したのだ。

玲依を抱えて走る晴香。

ハンターと1：1の状況を作り出す純。

これで純と晴香は通算11人目のハンターとの戦闘が始まった。

9月2日　合流　その3

一定の速度で無差別に銃弾を撒き散らすように腕の代わりに生えている銃口から弾幕が発射されている。

純は既にスキル『絶対回避』を発動させているため、一発も掠る事なく避けている。

避けながら純は敵のウィークポイントを探し、尚且つ晴香と玲依が距離を置くのを確認している。

（まずこの銃撃が邪魔だな…）

厄介なのは敵の精密な射撃ではなく、まるで雨のように襲い掛かる銃撃の嵐。

まずはそこをなんとかしようと純は瞬時にある作戦を思いついていた。

およそ晴香たちとの距離は目測で100メートルほどまで距離が空いたのを確認。

（これで流れ弾の心配はなしか…）

まずは相手の『目』を潰す！

赤く点灯しているハンターの顔についでる光に向かって、純は拳銃により銃撃を開始する。

ガウンガウンっ！

パリンッ！

まるでガラスが割れるような音が響く。

なんとか目に当たる部分の片方を破壊することに成功した。

（これでちっとはマシに…）

それでもやはり嵐のような弾幕は止まない。

「ちっ！！」

人を殺せるような舌打ちをしながら純はもう片方の『目』を潰そうとひたすら隙を伺っている。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

純との距離、およそ100メートル。

晴香は玲依の心配をしながら、純の戦闘の様子を伺っている。

純らしくもなく、少し苦戦しているように見える。

連続して聞こえる銃声がそれを物語る。

「晴香さん……」

「玲依心配するな……純なら平気だ。」

「違う……私の右手……約20メートル先に……なんかいる……」

「なっ……!!」

玲依から発せられる新情報……

ますます、やばい展開になろうとしている悪魔のような情報。

激痛と戦いながら玲依はスキルを発動させていると晴香は判断した。

「玲依……無理はするな！具合が悪い時にスキルなんて使っな！」

「ごめんなさい……でも……」

「全く……」

晴香は口では玲依を諫めるが、こんな状況でも周りの状況を確認しようとしている玲依に賞賛する。

優しく玲依の頭を撫でながら

「今から私も戦闘に入る。玲依は巻き添えを食らわないように……ゆっくりでいい、安全なところへ避難しろ。」

「うん…晴香さんも気をつけて……」

晴香は自分の拳銃の弾薬を装鎮する。

スキル発動

精密射撃

晴香は玲依が言ったあたりの警戒を最大限にする。

「くるならこい…」

晴香も完全に戦闘モードに移行した。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

ピピピッ
……

ターゲット：元木 純

ランキング照合……

現在5位

戦闘値：127

スキル：絶対回避

元木 純 スキル発動中

ビ。ビ。ビ。ビ。.....

左アイカメラ破損。

視界状態60%

戦闘問題ナシ

戦闘を継続。

パターンA↓現状維持

第2ターゲット：神藤晴香

ランキング照合

現在21位

戦闘値：63

スキル：精密射撃

目標まで距離。

102'334メートル。

GMへ増援要請

送信。

.....

G Mから受信。

「増援許可。……近距離攻撃型初期モデル2体」

受信完了。

本機、引き続き

ターゲット：元木純

「抹殺開始」

9月2日、合流、その4、

「抹殺開始」

（俺を殺そうというのか…ふん…あんまりなめてんじゃねえぞコラア！）

純は今の一言にブチ切れる。

更に動きが早くなる純。その動きにハンターの銃撃はまったく追いつかず、残像を追う事に精一杯のように見える。

「その弾薬ちつとは残しておけよ？後で俺らがもらうからな！」

ガウンっ！！！！！！

純は残りの赤い点灯している『目』の部分に銃弾をぶち込んだ。

突如、ハンターの動きが止まる。やはりあの赤い点灯している部分は『目』であつたらしく、視界が0になったと純は確信する。

「さあて……次はどこ壊そうかな？」

まるで楽しむように純はうつすらを笑みを浮かべながら、ゆっくりと拳銃に弾薬を込めていく……

「うあああああああああああああ！ たっ助けてくれえ！！
！！！」

純の耳にこれまた予想外の声が響いた。

——
茶谷^{ちやたに}
悠^{ゆう}

性別：男

年齢：20

職業：シンガーソングライター

身長：170センチ

体重：61キロ！

力：B 頭脳：D

魅力：D 潜在能力：B

ランキング：125815000中>125814109位>125810005位

称号：臆病者

戦闘値：3

スキル：なし

- - - - -

ハンターの動きが止まっている事を確認した純はその声の方に視線だけ移す。

見れば若い男が別のハンターに追われていて、今にも純の方に向かってきそうな勢いである。

「おいおい……これ以上ハンター増やすなよ……」

純はため息を吐きながら煙草に火をつける。

案外余裕なのだろうか…

先ほどまでの緊迫した空気が一瞬にして和んだように見える。

「おおおおおい！その人！！たっ たっ たすけてくれえ
！……！」

「うるせえ！！こっちくんない！！」

ガウンっ！！！！

純は怒りを露にさせて男の方へ一発、牽制するように弾丸をぶつ放つ。

「ひえええ〜！！！！！！やめてくれえ〜！！！！！！」

その男は今の銃声を聞いたらしく…

事もあるつに晴香と玲依がいるあたりへ進路を変えていく。

「おっ！！！！！！お前！！！！！！！！！！」

純は慌ててその男の方へ走り出そうとするが……

動かなくなったハンターの気配がまた少し変わったと雰囲気を感じ、その場から動きようにも動けなくなる。

「晴香！！！！！！！！！！そつちにハンターいったぞおおおおおお！！！！！！！！！！」

純は大声で晴香に向かって叫ぶ。

「……………ハンター……………ぞおおおおお!!」

純の方からなにか声が聞こえたような気がする。

まだ玲依が言った位置からの襲撃はないので晴香は仕方なく純の方を振り向く。

「はあ？」

見れば若い男が走ってくる。その後ろに何度も倒したような近距離型のハンターが1体。

「玲依…ちょっとまずい事になった。」

「……何か……あつたの？」

相変わらず玲依は頭痛がひどらしく、頭を抱えて目を瞑っている。

「挟み撃ちになるかもしれない……」

晴香らしくもない弱気な声に玲依は驚きを隠せない。

「そのひとおおおおお……!! 助けてえええええ!!」

走ってくる若い男は晴香に向かって叫ぶ。

「……邪魔」

ガウンっ！！！！！

晴香も純と同じように男に向かって一発。

「ひええええええええええ！！！！！！！！」

若い男は再び進路を変えて別方向へ走っていく…

……が、その後ろにいるハンターはその男を追わず、晴香との距離、約30メートル付近で動きを止めた。

「チッ！面倒ね……」

晴香は拳銃の射程圏内まで一気にハンターとの距離を詰める！

9月2日、合流、その5

ハンターまでの距離およそ15メートル。

本来ならば20〜30メートルほどの距離であれば拳銃でも十分な射程距離なのだが、それはやはりあくまで人間を想定した殺傷力での計算である。

相手がハンターならば話は別。

人間と同じように銃を放つてもその銃弾を簡単によけてしまつ、もしくは当たってもさほど効いていないように平然と動く。

純と晴香はハンターとの戦闘で大体の有効距離を弾き出し、身体でそれを覚えたのだつた。

拳銃の名はニューナンプM60、38口径官用回転式拳銃である。

一般的に警官が所持しているニューナンプM60は77mm銃身型であるが、警部以上では51mm銃身型を採用する例もある。

晴香は警部捕だが、越谷警察署では特別に51mm銃身型を許可されていたのだ。

純がもっているのは77mm銃身型。晴香が持つ拳銃よりも一回り

以上大きい。

性能の差はそれほどないのだが、強いて言えば重さ。それだけの違いである。

ハンターを相手に、ニューナンプM60で有効にダメージを与えられる距離。

それは……

およそ、30センチ。

ほぼ至近距離での発砲である。

ハンターの強靱とも頑丈とも言える鉄で出来た身体でも唯一その距離からの発砲ならば穴を開けることは可能。

銃としての利点。

射程距離という武器を殺されたような使い方になるのだが、今のところその使い方でも何体もハンターを破壊できている事実。

晴香の精密射撃というスキルもそれであり意味を成さないようになってしまっただが、晴香の目にはやはりまた別なものが見えているのだ。

精密射撃によりハンターの身体のところどころにウィークポイントが映っているように晴香の目からは見えている。

あの箇所を打てばなんらかの効果を得られると思われる場所である。

身体能力は純には劣るが、晴香の戦闘の腕は純にとっても賞賛に値する。『相棒』と胸を張って言えるパートナーであると純本人なら言うであろう。

ハンターの武器を確認する晴香。

腕が刃になっているタイプではなく、腕、手が付いてあり、その手に鋭利な刃物を持っているタイプ。

身体が頑丈なのを除けばほとんど人間と同じような攻撃パターンである。

華奢に見えるハンターの外見だが、やはり機械である部分が多いため、予想以上に重量がある。

投げ技や肉弾戦などを挑むのは無謀。それは晴香本人も痛いほど理

解している。

唯一、体術で効果があるのは柔術のみだ。

「無手或は短き武器をもって、無手或は武器を持って居る敵を攻撃し、または防御するの術」

という言葉の通り、拳銃との相性は抜群。

ちなみに晴香の使う柔術の流派は本體楊心流である。

既に純が交戦を始めてから晴香も戦闘モードに完全に移行しているため、身体の反射、動きの読みなどの基本動作のギアはトップに入っている。

晴香の戦闘の特徴は、相手の動きを読み隙を突く点である。

故に、ほとんど自分から特攻をかける純とはやはり、正反対な戦闘

なのだ。

思ったとおり、ハンターは武器（日本刀に似ている刃）を構え、すぐにでも襲ってくる体勢でいる。

晴香は距離およそ8メートルまで詰め、そこで動きを止める。

まるでお見合いのようにハンターと晴香は沈黙を始める……………

9月2日〜覚醒〜

（向こう側には中距離範囲型が1体、こっち側に近距離初期が1体、少し離れてもう1体……か……）

（予選ももうすぐ終わりか……）

（え？）

（直ぐにあのプレイヤー2人が勝利する……あたしは傍観でいい……）

（え？）

玲依の頭痛は徐々に治まり始める。

意味がわからない事を瞬時に考える玲依の脳内。

まるで自分が2人いて、頭の中で会話しているような感覚に包まれている。

「……………あたしも戦わなきゃ……………」

玲依はおぼつかない動きでゆっくりと立ち上がる。

すぐ近くでは、晴香が刃物を振り回すハンター相手に交戦中。

状況は玲依の頭ではよくわからないが、ハンターの得物をことごとく避ける晴香、その隙を突いて至近距離からのあの銃撃。

徐々にハンターの身体に穴が空いていつているのがわかる。

ちよつと先のあたりでは純がまだ交戦中。

ハンターの乱雑な銃撃ラッシュをまるで打つ場所がもうわかってるような動きで避けまくる純。

純も晴香と同じようにハンターとの距離がほぼ0に近いところで戦っている。

そして、建物の影にまだ現れてないハンターが1体。

「あたしだって……戦えるんだ……」

玲依はゆっくりと拳銃に弾薬が入っているのを確認。

すぐに視線を建物の方へ向ける。

すぐにもう一度スキルを発動させる。

レーダーの範囲内にはやはりハンターがもう1体確認できているが

……

建物の方からはそれが感じられない。

「……………！！！！！！」

もう1体のハンターは晴香の真後ろに感じる。

むしろいつのまにそこに移動したのかわからないほどに一瞬で動いたように感じられる。

「晴香さん！！！！後ろ！！！！！！」

玲依の声に反応した晴香は後ろからのハンターの斬撃を避ける……！

しかし……

晴香が交戦中であるハンターがその隙を突いて晴香に斬り込む！

玲依の目の前で信じられない光景が映し出される……！

まだ出会ってまもなく、会話もそこそこであるが仲間と呼ぶには充分な時間を過ごした『仲間』。

その仲間の左腕……

肘から先が宙を舞っている……

まるでゆっくりと時間が流れているように宙を舞っている左腕はクルクルと回転しながらゆっくりと地面に落ちる……

晴香はたまらず左腕の先端を押さえ、その場で蹲る。

おぞましい量の血が晴香の左腕から噴水のように湧き出す。

本来あるべき場所が欠如した左腕は狂ったように先端から血の涙を噴出している。

勝機！とばかりにハンターが2体、ゆつくりとした動きで晴香に止めを刺そうと日本刀のような刃物を振りかざしている……

玲依にとってはやはりその動きもゆつくり……

まるでスローモーションのように見えている。

「晴香さん危ない！……！！！」

玲依はたまらず走り出す……

予想外の玲依の声に純も遠くでそれを聞き、交戦中のハンターを無視して晴香の元へ走ってくる…

しかし、玲依の目でそれも確認できるがゆっくりと歩いているように近づいてきているのがわかる。

玲依だけは普段どおりの動きですぐに晴香の元へ辿りつき、ハンターへ銃口を向ける！

「大体…そうだなあ…」

「1メートル以内だな。30センチ以内ならば多少の誤差があつてもハンターにダメージを与えることができるはずだ。」

昨日聞いたばかりの純と晴香の会話をすぐに思い出す玲依は……

迷うことなく引き金を引いた……

9月2日〜合流〜その6〜

身体が……思うように動かない……。

出血の量が多すぎる……。

まずい……。

目が霞む……。

既に両膝をつき、左腕の先端からあふれ出す血を止めることで精一杯な晴香は…

徐々に意識が朦朧とし始める。

「てめえを殺すのは俺だ……だから……」

……ふっ。

こんな時になにを馬鹿な事……。。

「俺がてめえを殺すまで……誰にも殺されるな……一緒に来い！」

余計なお世話だ……クソガキ……。

（純……。）

晴香はとうとう意識が分断され、崩れるような体勢で血の海の上へ
うつ伏せに倒れる……

視界のちよつと先で明らかに晴香が倒れているのがわかる。

しかもかなりの血の量。すぐ傍にはなんか棒のようなもんまで落ちてやがる……

ありや
⋮

腕じゃねえかよ!!!

[illegible]

くそ！身体が重い……

どうなっ
てんだよこれ……

足が……

足が思うようにうごかねえよ！！！！！

晴香てめえ！！！！

勝手に死んでみる……………

てめえ！！！！

地獄から引きずり出してもつかい殺してやるからな！……！！

くそっ……

晴香……

「ピピピピ……ターゲット逃亡傾向あり。」

うるせえ！……！！

純はすぐに視線をハンターに戻し、すでに割れている『目』の部分

の中へ全弾打つ込もうとする……

が

うそだろ……腕もあがらねえ……いや！

あがつてはいるが……

なんなんだこの遅さ！

馬鹿野郎！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

ガウンっ！……！……ガウンっ！……！……ガウンっ！……！……！

晴香の倒れているあたりで音が聞こえる……

あ？

誰がいるのか……？

「へ？玲依ちゃん！？」

9月2日　合流　その7

俺の目の前で玲依ちゃんがいつも通りの動きでハンターを行動停止にしている……

俺の身体はさっきから重く、なにかに押し掛かれてるかのように動かない……

少しは動くのだが、握り拳を作る動作でさえ軽く3分ほど時間がかかるだろうと思われる。

（これは……玲依ちゃんのスキルなのか？ いや……そう思うしかない……玲依ちゃんはいつも通り動いている）

晴香側にいた2体のハンターがあっけなく玲依ちゃんに心臓（ハンターの動力炉も人間と同じ場所、つまり心臓と同じ場所）を打ち抜く。

ハンターでさえ動きが遅くなっていたのだが、行動停止確定になった瞬間いつも通りの勢いで地面に倒れる……

（死ねば元に戻るってことなのか……？）

俺は目の前のハンターと対峙しながら目線の端で玲依ちゃんの動きを観察している。

それしかしようがないしな……

（つてことは……晴香も死んだのか？）

一瞬で最悪のケースを予想してしまった……

あの野郎……勝手に死にやがって……

俺の中でなんとも言えない感情が激しく高揚している……

俺が手榴弾で隆たちを吹っ飛ばした時でさえこんな感情は沸かなかつた……

（これが仲間ってやつなのか……）

俺は生まれて始めて他人のために涙を流した……

（ばか……玲依ちゃんこつちくるなよ……涙なんて見せれないって
！）

（おいおいおい…涙拭こうにも手がつかねえんだよ！）

（くそ……）

玲依ちゃんはすぐに俺の目の前にいるハンターの心臓に銃弾をぶち込む。

たったその一発で先ほどまでは苦戦……いや、単純に俺がちょっと遊んでいただけが……

両腕がマシンガンになっているハンターも行動停止。すぐにボロ人形のように崩れ落ちる。

「……玲依ちゃん？」

「……」

見れば玲依ちゃんも少し泣いているように見える。

「とりあえず……スキルを解除してくれないか？」

「……………うん」

その返事と同時に俺はいきなりいつも通りの動きで動くことができるようになった。

たまらず、体勢を崩して壮大にコケてしまった。

「晴香は？晴香は死んだのか？」

「……………わからない」

その返事を聞く前に俺は自然と晴香が倒れている辺りまでMAXのスピードで走り出していた……

「おい！おい！晴香！生きてるか？死んでるのか？」

自分でも意味不明だと解りきった言葉をうつ伏せに倒れている晴香を揺すりながら浴びせてみる。

（返事はない……）

徐々に晴香の体温が低下してきているのがわかる……

傷口から出てる血ももはや外へ放出できるほど残量がないらしく、まるで蛇口の閉め忘れのように一滴一滴と流れ落ちている……

強引に抱き寄せ、仰向けの状態に身体を動かし……

なにを思ったのか俺は……

自分の膝の上に晴香の頭を乗せてみた。

晴香の今の顔を見るのが怖い……

なかなか俺は目線を晴香の顔へ向けることができない……

（すごい顔して死んでるんじゃないだろうな……）

（俺らしくもない……）

弱気な考えだ……

（くそ……）

「……クソ……ガ……キ……」

一瞬空耳のような小さな声で晴香の声のようなものが聞こえた。

思わず俺はマジマジと晴香の顔を見る。

「勝手に……殺すな……」

生きてた！

晴香は衰弱しながらも生きてた！

（この野郎……こんだけの失血で意識も保ってるとは……）

（しぶといな……バカ野郎！）

俺はこれまた予想外の動きをしている……

死にそうになつてゐる晴香を自分の胸元まで抱き寄せ、『抱きしめる』
という行為をしている。

「バカ野郎……お前は俺が殺すんだ…勝手に死なれちゃ困るんだよ
！」

「……クソ……ガキ……如きに……殺さ……れるくらいなら……」

「もういい喋るな！」

「私に……命令するな……クソ……ガキ……」

俺は強引に晴香の口を自分の口で塞いだ……

純と晴香のちょっと離れた先で、玲依と治臣は顔を真っ赤にしながら2人の行動を見ている。

治臣はさきほど、玲依たちの到着が遅すぎると違和感を覚え、かなりのスピードで合流していたのだった。

「お熱いことで……」

「全くだ……」

玲依と治臣は目だけで会話をし、見ていたという事は純と晴香には黙っておくとルールを設けた。

9月3日

「修、前方からハンター接近中でありますっ！」

「よしきた！」

「おっしやー！いこかあ！」

修一、真琴、太志の3人は相変わらずハンターに襲われる毎日で、もはやハンターと対峙するものにも違和感もなく、当然のように殲滅していく。

「太志！パワーブレイクはいけそうか？」

「だめだな……今回は頭だわ……」

「太志君気にしない、気にしないっ！」

「おう！真琴ちゃんありがとな！」

太志のスキル『能力変化』で変更できるのはランダムで、いざというときに検討違いの能力がSSになるのが玉に瑕なのだ。

「んじゃ…今回はワシがやったるわ！お前ら2人は黙ってみとき」

「修…危ないってば…私にも手伝わせてや」

「そうだぞ？修一！相手は1人だが、ハンターである事には間違いないやん？」

そんなやり取りをしていると当然。

ハンターは待つてくれるという事をしてくれなく、いきなりスピードを高め、3人の方へ接近を開始する。

近づく必要があると考えれば、今回のハンターは近距離型である可能性が高いと予想できる。

「ほら！来おつたぞ！」

3人は瞬時に戦闘モードの頭に切り替わる。

まだ深手という深手を受けてはいないものの、ハンターの強さは身を持って体験しているため油断は一切していないのだ。

スキル発動

インビジブル

突如、3人の目の前から近づいてきていたハンターの姿が忽然と消えた……

「なっ！」

「ハンター消えた!!」

「違う!おそらくあれは姿を『見えなく』したんだ!スキルだと思う!」

「どつちも一緒や!!!!」

太志の冷静な反応に修一と真琴は同時に叫ぶ。

「あかんて…これあかんて……」

「修……」

「2人ともまずは落ち着いて…ハンターの行動を読むんだ!」

「あほか!!!!」

太志の冷静な反応に今度は真琴だけが突っ込む。

ハンターの姿は見えないものの、なんとなく自分たちに向けられている殺意のようなものは肌で感じている。

3人の配置は横一列。

もし、ハンターが近距離型で、武器も接近戦仕様の物ならば、攻めやすいのは両端の太志か修一になる可能性が高い。

「そうか……わかったぞ!」

「太志君? どないした?」

「なんか考えが浮かんたのか?」

「ああ……とっておきの方法や！」

次の瞬間、太志は右手に持っていたナイフを自分の左腕に刺した！

「あほ！太志なにしとん！」

「太志君……」

修一と真琴は呆れたような……そんな表情で太志を見ている。

「いいからみててみ？」

太志はすぐに左腕からナイフを引き抜く。

すると当然のように左腕からは夥しい量の血が溢れ出す。

太志は狂ったように自分で傷つけた左腕を振り回している。

真琴や修一にも太志の血が飛び散り、付着し始める。

「太志……気でも狂ったんか？」

「修！ちゃう！あそこや！あそこみてみ……！」

真琴がある部分を凝視している。

修も真琴に釣られてその一点を見つめる。

世にも不思議な光景……

なんと目線の先には太志の血が浮いている……

ほんの2、3滴だが……

宙に浮いてる血はかなり不自然であるため、目を凝らさずとも確認できる。

「なるほどな……太志！考えたなあ」

「太志君！まじで見直したわあ」

「ほとんど勘だったけど…やってみてよかった…」

「ま！後は俺らに任せておけ！太志！止血忘れるなよ！」

修一は先日ハンターを倒したときに奪った日本刀のような刃物で宙に浮いてる太志の血液のある空間に切りかかる！

真琴は先日偶然発見した鉄パイプがお気に入りになったらしく、ペンキなどを塗ってかわいらしく塗装し、それを武器として愛用している。

修一が切り込んだあとに真琴が殴りかかるのがいつもの必勝パターンである。

意外とも言つべき方法であっけなく姿を確認されてしまったハンターであったが、氷のような冷たい殺意は変わらず、すぐに切りかかる修一へと対象を移す。

スキル発動

吸収

真琴はハンターに一瞬の隙が出来たと解釈したらしく、すぐさま自

分のスキルを発動させる。

真琴のスキル説明 - - - - -

スキル名：吸収

扱うことができるのは死神の威光を受けている者に限られる。使用者が対象へ攻撃、又は使用者へ対象が攻撃などを行った場合。被害の大小に関わらず、対象の戦闘値の一部を使用者が吸収する。対象の戦闘値が0以下になる場合、対象は死亡、又は行動停止となる。

- - - - -

ガッキーーーーン!!!!!!!!!!

修一の武器にハンターの武器がぶつかる金属音が響いた。

「修、そのままそのまま」

真琴はニコニコとしながらハンターの背後と思われる場所へ移動。

修一の顔をにこやかな顔で眺めながら……

躊躇なくハンターへ向かって鉄パイプを振り下ろした！

9月3日〜その2〜

文字通りただの鉄パイプ。

別に強力な武器でもなくただの鉄の棒であるのだが……

まるで数十キロはありそうなハンマーを振り下ろしたかのような鈍い衝撃音が響き渡る。

姿は確認できないが、明らかにハンターの頭部が陥没、あるいは破裂したように思える。

しかし、頭部へのダメージはそれほどハンターにとっては痛くないらしく、相変わらず修一の持つ日本刀と武器のようなもので金属音を響かせている。

真琴の狙いは相手の破壊ではなく、スキルによる戦闘値の吸収。

真琴はすぐさま鉄パイプを持ち変え、突きの構えを取る。

「修〜いつくよ〜？」

「おうよー！」

その呼び声と共に修一は3歩ほど後ろへ後退する。

真琴はハンターの心臓があると思われる場所へ鉄パイプをまっすぐ押すように突く！

バキバキバキバキ……

鋭利な刃物ではないのだが、頑丈なハンターの鉄の鎧でもまるで障子のように簡単に貫通させる。

それが決定打になったらしくハンターは姿を現し、そのまま地面へ崩れ落ちる。

「マコ……お前また強くなつたやん」

「そんなことないよあゝスキルのおかげやんか」

太志は真琴の戦闘能力の向上が異常なまでに高ぶっていることに若干の違和感を覚え始める……

（いくらスキルいうても……あんな女の子がこんな……）

（もしかしてあのスキル……それなりにリスクでもあるんじゃないのか？）

考えすぎだと自分に言い聞かせ、太志も止血が終わり、2人と合流する。

いつも通り……

日常生活とはかなりかけ離れた事になってしまったが……

この3人にとってはこれがいつも通りの光景……

それほどRealGameは自然な存在になっていたのだった。

阿久津 修一
あくつ しゅうち

性別：男

年齢：24

職業：ホスト

身長：171センチ

体重：62キロ

力：B
頭脳：A

魅力：S
潜在能力：D

ランキング：125815000中>528位<8位>26位

称号：成せば成る者

戦闘値：101

スキル：開花傾向あり

——新庄しんじょう真琴まこと

性別：女

年齢：21

職業：キャバ嬢

身長：160センチ

体重：49キロ！（本人曰く）

力：C +

頭脳：B +

魅力：B

潜在能力：S

ランキング：125815000中>1029位>44位>4位>8位

称号：死神の寵愛を受ける者

戦闘値：189

スキル：吸収

——野村のむら太志ふとし

性別：男

年齢：25

職業：システムエンジニア

身長：175センチ

体重：56キロ

力：C 頭脳：C

魅力：C 潜在能力：SS

ランキング：125815000中>403位>10位>31位

称号：運次第の男

戦闘値：79

スキル：能力変化 パワーブレイク スキル開花傾向あり

リーダー：阿久津 修一

メンバー：新庄真琴 野村 太志

パーティー評価：B +

撃墜数：H > 17 P > 34

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

ハンター残り：65体

9月4日

とある屋内の立体駐車所に車を止め、外には治臣が片手にマヨネーズのチューブを持ちながら待機している。

車内には後部座席に横になっている晴香。今は意識がないらしく、激しい吐息だけが聞こえる。

どうやら左腕を失った時に傷口からバイ菌が入ったらしく、それにより高熱を出して苦しんでいるようなのだ。

その心配もあるのだが、玲依たちはそれよりもっと重大な心配事が一つあるようだ……

運転席に純、助手席に玲依が座り、2人は険しい顔をしながらなにかの相談をしている。

「このペースでいけば、明日には無くなるな……」

「やっぱ無駄に使いすぎてたのが痛いよね……」

「そうだな……俺が遊んだりしないでちゃんと倒してきていたら……」

「純君のせいじゃないよ？ 晴香さん以外……拳銃の扱い方なんてみんな知らなかったんだし……」

重大な心配事……

つまり、残弾数である。

「晴香はしばらく戦えない……というかこのままだと本当に命も危ない……」

「医者の知り合いなんていないし……そんな施設も今は……」

「ああ……おそろくな……」

「残り67個か……」

「3人で分けて1人20発前後つてところだろうな……」

「厳しいね……」

「ああ……」

晴香の心配と弾薬の心配ですっかり純と玲依は気が落ちてしまっている。

「もう1回警察行って……」

「やっぱそれしかないかぁ……」

「でもな……俺と同じようなイベントとやらをしているやつはかなりいると思う」

「どういう事？」

「警察行っても弾薬があるのかどうかわからんって事だ……」

「なっ!!なるほど!純君頭良いんだね!」

「玲依ちゃん……前から思っていたんだが……」

「なに??」

「それは天然なのか?故意なのか……?」

「う……頭弱い子で……すみません……」

ピピッピピッ……

治臣と合流したときに治臣から受け取った不思議なケータイのようなものが鳴る。

名称は『Analysis Persons』長くて覚え辛いのでAPと呼んでいる。

それは手首につけるタイプのケータイのような形で、一度つけたらなぜか取り外しができなくなるという得体の知れない道具である。

どうやら装着するときに痛みすら感じないほどの細さの針のようなものが無数に手首に刺さり、それで完全に固定されてしまう仕様らしい……と治臣が言っていた。

当然、玲依と純はそんなものつける訳が無いと断固拒否していたのだが、どうやら装着しなければ起動すらない仕組みになっているらしく、しぶしぶ右手首に装着したのだった。

左ではなく右につけようと提案したのは、純だ。

理由は聞くまでもないと玲依は快く承諾した。

そのAPから着信音のようなアラームになる。

このアラームは今日はこれで3度目になる。

自分らの周囲に自分らに向けて敵意がある者が出現したという知らせである。

玲依のスキル『リーダー』も似たような力を持っているのだが、知れる情報は位置情報だけであるので、それよりもAPの機能のほうが具体的に知れるという点では優秀だと思える。

APの画面には自分中心に大きな円が描かれており、まさにリーダーをそのまま絵にした感じの表記図である。

そこにAPの所持者に敵意がある者が赤い点、敵意がない者は緑、味方と思われる者は青の点で表示されるのだ。

難点をあげるとすればこの円の範囲…縮尺など一切表記されておらず、場所によって広範囲になったり狭範囲になったりバラバラなのだ。

しかし、方角の表記はしてあるのでどの方向にいるのかはわかるのだ。

北東の方角に赤い点が5個確認できる。

おそらくはハンターが5体いると容易に想像できるのだ。

「戦う？」

「1体に使える弾薬は多くて3発だな……」

「それで大体15発か……」

「残り60発を切るか……」

いつもなら、俺がいつてくるぜ！

と……純が走り出し、慌てて晴香が後を追う感じで行動するのだが。

今は状況が違いため、純も軽率な行動を控えるようにしている。むしろ、晴香の左腕の損失に対して今も嫌悪感を感じているため、以前の純とはまるっきり別人のような性格になっているのだ。

「やめておこう。治臣も今のAPのAlarmは聞いたと思うし、すぐに場所を変えるぞ！」

純らしくない発言に玲依は動揺しながらも外にいる治臣の元へ走り出した。

9月4日〜その2〜

現在時速120キロ……

冷や汗一つ掻かず、冷静にハンドルを握っている治臣。

助手席には窓から真後ろを警戒している純。

後部座席には横になったままの晴香。

車の真後ろには足が車輪になっているハンターが5体。

それに玲依が1人で対峙している。

かなりの速さで移動しているはずなのだが、まるで徒歩で歩くよりも遅くゆっくりと車は動いている。

玲依のスキル『スロウ』が発動しているため、玲依以外の時間の流れは非常に遅くなっているのだ。

-----『スロウ』のスキル説明。

レーダー使用中に発動するか否か選択ができる。レーダーの範囲内にいる本人を除いた全ての物体の動き（視覚と聴覚を除いた全て

の感覚）を鈍化させる。スロウの持続時間はレーダーの継続時間と同じである。スロウの解除方法は、本人がレーダーの発動をやめるか、対象が死亡または行動停止になった場合に自然に解除させる。

リスクあり

- - - - -

玲依は落ち着いた動きでゆっくりとハンターの心臓に丁寧に2発の弾丸を撃ち込んでいく。

合計10発。1体に2発ずつの弾丸が打ち終わるのを確認。

ハンターへの『スロウ』の効果が切れ、ものすごいスピードでハンターは前方へ向かって倒れ火花を散らしながら鉄の塊と同然になっていく。

すぐさま、玲依は車へ乗り込み、『スロウ』の解除を宣言する。

「玲依ちゃんおつかれ！」

「渡辺さんナイスだ！」

『スロウ』が解除された。

治臣はいつも通りの動きで、徐々に車のスピードを緩め、いつも通

りのスピード（時速60キロ）を維持する。

純もほっと一安心したらしく、すぐに玲依と席が変わった。

「ちょっと疲れちゃった……あたし少し寝てもいいかな……？」

玲依は助手席へ移動し、言葉と同時に眠りについた。

治臣と純は黙って頷き、窮地を救った玲依を賞賛の目で見ている。

「治臣……ついでに医者に寄ってくれないか？晴香が心配だ……」

「ああ……勿論だ。知り合いに医者がいる。そいつの元へ今向かっているところだ」

「まじか！そりやすげえな！」

「場所は千葉県、木更津だ。それまで少し距離があるから、元木君も少し休んでいたらいんじゃないか？」

「俺は休まなくていい……」

「そうか……」

ピピッピピッピ……！

2人の耳に聞いたこともないアラーム音が響く。

発信源はA Pからだ。

「なんだこの音…」

「元木君、ちょっと確認してくれないか？俺は運転中だから…」

「わかった……」

純はA Pの画面を開き、すぐに確認を始める。

- - - - -

新着メッセージあり

件名：予選終了のお知らせ。

本文：お疲れ様でした。ハンター残数が残り3体となりましたので、今この時を持ちましてReal Game予選の終了をお知らせ致します。尚、本戦の開始日時は9月7日、0時01分からの予定でございますので、どうぞ！それまでは自由にお過ごし下さい。

- - - - -

「意味がわからん……」

「説明してくれ……」

純は受信したメッセージをそのまま読み上げる。

「なるほど……つまり7日までは、ハンターから襲われることはな
いって事だな」

「そうか……しかし、7日から本戦ってことは……」

「ああ……更なる危険が待っているかもしれないという事だ……」

「隻腕になってしまった晴香じゃ……持ち堪えられるのか……」

「元木君……そんなに晴香が心配か？」

「少なくとも俺にも責任はあると思っている。普段どおりあのハン
ターを確実に倒してればこんな事には……」

「じゃあ……元木君？」

「ん？」

「晴香の兄として言うておく！晴香をこれからも守ってやってくれ」

「もちろんだ…死んでもお前を守るって晴香には言うてあるつもりだから…」

「そうか…安心したよ…」

（純君……くさっ……）

朦朧とした意識であつたが、玲依はちゃっかりと聞き耳は立てていたため、今の会話はほぼ全部聞いていたのだ。

クスクス……

と軽くニヤけながら、玲依は再び眠りの世界へ堕ちていった……

——わたなべ
渡辺 玲依

性別：女

年齢：23

職業：OL

身長：157センチ

体重：48キロ！（本人曰く）

力：C 頭脳：C

魅力：A 潜在能力：測定不能

ランキング：125815000中>365位>102位>85位
>11位

称号：危険な者

戦闘値：97

スキル：リーダー スロウ

——— 神藤 治臣
しんどう はるおみ

性別：男

年齢：27

職業：副社長

身長：177センチ

体重：68キロ

力：B 頭脳：S

魅力：A 潜在能力：C

ランキング：125815000中>298位>267位>103
位>100位

称号：口が堅い男

戦闘値：????

スキル：空間移動 ? ? ? ? ? ? ? ?

神藤 晴香
しんどう はるか

性別：女

年齢：27

職業：警部補

身長：164センチ

体重：50キロ

力：C+ 頭脳：B

魅力：S 潜在能力：S

ランキング：125815000中>301位>24位>102位

称号：隻腕のスナイパー

戦闘値：76

スキル：精密射撃 スキル開花傾向あり

——
元木もとぎ
純じゅん

性別：男

年齢：20

職業：ヤクザ準構成員

身長：178センチ

体重：69キロ

力：A 頭脳：S+

魅力：B+ 潜在能力：SS

ランキング：125815000中>76位>3位>5位>10位

称号：愛を憶えた者

戦闘値：165

スキル：絶対回避 究極開花傾向あり

|

リーダー：元木 純

メンバー：渡辺玲依 神藤 治臣 神藤 晴香

パーティー評価：B

撃墜数：H > 18 P > 17

- - - - -
ハンター残り3体。

RealGame予選終了。

Real Game 予選結果

8 / 26 { 9 / 6

参加者 > 125815000人

生存者 > 125286728人

死亡者 > 527265人

失格者 > 1007人

ハンター > 740人 > 1747人 > 1722人 > 3人

総合ランキングトップ10

第1位

村尾武蔵

総合：SS+

称号：最強に近い男

戦闘値：2300

スキル：刀の極意

第2位

中距離遠距離併用攻撃タイプ型No99（ハンター）

総合：SS

称号：人格を形成したハンター

戦闘値：2300

スキル：中距離範囲射撃

第3位

New→

赤い男

総合：S+

称号：悪戯が過ぎるGM

戦闘値：????

スキル：空間移動 ?? ?? ?? ??

第4位 New →

神楽由姫

総合：S

称号：目覚めた者

戦闘値：2032

スキル：?? ?? ?? ??

第5位 New →

G a b r i e l K i n g

総合：A+

称号：L u s t m u r d e r e r

戦闘値：1976

スキル：?? ??

第6位

須東恵一

総合：A

称号：明日を伝える者

戦闘値：301

スキル：発信 精神破壊 洗脳

第7位

New
→

岡山桃次郎

総合：B+

称号：破壊する者

戦闘値：203

スキル：???

第8位

New
←

新庄真琴

総合：B

称号：死神の寵愛を受ける者

戦闘値：189

スキル：吸収

第9位

New
←

ハンター
黒沢瑞貴

総合：C+

称号：最恐の一角

戦闘値：1850

スキル：無力化

第10位

New
←

元木純

総合：C

称号：愛を憶えた者

戦闘値：165

スキル：絶対回避 究極開花傾向あり

バグによる死亡者の復活処理。

阿久津 修一

大津 聡

木村 瑠菜

近藤 正隆

三浦 勝也

井上 章正

浦山 島三郎

岡山 桃次郎

佐渡 金乃介

武田 信

花輪 裕美

円 昭義

渡辺 玲依

全13名。

復活ポイントにて再生済。

運営者から一言：

お疲れ様でした。無事に予選終了でございます。7日、0時01分より本戦開始でございます。APは必ず装着で参加して下さいませ。当日、APヘクエストを送信致しますのでお楽しみにお待ち下さい。

PS：パーティー内もしくはチーム内で殺してもクエスト対象には
なりませんのでご注意下さい。

それでは皆様、御機嫌よう。

R e a l G a m e 予選結果（後書き）

R e a l G a m e 序章 完結

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9007n/>

Real Game

2011年9月29日12時11分発行